

令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業

子育て支援の社会的気運の醸成を 図るための普及啓発に係る調査研究 報告書

令和3(2021)年3月



三菱UFJリサーチ&コンサルティング

■目次■

第1章 調査概要	1
1. 調査目的	1
2. 主な調査テーマ	1
3. 調査研究内容と方法	1
第2章 調査全体のまとめ	8
第3章 自治体アンケート調査結果	11
1. 回答自治体の地域	11
2. 近隣住民等からの苦情	12
3. 苦情の発生状況の傾向	14
4. 条例や計画における子育て支援の社会的気運を図るための普及啓発の取組の位置づけの有無	14
5. 子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発にかかる取組の実施状況	15
6. 普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の実施状況	19
7. 参考にした取組の有無	23
8. 子育て支援の普及啓発の取組を実施する理由	24
9. 子育て支援の普及啓発の取組を実施する上での課題	25
10. 子育て支援の普及啓発の取組を実施していない理由	26
11. 民間団体が実施している取組について連携の有無	27
第4章 個人アンケート調査結果	28
1. 回答者属性	28
2. 子育てに関する環境や経験	35
3. 子連れでの公共交通機関の利用	42
4. 子連れでの外出	51
5. 地域における子ども	75
6. 公共の場における子連れ親子の振る舞いに関する意識	81
7. 他人の子どもに対する接し方や他人の子育てに対する意識	95
8. 子育て支援に対する社会の気運	99
9. 子育て等に関する認知	102
第5章 団体インタビュー調査結果	104
1. WE ラブ赤ちゃんプロジェクト（エキサイト株式会社）	105
2. WE ラブ赤ちゃんプロジェクト（世田谷区）	110
3. 地域子育て応援マークプロジェクト（NPO 法人いずみの会）	113
4. &HAND プロジェクト（一般社団法人 PLAYERS）	119
5. 赤ちゃんが泣かない!?ヒコーキプロジェクト（全日本空輸株式会社（ANA）、NTT 物性科学基礎研究所）	125

6. 赤ちゃんタイム（神栖市立中央図書館）	129
7. 芦花公園団地における地域住民との交流の取組（独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構））	132
第6章 有識者インタビュー調査結果	134

（参考資料）

1. 自治体アンケート調査票.....	-参-1-
2. 個人アンケート調査票.....	-参-10-

第1章 調査概要

1. 調査目的

少子高齢化の進展を背景に、子育ての「当事者層」と、子どもがいない「非当事者層」との間で、日常生活におけるさまざまな軋轢が生じており、「公園や保育所で遊ぶ子どもの声がうるさい」といった苦情や、「ベビーカーで電車やバスに乗るのは迷惑」といった意見、さらに SNS 等で「子連れであることをいいことに迷惑行為を省みない」と子連れ層に対して強い非難があげられるなど、社会全体で、子どもの存在に対する寛容さが失われつつあることが懸念される。

子連れや妊婦に対する温かいまなざしが感じられる社会は、子育てがしやすい、子育てが楽しいと感じられる社会であり、そうした子育てがしやすい社会を醸成していくため、子育ての当事者層だけでなく、非当事者も含めた子育て支援の普及啓発や、子育てを応援しようという社会的気運を醸成することが喫緊の課題といえる。

そこで、本事業は、自治体、NPO、企業等が実施している子育て支援の普及啓発の取組や、子育て世帯が地域で生活していくうえで必要と考える社会的な配慮や取組等について、アンケート・インタビューを通じて収集・整理を行い、未就学児など小さな子どもを育てる世帯が、子育てしやすいと感じられる社会に向けて子育て支援の社会的気運の醸成を図る上で参考に資する資料を作成することを目的とする。

2. 主な調査テーマ

以下の3点を明らかにすることを目的として実施した。

- (1) 自治体における子育て支援の普及啓発を図る施策の実施状況
- (2) 当事者層・非当事者層の意識及びニーズの把握
- (3) 今後の子育て支援、特に非当事者層に対する普及啓発の課題及び必要な支援策

3. 調査研究内容と方法

(1) 自治体アンケート調査

①調査目的

全国の自治体における、子育て支援に有効な普及啓発の取組事例の収集及び非当事者層に向けた子育てに関する理解促進の必要性の認識等について把握することを目的として、自治体アンケート調査を実施した。なお、取組の収集にあたっては民間団体や個人が主体であるものも含めて広く収集することとし、当該自治体で取組を実施している場合は、その実施状況や経緯についても把握することとした。

②調査対象

全国の47都道府県および市区町村1,741団体（区は東京23区）

③調査実施方法

郵送配布・郵送回収

④調査実施時期

令和2年10月26日（月）～12月3日（木）（締切：11月18日（水））

⑤回収状況

	有効回収数	有効回収率
全体	1,047	58.6%
都道府県	38	80.9%
市区町村	1,002	57.6%

注：市区町村コードが無回答であるなど、自治体名を特定できない場合は都道府県・市区町村別クロス集計の対象外としている。

⑥主な調査項目

自治体アンケート調査の主な項目は、以下の通りである。

大分類	主な設問
I. 回答自治体について	・ 市区町村コード ・ 自治体名
II. 子どもや子育て家庭をめぐり近隣住民等からの苦情について	・ 子どもや子育て家庭をめぐり近隣住民等からの苦情について ・ 3年前と比べた苦情の発生状況
III. 子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組について	・ 条例や計画に取組を位置づけているか ・ 子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組の実施状況 ・ 具体的な取組内容（事業・取組名、開始時期、担当部局、連携先、事業内容等） ・ 参考にした他の取組 ・ 取組を実施する理由 ・ 取組を行う上での課題 ・ （取組を行っていない自治体）取組を実施していない理由
IV. 民間の実施主体による子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組について	・ 具体的な取組内容（事業・取組名、実施主体、取組の概要、貴自治体との連携の有無等） ※管内地域に限らず、他地域や全国的に行われている取組も対象とする。

（２）個人アンケート調査

①調査目的

子育て当事者・非当事者それぞれについて、子連れの外出をめぐる意識及び支援に対するニーズ等を把握することを目的として、アンケート調査を実施した。

具体的には、子育ての当事者については、外出を中心に、子育ての困りごとや心理的なストレスなどについて、非当事者については、子育て一般に関する情報や知識を得る機会の有無、子連れ家族に対する意識、自身が声かけや手助けをすることに対する意識の実態について聴取し、両者の意識にどのような違いがみられるか把握を行った。

②調査対象

インターネット調査会社の登録モニターのうち、以下のいずれの条件も満たしている者。また、回答者の地域的な偏りを防ぐため、国勢調査の地域ブロック別人口に応じて、回答者の割付を行った。

対象	男性	女性	合計
①乳幼児層（20～40代で3歳未満の子どもがいる人）	500	500	1,000
②未就学児層（20～40代で末子が3歳以上～未就学児の人）	500	500	1,000
③子どもがいない層（20～60代で子どもがいない人）	500	500	1,000

③調査実施方法

インターネットモニター調査

④調査実施時期

令和2年11月12日（木）～11月13日（金）

⑤回収状況

有効回収数：3,000件

※インターネットモニター調査のため、有効回答率は算出していない。

⑥主な調査項目

個人アンケート調査の主な項目は、以下の通りである。

大分類	子どもがいる層への調査項目 （調査対象者層①②）	子どもがいない層への調査項目 （調査対象者層③）
I. 回答者属性	・ 性別 ・ 年齢 ・ 子の有無、人数、年齢 ・ 同居家族	・ 居住地 ・ 学歴 ・ 就労形態 ・ 年収

大分類	子どもがいる層への調査項目 (調査対象者層①②)	子どもがいない層への調査項目 (調査対象者層③)
Ⅱ. 子育てに接する機会	・ 家族や友人を通じた子どもと接する機会 ・ 仕事を通じて子どもと接する機会 ・ 子育てに関する情報に接する機会	
Ⅲ. 子育ての状況	・ 子育ての楽しさ	
Ⅳ. 子どもとの外出について	・ 子連れで外出する際の移動手段 ・ 子連れでの公共交通機関の利用について ・ 子連れでの公共交通機関の利用時にうれしかったり励まされたことがあるか ・ 子連れでの外出を控えている場所 ・ 子連れでの外出を控えている理由 ・ 子連れでの外出に際して周囲から声かけや手助けをされたことがあるか ・ 子連れでの外出に際して周囲から声かけや手助けされることへの抵抗感 ・ 子連れでの外出時にうれしかったり励まされたことがあるか	・ 子連れでの公共交通機関の利用について ・ 子連れで利用している親子に対する手助けや励ましをしたことがあるか ・ 子連れでの外出を控えてほしいと思う場所 ・ 困っている様子の子連れの親へ声かけや手助けをしたいと思うか ・ 困っている様子の子連れの親へ声かけや手助けすることへの抵抗感 ・ 子連れでの外出時に声かけや励ましたりしたことがあるか
Ⅴ. 地域や住まいでの子育てについて	・ 公園や自宅生活で近隣住民等に迷惑がかからないか気になるか ・ 保育所などにおいて、子どもの遊ぶ声などで近隣住民等に迷惑をかけていると思うか ・ 公共の場で子どもが泣いたり騒いだりすることについて	・ 公園や自宅生活で近隣に住む子どもの泣き声や足音などを迷惑だと思うか ・ 自宅の隣に保育所などができるとすると、子どもが遊ぶ声などに対する不安を感じるか ・ 公共の場で子どもが泣いたり騒いだりすることについて
Ⅵ. 社会と子育てに関する認識	・ 他人の子どもに関わることにに対する意識 (叱ること、あやすこと、ほめること、親に注意すること等) ・ 子育てしやすい社会かどうか ・ 子育ては親だけが担うものではなく、社会全体が家庭における子育てや教育を応援し、支えていくことが求められるという考え方について ・ 子連れの親子をあたたく見守る人や助ける人が多いと思うかどうか	
Ⅵ. 子育て世帯に対する配慮、支援	・ 子育て世帯に対して必要な配慮や支援	・ 子どもや子育て世帯と関わるについて ・ 子育て世帯に対して必要な配慮や支援
Ⅷ. その他	・ マタニティマーク等の認知度 ・ ベビーカーマークの認知度	

（３）団体インタビュー調査

①調査目的

実施している子育て支援の普及啓発の取組について、取組の経緯・目的、具体的な取組の内容、連携先の有無、実施したことによる効果及び課題等を把握し、今後、取り組みたいと考えている団体にも参考となるよう事例をとりまとめることを目的として、団体インタビュー調査を実施した。

調査は、文献・インターネット・自治体アンケート調査等により情報収集を行った上で、全国の自治体、NPO・子育て支援団体、企業等のうち、非当事者層も含めた子育て支援の普及啓発に取り組んでいる団体や、子育てしやすい社会のために必要な社会的配慮の取組を行っている団体を対象とした。

②調査対象及び調査実施時期

＜団体インタビュー：７件＞

No	取組の名称（インタビュー先団体）	調査実施日
1	WE ラブ赤ちゃんプロジェクト（エキサイト株式会社）	令和２年 12 月 16 日（水）
2	WE ラブ赤ちゃんプロジェクト（世田谷区）	令和２年 3 月 9 日（火） （書面調査）
3	地域子育て応援マークプロジェクト（NPO 法人いずみの会）	令和３年 2 月 10 日（水）
4	&HAND プロジェクト（一般社団法人 PLAYERS）	令和３年 3 月 2 日（火）
5	赤ちゃんが泣かない!?ヒコーキプロジェクト （全日本空輸株式会社（ANA）、NTT 物性科学基礎研究所）	令和３年 3 月 9 日（火）
6	赤ちゃんタイム（神栖市立中央図書館）	令和３年 3 月 9 日（水）
7	芦花公園団地における地域住民との交流の取組 （独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構））	令和３年 3 月 18 日（木）

③調査実施方法

Web もしくは電話によるインタビュー形式

④主な調査項目

団体インタビュー調査の主な項目は、以下の通りである。

大分類	主な調査項目
I. 団体の概要について	・ 団体の設立年 ・ 主な活動内容
II. 実施している子育て支援の普及啓発に係る取組について	・ 取組の経緯・目的 ・ 具体的な取組内容（取組の開始時期、人員体制、普及啓発の対象、利用している媒体、取組にかかる予算等） ・ 取組を行う際の連携先 ・ 実施したことによる効果 ・ 取組を行う上での課題 ・ 参考にした他の取組
III. 子育て支援の社会的気運の醸成を図るために、必要と考える取組について	・ 乳幼児がいる子育て世帯が抱える課題 ・ 子育てしやすい社会づくりのために求められる取組 ・ 子育て支援の普及啓発のために、必要と考える行政やNPO・子育て支援団体、企業等の取組

（４）有識者インタビュー調査

①調査目的

調査の企画や実施方法等についてご意見をいただくほか、子育ての当事者が抱える課題や、子育て支援の普及啓発の参考事例等について伺い、検討の参考とするため、有識者に対してインタビューを実施した。

②調査対象及び調査時期

＜有識者インタビュー：２件＞

No.	インタビュー対象	調査実施日
1	高知大学 教育学部教授 森田 美佐氏	令和２年９月２８日（月）
2	博報堂こそだて家庭研究所 亀田 知代子氏	令和２年９月２９日（火）

③調査実施方法

Web インタビュー形式

④主な調査項目

有識者インタビュー調査の主な項目は、以下の通りである。

大分類	主な調査項目
I. 子ども、子育て家庭をめぐる課題について	・ 子育て当事者、子育て非当事者の意識について ・ 子育て家庭が抱える課題について
II. 子育て支援の社会的気運の醸成を図るための視点と取組	・ 子育て支援の社会的気運の醸成を図るために必要な視点 ・ 子育てしやすい社会づくりのために求められる取組について

(5) 実施体制

①研究員体制

氏名	現職
鈴木 陽子	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 共生・社会政策部 主任研究員
尾島 有美	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 共生・社会政策部 副主任研究員
有竹 麻衣	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 共生・社会政策部 研究員
服部 保志	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 共生・社会政策部 研究員
横幕 朋子	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 共生・社会政策部 研究員

②オブザーバー（敬称略）

氏名	現職
香取 徹	厚生労働省 子ども家庭局 子育て支援課 課長補佐
岩瀬 豊明	厚生労働省 子ども家庭局 子育て支援課 予算係長

第2章 調査全体のまとめ

子育ての当事者が抱える課題の一つに、子連れの外出（公共交通機関の利用、レストラン等での外食等）や、外遊びの際の子どもの声をめぐるトラブルがあげられる。

本事業では、当事者層及び非当事者層の意識及びニーズの把握・整理を目的として、個人アンケート調査を実施した。調査結果をみると、子連れの外出において、「泣いている子どもを白い目で見られたり、親に厳しい目を向けられたりした」「子連れであることにあからさまに嫌な顔をされたり、文句を言われたりした」といった経験を有する割合は、「3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」でもっとも高く、それぞれ約1割となっていた。（図表 68）

また、自分一人と子どもとの外出において、子連れで行ってみたいが出かけることを控えている場所として、当事者層では「3歳未満の子どもをもつ女性／男性」「3歳以上～未就学の子どもをもつ女性／男性」いずれの層においても、「スーパー」「ショッピングセンター・デパート」「レストラン・飲食店」「居酒屋」「公共交通機関（電車）」などが2～3割程度挙げられた。何らか控えている外出先があると回答した割合は、「3歳未満の子どもをもつ女性」では8割強であり、子どもの年齢が小さいほど、また男性より女性の方が、全般的に控えている外出先が多い傾向がみられた。（図表 49）

子連れの外出を控えている理由を外出先別にみると、ほとんどの外出先で、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」「周囲の人の迷惑になりそうだから」が、「通路が狭いなどベビーカーの利用が難しいから」「階段の昇降や荷物を運ぶなど移動に困難が伴うから」という理由を上回っており、バリアフリーなどの物理的な環境の課題以上に、周囲への気兼ねから、子育て世帯が外出行動を控えている様子がうかがえる結果となった。（図表 53～図表 61）

一方で、子連れの外出において、「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」「エレベーターに乗るときに場所を空けてくれた」、公共交通機関で「席や場所をゆずってくれた」「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」「言葉はなかったが、ほほえみかけるなど好意的な態度を示してくれた」など、うれしかったり、励ましてもらった経験があるという人もそれぞれ概ね3割を超えていた。（図表 68、図表 47）

また、子どもとの外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられた経験については、「3歳未満の子どもをもつ女性」では約半数、それ以外の当事者層では3割前後が、そうした経験が「ある（「よくある」又は「時々ある」）」と回答しており、冒頭の子連れの外出において周囲から厳しい目を向けられたり、嫌な顔をされた経験がある人の割合を大きく上回っていた。（図表 64）

同様に、当事者層では、「公共の場で、あなたの子どもが泣いたり、騒いだりした際、周囲から責められるのではないかと不安になるか」との問いに対して、「そう思う」又は「ややそう思う」と回答した割合は、特に女性では6～7割程度にのぼるが、非当事者層では「公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、あたたかく見守りたいと思うか」との問いに対して、「そう思う」又は「ややそう思う」と回答した割合は、男女とも6割前後みられた。（図表 80、図表 81）

一連の調査結果からは、子育ての当事者層と非当事者層の間で、子どもの泣き声や騒ぐ様子をめぐって軋轢が生じることもある一方、子育て世帯を温かく見守り、手助けをしたいと考えている層も少なからず存在していることがうかがえる。にもかかわらず、現在の日本で、公共の場に

において、子連れの親子をあたたかく見守る人や助ける人が多くいると思うかとの問いに対しては、当事者層、非当事者層ともに、「そう思う」又は「ややそう思う」と回答した割合は3～4割前後と、「そう思わない」又は「あまりそう思わない」を下回った。(図表 96)

調査結果でもう一点、注目すべき点として、非当事者層のうち、「子どもとどのように接してよいかわからない」「子育て世帯がどのようなことに困るかわからない」と回答した割合が男女とも6～7割程度みられており、どのようなことをすれば手助けになるのかわからず、具体的な行動につながっていない可能性がうかがえる結果となった。(図表 97、図表 98)

ただし、当事者層、非当事者層の意識や考え方も一様ではなく、個々人の年齢や性別、都市部・地方部といった居住地域によっても、子どもが泣いたり騒いだりすることへの意識は異なると考えられる。そこで、本調査研究では、公共の場において子連れの親子をあたたかく見守る人や声かけや手助けが行われる社会、子育てしやすいと感じられる社会に向けて気運醸成を図るため、どのような取組が有効か検討することを目的として、有識者インタビュー調査を実施した。

有識者インタビュー調査では、個々人の年齢や性別によって、子連れの外出に対する受容度や手助けをする・しないと行った行動が異なる背景には、子育て体験の有無が関係しているのではないかと、との指摘があった。すなわち、身近に子どもと接する機会があったり、子どもの世話をした経験がある人の方が、子連れの親子に対して寛容な考えを有している傾向があるのではないかと、とのことである。未婚化の進展や、子どもの数が減っていることをふまえると、子育て経験がある当事者層だけでなく、非当事者層も含めて、子育てに対する理解を深めるための取組がより一層重要と考えられる。

非当事者層が子どもと関わる機会を増やしていくという観点からは、例えば子ども食堂や学習ボランティア、お祭りやイベントなど、「食事の支援」、「学習支援」、「地域の交流促進」など特定の目的をもった活動であれば子育て経験の有無にかかわらず参加しやすく、日常的に子どもと関わる機会を持つ人が増えることで、子育てに対して理解のある層が増えるのではないかと、という指摘があった。そのほか、学校等における乳幼児とのふれあい体験や、保育施設・子育て支援施設での学生(中高生、大学生等)へのボランティア機会の提供、さらに社会人になってからも地域活動等の中で、子どもとふれあう機会を増やしていくことも一つの方策になると考えられる。

そのほか、子育てしやすい社会に向けた環境整備については、子育ての当事者層だけではなく、子どもをもたない選択をした人も含めて全ての人が尊重される社会という考え方や制度が浸透している国ほど、「お互い様」という意識をもちやすいのではないかととの指摘があった。

こうした点を踏まえて、団体インタビュー調査においては、子連れでの外出や公共交通機関の利用に際して、子育てを応援していることをステッカー・マーク等で意思表示したり、ICT ツールを用いて手助けを必要とする人と手助けしたい人をマッチングするプロジェクト、当事者層と非当事者層の交流を促す取組等を取り上げ、事例調査を行った。

「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクト、「地域子育て応援マークプロジェクト」は、子どもが公共の場で泣くことを不安に思う親は多いが、周囲で温かく見守っている人もいるということの子育て中の親にさりげなく伝えることにより、子育て世帯を応援したい、励ましたいという取組である。また、「&HAND プロジェクト」は、人の「やさしさ」を届けたいという思いから、手助けが必要な人と手助けをしたいと思っている人を、IC タグ及びスマートフォンのマッチングアプリ等を活用してつなげようとする取組である。これらの取組を普及するにあたっては、インターネット

ト・SNSによる口コミや、地域の子育て支援ネットワークを通じた普及啓発、教育現場との連携等、多様な方法が用いられている。

また、「赤ちゃんが泣かない!?ヒコーキプロジェクト」は、民間企業4社の連携によって立ち上げられたプロジェクトであり、子連れでの外出を支援するとともに、多くのお客様が快適な空の旅を過ごせるよう、赤ちゃんの状態を予測する各種ツールの開発や、耳抜き用のマグ等、各社の得意分野を活かして共通の課題解決に取り組んでいる点が特徴として挙げられる。

「赤ちゃんタイム」は、小さな子連れで図書館を利用することが難しいという声があったことを機に、赤ちゃんや子連れの利用者が来館しやすいよう平日のうち2時間を「赤ちゃんタイム」として設定する取組である。一般利用者に理解を求めることとあわせて、小さな子連れではゆっくり本を選ぶことが難しい、たくさんの本や荷物を持ちながらの移動が大変といった状況もあるため、子連れの利用者をサポートする図書館ボランティアを募集したり、大きな荷物が載せやすいベビーカートを設置するなど、ソフト・ハード両面から図書館利用を支援している。

「団地における地域住民との交流の取組」は、地域のNPOとUR都市機構が協働し、防災イベントや夏祭りなど、誰でも参加できるイベント等を通じて、子育て世帯と子育て世帯以外が顔の見える関係を築き、困ったときには助け合える関係性の構築を目指す取組である。取組を推進する上で、NPOと団地住民の連携が重要な役割を果たしている。活動の理念として、「子育ては地域で行うものであり、親子の関係だけではなく、地域に住んでいる人達が関わっていくことが必要である」という考え方が根底にあるが、日常的な声かけや住民同士の関係づくりを促進することは、団体の高齢化が進む中、高齢者の見守りや手助けにつながることも意識されていた。

各事例の詳細については第5章を参照いただきたいが、いずれも子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の方策として、示唆に富んだ取組となっている。活動の主体についても、行政、民間企業、NPO、地域住民、学校・教育機関等、様々な主体が関わっており、社会全体で子育てへの理解を深めるため、多様な主体による取組が一層進むことが求められる。

最後に、本調査研究では、海外の状況や取組に関する調査は実施しなかったが、インタビュー調査では、海外生活の経験がある方や海外の記者からの声として、日本では公共の場におけるふるまいについて、周囲に迷惑をかけてはいけないという意識が強いが、海外では公共の場で赤ちゃんや子どもが泣いたり騒いだりすることに対して比較的寛容で国によっても受け止め方が異なるとの指摘が複数あった。また、子連れでの外出や公共交通機関の利用に際して、周囲の人から温かい声かけや手助けが得られることも多く、そうした点で、日本より子育てしやすい社会と感じられるとの指摘も複数みられた。

海外と日本の違いがどのような理由や環境によるものなのか調査研究を深めることができれば、子育て支援の社会的気運の醸成や、子育てしやすい社会づくりを進める上で、何らかの示唆を得られる可能性があるのではないかと考える。今後の課題として記したい。

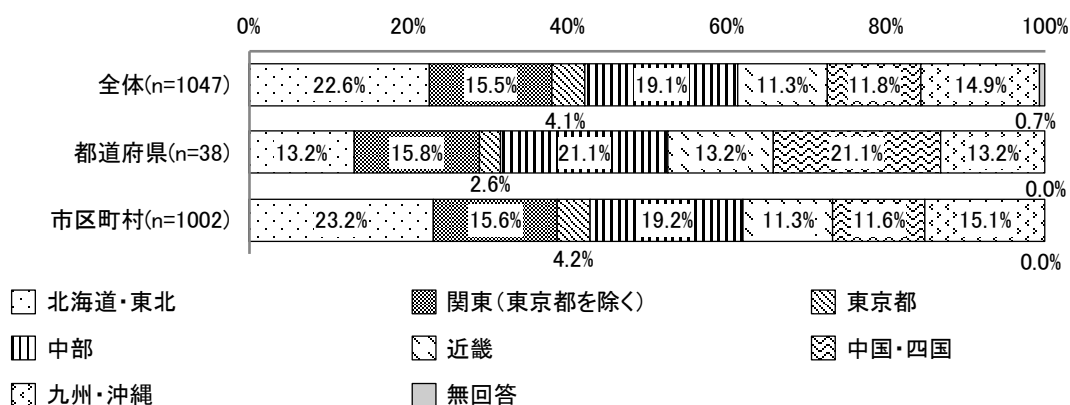
第3章 自治体アンケート調査結果

1. 回答自治体の地域

回答する自治体が所在する地域をみると、「全体」では、「北海道・東北」が22.6%でもっとも割合が高く、次いで「中部」が19.1%となっている。

「都道府県」では、「中部」「中国・四国」が21.1%でもっとも割合が高く、次いで「関東（東京都を除く）」が15.8%となっている。「市区町村」では、「北海道・東北」が23.2%でもっとも割合が高く、次いで「中部」が19.2%となっている。

図表 1 回答自治体の地域：単数回答（F1）



注：市区町村コードが無回答であるなど、自治体名を特定できない場合は都道府県・市区町村別クロス集計の対象外としている。

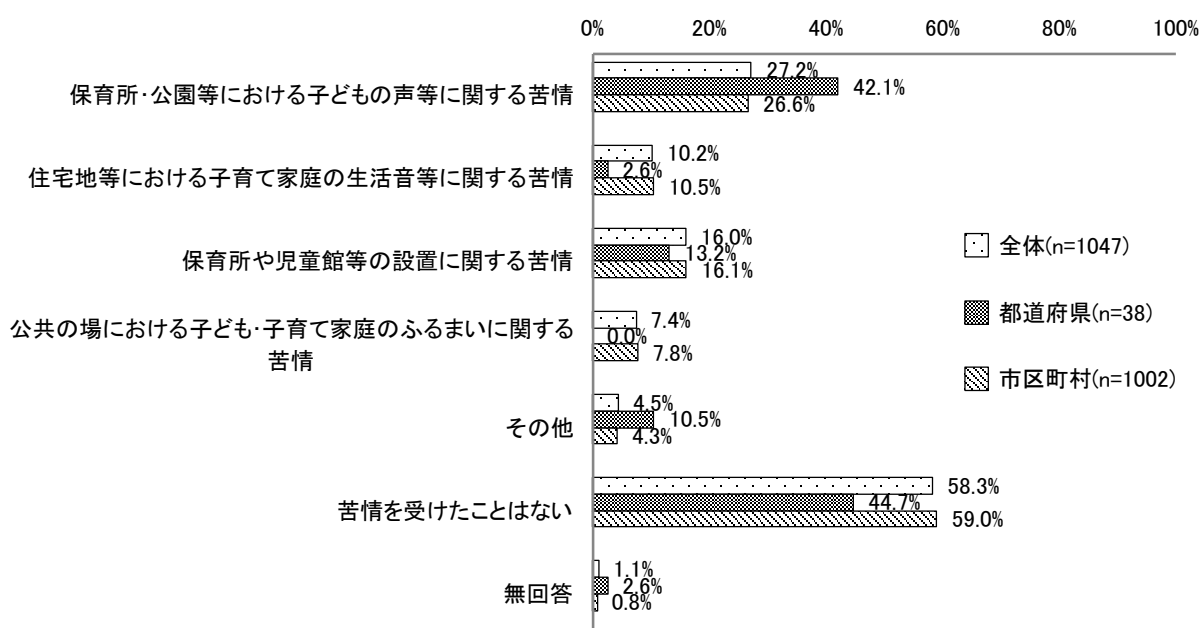
2. 近隣住民等からの苦情

(1) 過去3年間（平成29年度～令和元年度）に受けた近隣住民等からの苦情

回答時点から過去3年間に、子どもや子育て家庭をめぐって近隣住民等から受けた苦情をみると、「全体」では、「苦情を受けたことはない」が58.3%でもっとも割合が高く、次いで「保育所・公園等における子どもの声等に関する苦情」が27.2%となっている。

「都道府県」では、「苦情を受けたことはない」が44.7%でもっとも割合が高く、次いで「保育所・公園等における子どもの声等に関する苦情」が42.1%となっている。「市区町村」では、「苦情を受けたことはない」が59.0%でもっとも割合が高く、次いで「保育所・公園等における子どもの声等に関する苦情」が26.6%となっている。

図表 2 過去3年間に受けた近隣住民等からの苦情：複数回答（Q1）



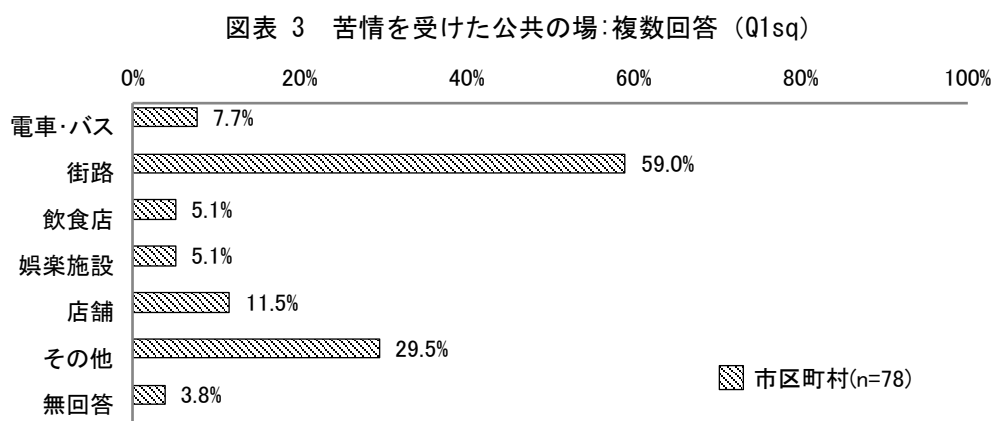
【その他の自由記述】

- ・ 保育所の送迎時の交通マナー、運転マナーについて
- ・ 送迎車による周辺渋滞
- ・ 保育園の送迎にかかる駐車場について
- ・ 広場でのボール遊びについての苦情
- ・ 児童クラブにおける公害苦情（敷地内でのたき火、樹木の管理）
- ・ 園庭の砂が隣接する民家に飛んできて困っている等
- ・ コロナ禍の状況で、子どもを外で遊ばせたりすることへの苦情等
- ・ 園保護者のマスク着用について
- ・ 自分の子どもに注意しない親の意識、子育ての仕方について
- ・ 保育所の運営に関する苦情
- ・ 保育所における行事の音に関する苦情
- ・ 公園等での保育士の言動、保育所での対応

注：「その他」の回答について、類似の回答があった場合は、いずれか1つを代表的な意見として掲載している。
また設問の趣旨と一致しない回答については掲載していない。なお、掲載にあたっては、誤字脱字等の修正を行い、文意が変わらない範囲で文章を整えている。以下同様。

（２）苦情を受けた公共の場

過去３年間に、「公共の場における子ども・子育て家庭のふるまいに関する苦情」を受けたことがある（Q1）と回答した自治体について、どのような場所に関する苦情であったかをみると、「市区町村」では、「街路」が 59.0%でもっとも割合が高く、次いで「その他」が 29.5%となっている。



注：都道府県は該当する団体がなかった（Q1）ため、掲載していない。

【その他の自由記述】

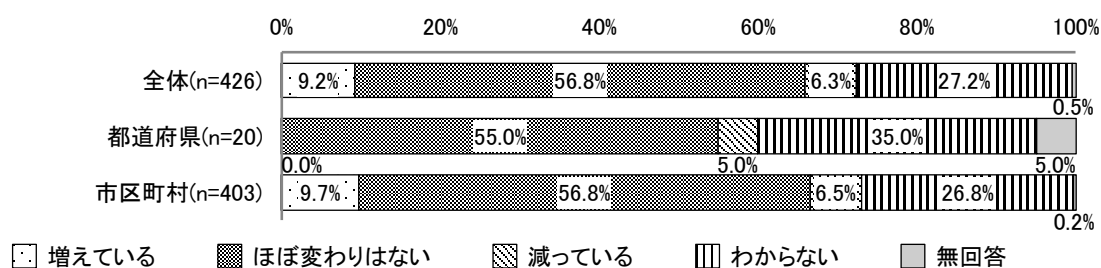
- 保育所内での宗教等の勧誘
- 駐車場、グラウンドなど
- 公園の利用の仕方
- 病院
- 幼稚園のバス停
- 児童館
- 図書館
- 保護者の電動自転車の危険運転

3. 苦情の発生状況の傾向

過去3年間に近隣住民等から何らかの苦情を受けたことがある自治体について、回答時点から3年前（平成29年）と比べて苦情の発生状況に関する傾向をみると、「全体」では、「ほぼ変わりはない」が56.8%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が27.2%となっている。

「都道府県」では、「ほぼ変わりはない」が55.0%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が35.0%となっている。「市区町村」では、「ほぼ変わりはない」が56.8%でもっとも割合が高く、次いで「わからない」が26.8%となっている。

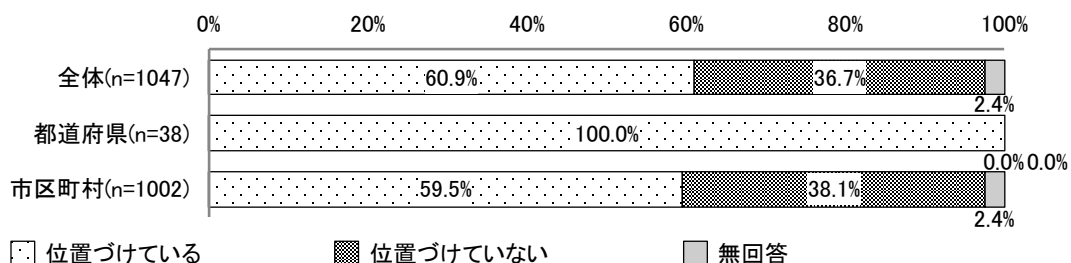
図表 4 苦情の発生状況の傾向：単数回答（Q2）



4. 条例や計画における子育て支援の社会的気運を図るための普及啓発の取組の位置づけの有無

「全体」では、「位置づけている」が60.9%、「位置づけていない」が36.7%となっている。「位置づけている」の割合は、「都道府県」では100.0%、「市区町村」では59.5%となっている。

図表 5 条例や計画における取組の位置づけの有無：単数回答（Q3）



5. 子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発にかかる取組の実施状況

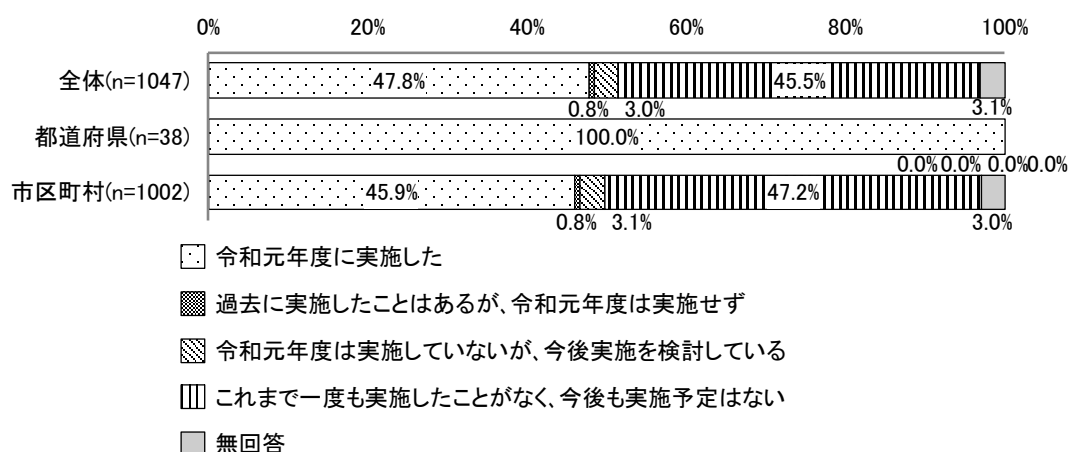
子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組について、「a.子育て支援パスポート事業」、「b.自治体独自の『家族の日』『家族の週間』等の設置」、「c.公共の場における子育て家庭へのサポート」、「d.子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組」、「e.子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組」、「f.公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組」、「g.その他の取組」の7つの分野について、令和元年度の実施状況を把握した。

(1) a.子育て支援パスポート事業

「全体」では、「令和元年度に実施した」が47.8%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が45.5%となっている。

「都道府県」では、「令和元年度に実施した」が100.0%となっている。「市区町村」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が47.2%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が45.9%となっている。

図表 6 a. 子育て支援パスポート事業の実施状況：単数回答（Q4a）

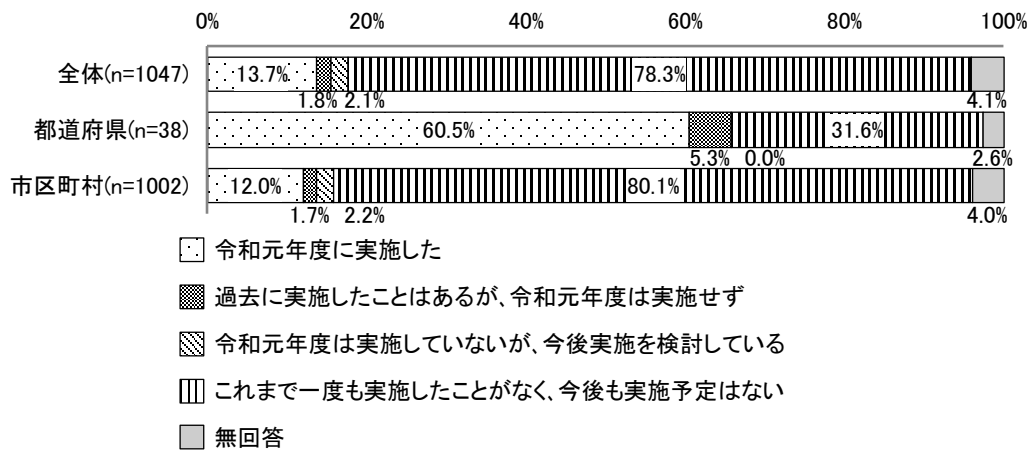


（２）b.自治体独自の「家族の日」「家族の週間」等の設置

「全体」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が78.3%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が13.7%となっている。

「都道府県」では、「令和元年度に実施した」が60.5%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が31.6%となっている。「市区町村」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が80.1%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が12.0%となっている。

図表 7 b. 自治体独自の「家族の日」「家族の週間」等の設置の実施状況：単数回答（Q4b）

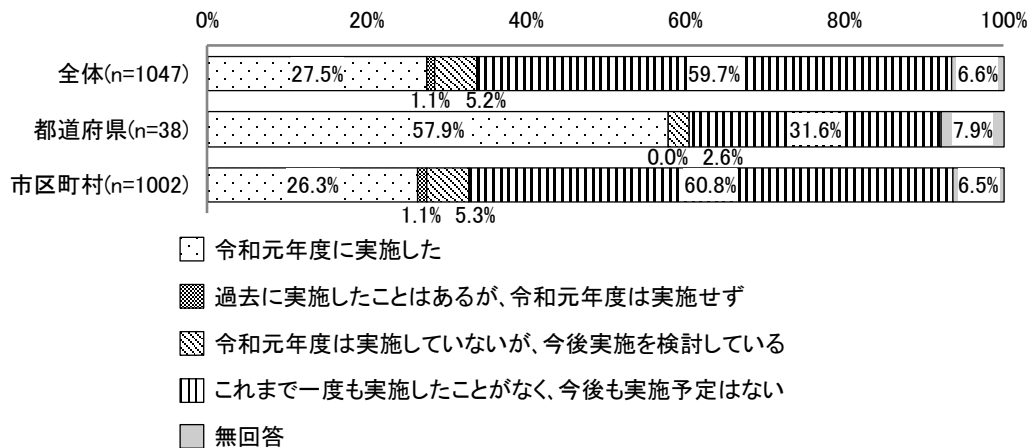


（３）c.公共の場における子育て家庭へのサポート

「全体」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が59.7%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が27.5%となっている。

「都道府県」では、「令和元年度に実施した」が57.9%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が31.6%となっている。「市区町村」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が60.8%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が26.3%となっている。

図表 8 c. 公共の場における子育て家庭へのサポートの実施状況：単数回答（Q4c）

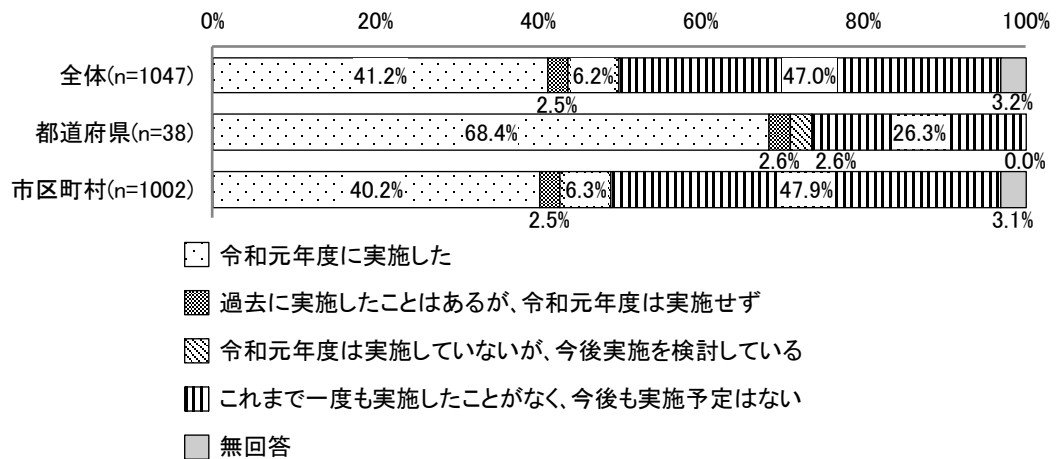


(4) d.子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組

「全体」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が47.0%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が41.2%となっている。

「都道府県」では、「令和元年度に実施した」が68.4%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が26.3%となっている。「市区町村」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が47.9%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が40.2%となっている。

図表 9 d. 子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組の実施状況：単数回答（Q4d）

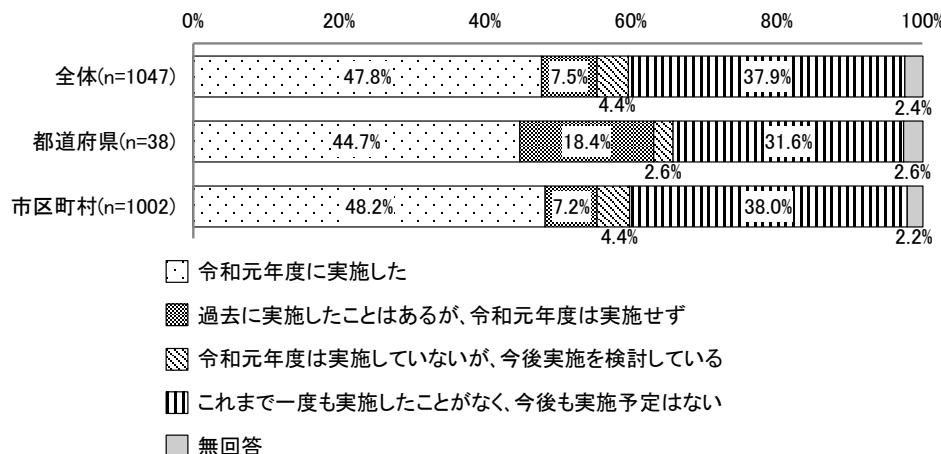


(5) e.子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組

「全体」では、「令和元年度に実施した」が47.8%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が37.9%となっている。

「都道府県」では、「令和元年度に実施した」が44.7%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が31.6%となっている。「市区町村」では、「令和元年度に実施した」が48.2%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が38.0%となっている。

図表 10 e. 子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組の実施状況：単数回答（Q4e）

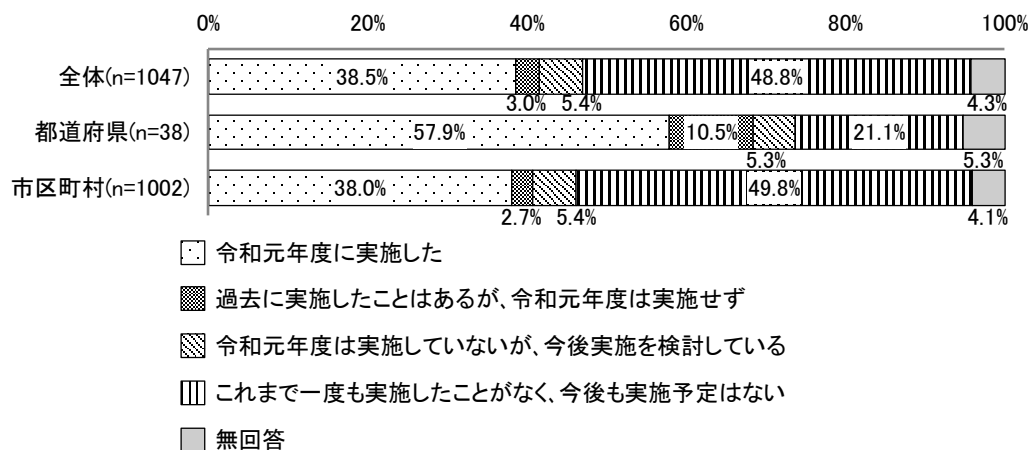


(6) f.公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組

「全体」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が48.8%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が38.5%となっている。

「都道府県」では、「令和元年度に実施した」が57.9%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が21.1%となっている。「市区町村」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が49.8%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が38.0%となっている。

図表 11 f. 公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組の実施状況：単数回答（Q4f）

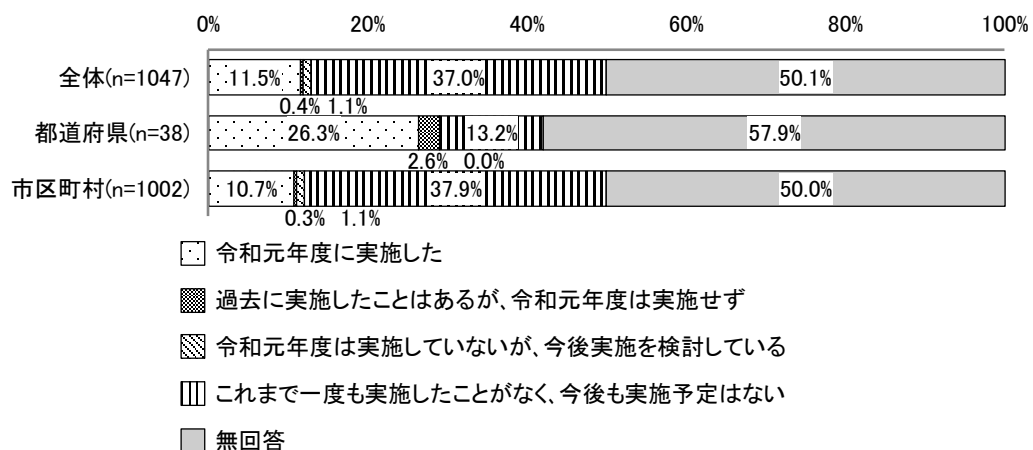


(7) g.その他の取組

「全体」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が37.0%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が11.5%となっている。

「都道府県」では、「令和元年度に実施した」が26.3%でもっとも割合が高く、次いで「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が13.2%となっている。「市区町村」では、「これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない」が37.9%でもっとも割合が高く、次いで「令和元年度に実施した」が10.7%となっている。

図表 12 g. その他の取組の実施状況：単数回答（Q4g）



【その他の取組の具体的な内容（自由記述）】

分類	自由回答の内容
子育て支援に関する講座	- 子育て支援講座の開催 - 男女平等センター講座の実施 - ペアレントサポート講座 - 地域で子育て応援講座
イベント開催	- 子育て応援イベント、フォーラム - 子育て支援フェア
企業、団体への支援	- 子育て支援に取り組む団体・企業等を表彰 - 子育て応援企業認定事業 - 子育て支援に関する事業を行う団体に対しての補助 - 子育てサークル支援事業
ボランティアの育成	- 多世代の交流を活かした子育て支援体制強化事業 - 地域の高齢者による子育て支援ボランティアの人材育成

6. 普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の実施状況

令和元年度に、「c.公共の場における子育て家庭へのサポート」、「d.子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組」、「e.子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組」、「f.公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組」、「g.その他の取組」を実施した自治体（Q4）のうち、普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の名称、開始時期、担当部局、連携先、事業内容について把握した。

（１）普及啓発の効果が大きいと考えられる取組名（Q5①）

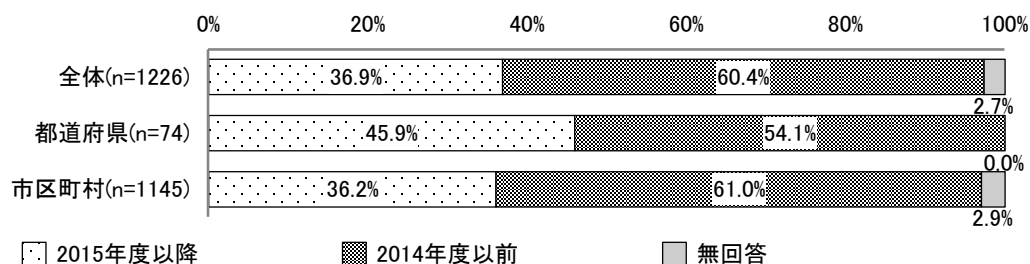
分類	取組名
c.公共の場における子育て家庭へのサポート	- 図書館赤ちゃんタイム - 図書館における子連れ外出サポート - 赤ちゃんの駅事業 - 赤ちゃん休憩室の設置 - 授乳・おむつ替え用テント等貸出 - 各種研修・フォーラムでの託児室設置
d.子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組	- 子育て情報サイトの開設 - 子育て応援ガイドブック、情報誌の作成 - 子育てマップ、アプリの導入 - 子育て応援「キャッチフレーズ」「ロゴマーク」 - 子育て世代支援 PR 事業
e.子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする	- 赤ちゃんとのふれあい体験学習 - 乳幼児ふれあい事業 - 仕事と育児の両立体験事業

分類	取組名
取組	・ 子育て交流ひろば ・ 個人・学生・ボランティア受入事業 ・ 世代間交流事業 ・ 保育所における職場体験 ・ 職場及び地域における、男性子育て応援講座
f.公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組	・ マタニティマーク ・ ベビーカーマーク ・ ヘルプマーク ・ ベビー・ファースト事業 ・ 泣いてもいいよステッカー ・ 地下鉄車内でのベビーカースペース確保とその周知 ・ 子育てにやさしい施設認定事業 ・ 子育て応援隊
g.その他の取組	・ 児童虐待防止のためのポスター掲示、広報への掲載 ・ 子育てと仕事の両立支援推進企業等顕彰事業 ・ 子育て応援企業登録制度事業 ・ 子育てフェスタ、フェア ・ 父親育児支援講座

（２）普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の開始時期

取組の開始時期をみると、「全体」では、「2014 年度以前」が 60.4%、「2015 年度以降」が 36.9%となっている。「2015 年度以降」の割合は、「都道府県」では 45.9%、「市区町村」では 36.2%となっている。

図表 13 普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の開始時期：単数回答（Q5②）



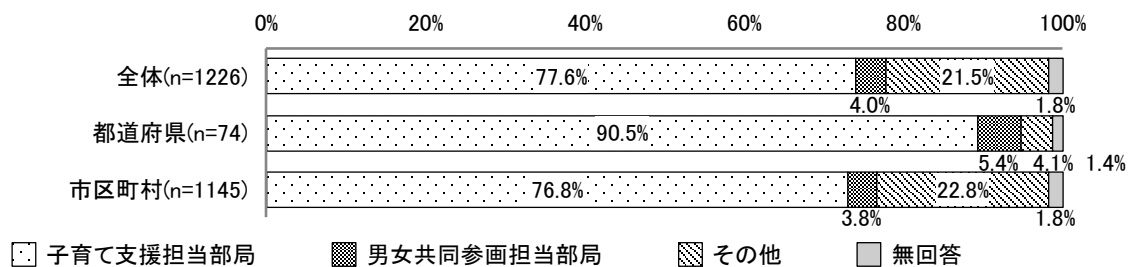
注：Q5 の事例 1～4 に回答があった取組数を n としている。

（３）普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の担当部局

取組を実施している担当部局をみると、「全体」では、「子育て支援担当部局」が 77.6%でもっとも割合が高く、次いで「その他」が 21.5%となっている。

「都道府県」では、「子育て支援担当部局」が 90.5%でもっとも割合が高く、次いで「男女共同参画担当部局」が 5.4%となっている。「市区町村」では、「子育て支援担当部局」が 76.8%でもっとも割合が高く、次いで「その他」が 22.8%となっている。

図表 14 普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の担当部局：単数回答（Q5③）



注：Q5 の事例 1～4 に回答があった取組数を n としている。

【その他の自由記述】

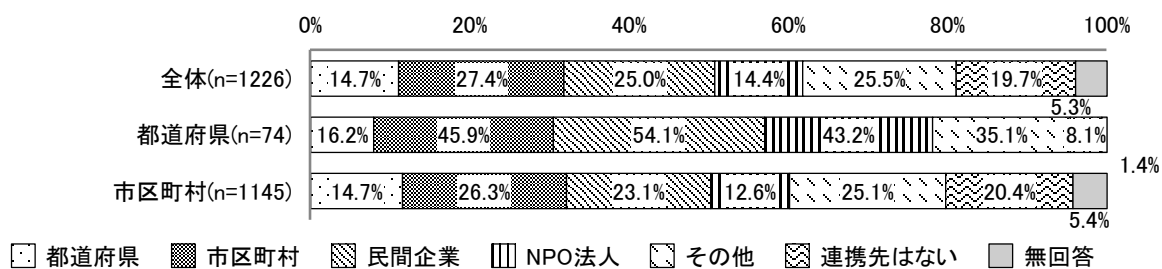
- 広報部局
- 母子保健担当部局
- 少子化対策担当部局
- 地方創生担当部局
- 教育担当部局、教育委員会
- 公共交通担当部局
- 健康福祉担当部局
- 住民生活担当部局
- 雇用・労働担当部局

（４）普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の連携先

取組を実施するにあたっての連携先をみると、「全体」では、「市区町村」が 27.4%でもっとも割合が高く、次いで「その他」が 25.5%となっている。

「都道府県」では、「民間企業」が 54.1%でもっとも割合が高く、次いで「市区町村」が 45.9%となっている。「市区町村」では、「市区町村」が 26.3%でもっとも割合が高く、次いで「その他」が 25.1%となっている。

図表 15 普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の連携先：単数回答（Q5④）



注：Q5 の事例 1 ～ 4 に回答があった取組数を n としている。

【その他の自由記述】

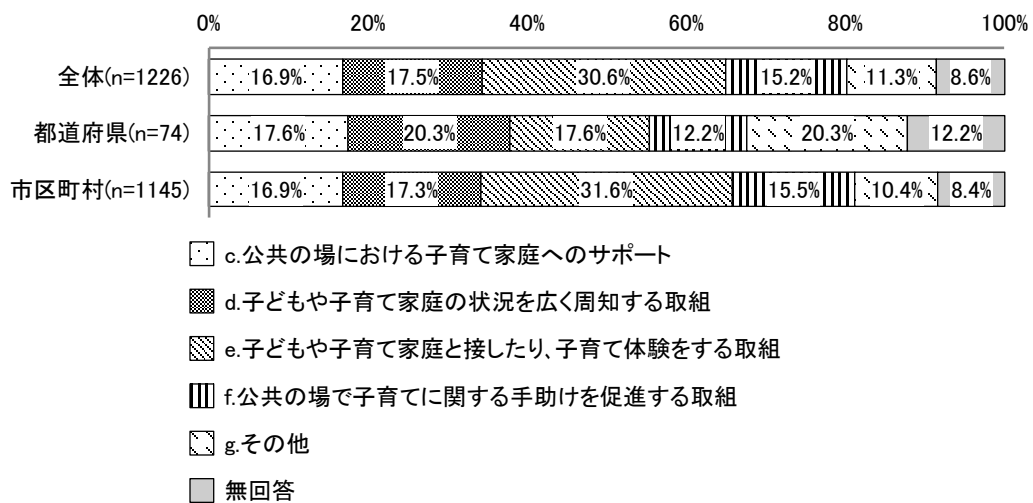
- 地域の子育てサークル、ボランティア
- 教育機関（小学校、中学校、高校、大学）
- 保育所、幼稚園
- 助産師会、病院
- 社会福祉法人
- 民生委員、児童委員

（５）普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の事業内容等

「全体」では、「e.子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組」が 30.6%でもっとも割合が高く、次いで「d.子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組」が 17.5%となっている。

「都道府県」では、「d.子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組」「g.その他」が 20.3%でもっとも割合が高く、次いで「c.公共の場における子育て家庭へのサポート」「e.子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組」が 17.6%となっている。「市区町村」では、「e.子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組」が 31.6%でもっとも割合が高く、次いで「d.子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組」が 17.3%となっている。

図表 16 普及啓発の効果が大きいと考えられる取組の事業内容等：単数回答（Q5⑤）



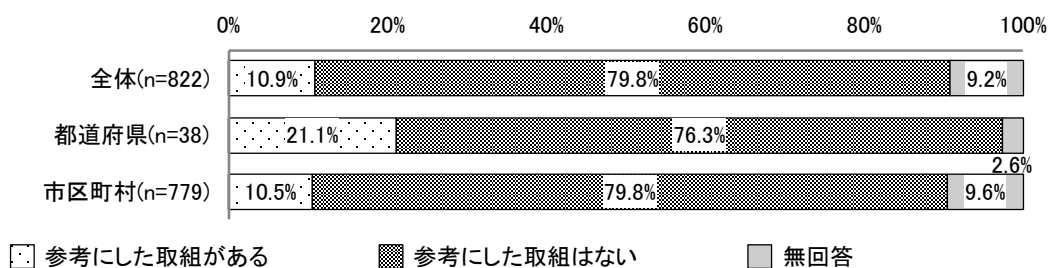
注：Q5の事例1～4に回答があった取組数をnとしている。

7. 参考にした取組の有無

令和元年度に子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を実施した自治体（Q4）について、参考にした取組の有無をみると、「全体」では、「参考にした取組はない」が 79.8%、「参考にした取組がある」が 10.9%となっている。

「参考にした取組がある」とする割合は、「都道府県」では 21.1%、「市区町村」では 10.5%となっている。

図表 17 参考にした取組の有無：単数回答（Q6）

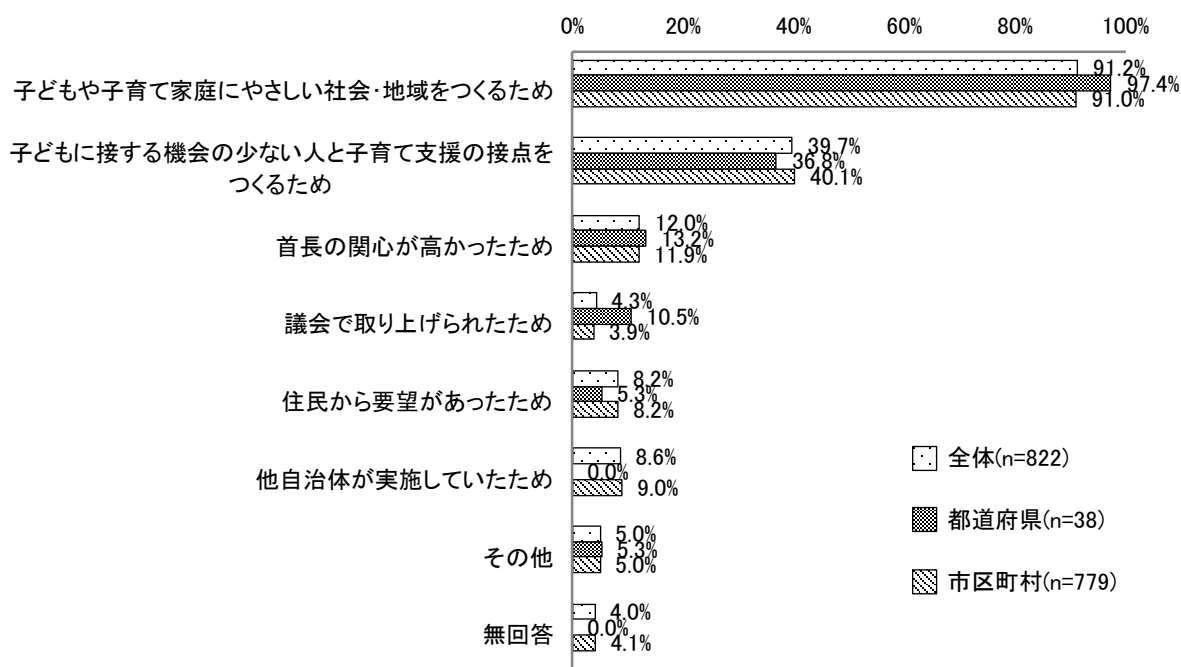


8. 子育て支援の普及啓発の取組を実施する理由

令和元年度に子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を実施した自治体（Q4）について、取組を実施する理由をみると、「全体」では、「子どもや子育て家庭にやさしい社会・地域をつくるため」が91.2%でもっとも割合が高く、次いで「子どもに接する機会の少ない人と子育て支援の接点をつくるため」が39.7%となっている。

「都道府県」では、「子どもや子育て家庭にやさしい社会・地域をつくるため」が97.4%でもっとも割合が高く、次いで「子どもに接する機会の少ない人と子育て支援の接点をつくるため」が36.8%となっている。「市区町村」では、「子どもや子育て家庭にやさしい社会・地域をつくるため」が91.0%でもっとも割合が高く、次いで「子どもに接する機会の少ない人と子育て支援の接点をつくるため」が40.1%となっている。

図表 18 子育て支援の普及啓発の取組を実施する理由：複数回答（Q7）



【その他の自由記述】

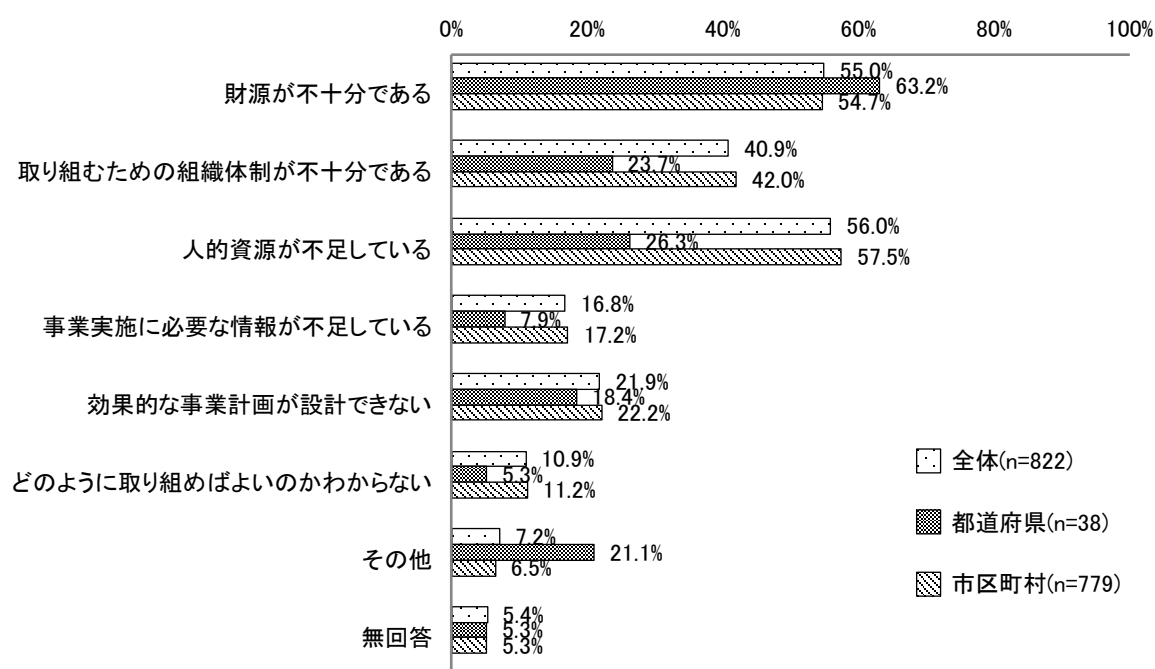
- ・ 都道府県事業へ協力しているため。
- ・ 子どもがのびのび育つ家庭づくり、子どもが安心・安全に育つまちづくり、子どもがすくすく育つ仕組みづくりのため。
- ・ 地方創生・少子化対策のため。
- ・ 男女共同参画社会の実現のため。
- ・ 子育て世帯の現状から必要な事業だと把握したため。
- ・ 妊娠・出産・子育てをする上で地域の理解と直接的な支援が不可欠な状況にあるため。

9. 子育て支援の普及啓発の取組を実施する上での課題

令和元年度に子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を実施した自治体（Q4）について、取組を実施する上での課題をみると、「全体」では、「人的資源が不足している」が56.0%でもっとも割合が高く、次いで「財源が不十分である」が55.0%となっている。

「都道府県」では、「財源が不十分である」が63.2%でもっとも割合が高く、次いで「人的資源が不足している」が26.3%となっている。「市区町村」では、「人的資源が不足している」が57.5%でもっとも割合が高く、次いで「財源が不十分である」が54.7%となっている。

図表 19 子育て支援の普及啓発の取組を実施する上での課題：複数回答（Q8）



【その他の自由記述】

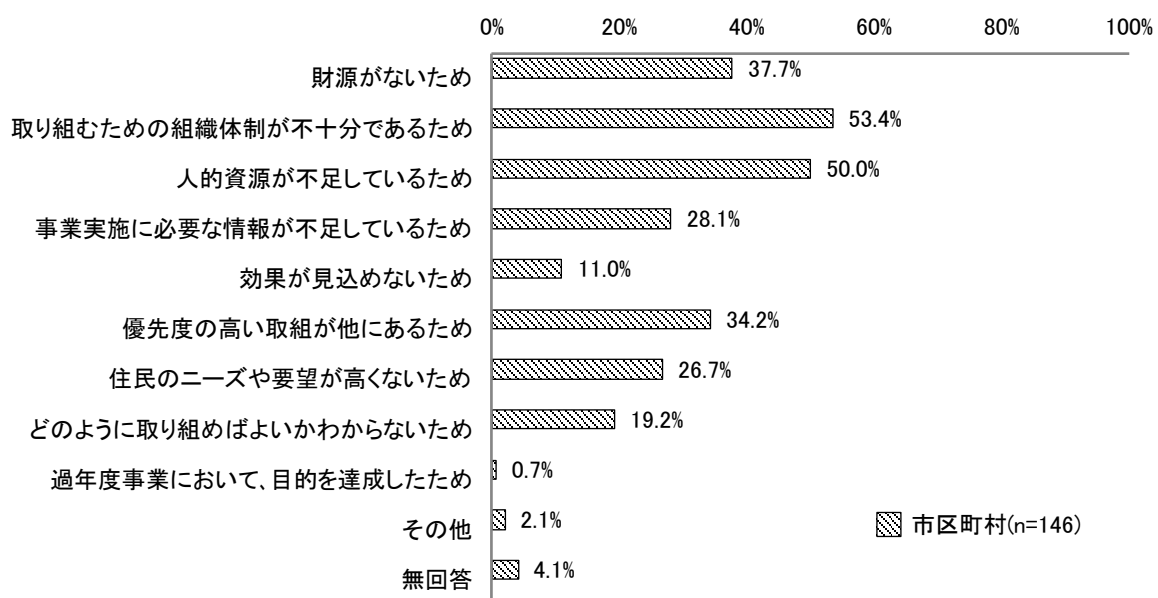
分類	自由回答の内容
取組のニーズと効果	- 普及啓発の取組がどのような効果（アウカム）につながるか、検証まではできていない。 - 事業を実施した場合、その効果を求められても、数値化することが難しく、効果が出るのには時間がかかる。 - 住民のニーズや要望が高くないものがある。
費用負担	- 費用対効果。 - ある程度の事業規模が必要であるため、市が単独で実施することは効果的ではない。
普及啓発の方法、意識共有	- 子育て関連課以外に気運醸成の意識を共有してもらうこと。 - 子どもに接する機会の少ない人・団体（企業等）の動機づけ。 - すべての世代に対して普及啓発をする必要があり、情報が行き届きにくい人々に対する、より効果的な手法を検討していく必要がある。
他部署・機関との	学校と連携する場合、学校行事との調整が難しい。

分類	自由回答の内容
連携	・民間企業や組織・団体等の関わりがないと難しい部分がある。 ・他部署との連携、広域的な連携。 ・子育て支援担当部局との課題やビジョン、取り組むべき事業の共有・連携が難しい。
長時間労働の開発、意識啓発	・性別役割分担意識の解消とそれを実効させるための長時間労働からの脱却（いくらイベントなどやっても物理的に夫婦で参加しづらい状況では、妻ばかりに負担がいく）。 ・母の背景には、情報過多で迷っている、体験不足での不安、地域や支援者から自分の子育てがどうみられているかの不安がある。一方で、支援者や、地域では“子育て支援”のとらえに温度差を感じている。「親育て」「親教育」という言葉がきかれるのも事実。国には、等身大の母たちの思いと、“それでいいんだよ”とあたたかく子育てをみまもる地域の意識醸成の啓発に取り組んでいただきたい。（メディアを活用する等）

10. 子育て支援の普及啓発の取組を実施していない理由

令和元年度に子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を実施していない自治体（Q4）について、取組を実施していない理由をみると、「市区町村」では、「取り組むための組織体制が不十分であるため」が53.4%でもっとも割合が高く、次いで「人的資源が不足しているため」が50.0%となっている。

図表 20 子育て支援の普及啓発の取組を実施していない理由：複数回答（Q9）



注：都道府県はすべての団体が令和元年度に取組を実施しているため、掲載していない。

【その他の自由記述】

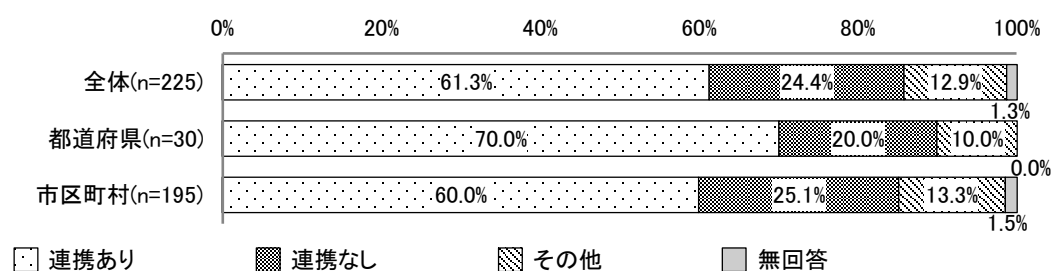
- 県が主体で事業を実施しているため。
- 山間部で人々が集う商業施設や公共交通機関がなく、子育て人口も少ないことから、効果が見込めないため。
- 個々の子育て支援のニーズを聞き取り、柔軟な対応をすることができる環境にあるため。
- 小さい町であり、子育て支援に対して関心もあり、協力的な文化があるため。

11. 民間団体が実施している取組について連携の有無

民間団体（企業、NPO、個人等）が実施している子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組（回答自治体が把握しているもの）について、回答自治体との連携の有無をみると、「全体」では、「連携あり」が 61.3%でもっとも割合が高く、次いで「連携なし」が 24.4%となっている。

「連携あり」の割合は、「都道府県」では 70.0%、「市区町村」では 60.0%となっている。

図表 21 民間団体が実施している取組について連携の有無：単数回答（Q10④）



注：Q10 の事例 1～3 に回答があった取組数を n としている。

【その他の自由記述】

- 将来的に連携する予定。
- 連携協定を結んでいる。
- タイアップでのイベント共催。
- 会場の提供や助成制度。
- バナーの掲載。

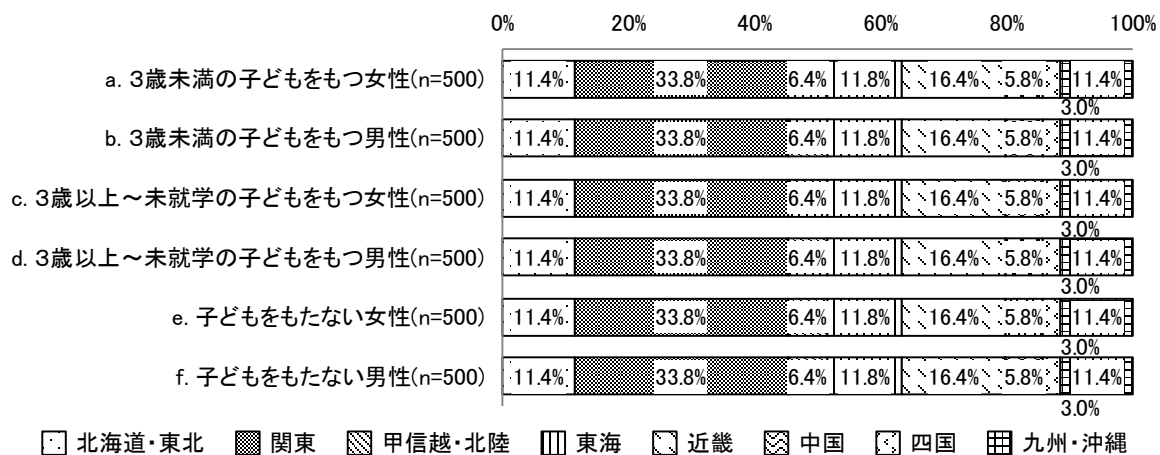
第4章 個人アンケート調査結果

1. 回答者属性

(1) 回答者の居住地

本調査では、インターネット調査における回答者対象者の抽出（スクリーニング調査）において、地域ブロック別に平成27年国勢調査の人口比に基づいて居住地の割付を行った。回答者における居住地の分布は、割付のと通りの比率である。

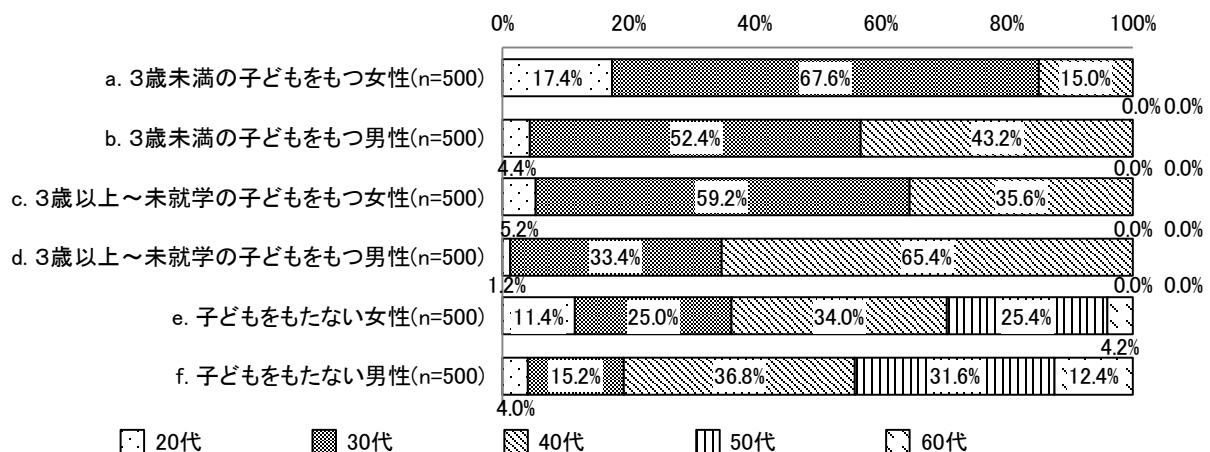
図表 22 居住する都道府県（統合）：単数回答（SQ）



(2) 年齢

本調査では、インターネット調査における回答者対象者の抽出（スクリーニング調査）において、年齢に関する条件を設けた。「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」～「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」は、20～40代を対象とした。また、「e. 子どもをもたない女性」および「f. 子どもをもたない男性」では、20～60代を対象とした。各グループの年齢の分布状況は、以下のとおりである。

図表 23 年齢（統合）：単数回答（Q2）

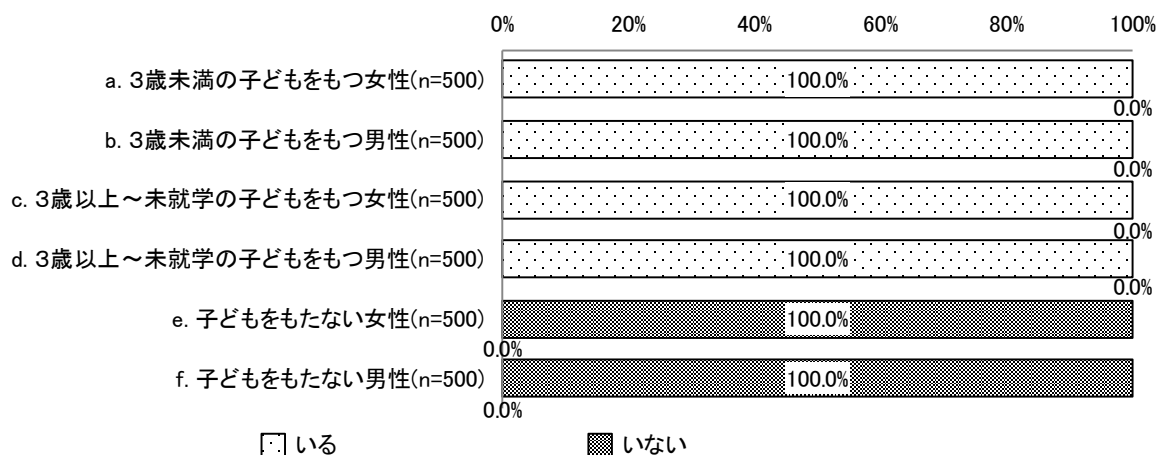


(3) 子の有無

本調査では、子どもの有無を聴取し、当設問への回答結果に基づいて、子育ての当事者層または非当事者層の区分を行った。

すなわち、a～dグループが「当事者層」、e～fグループが「非当事者層」である。

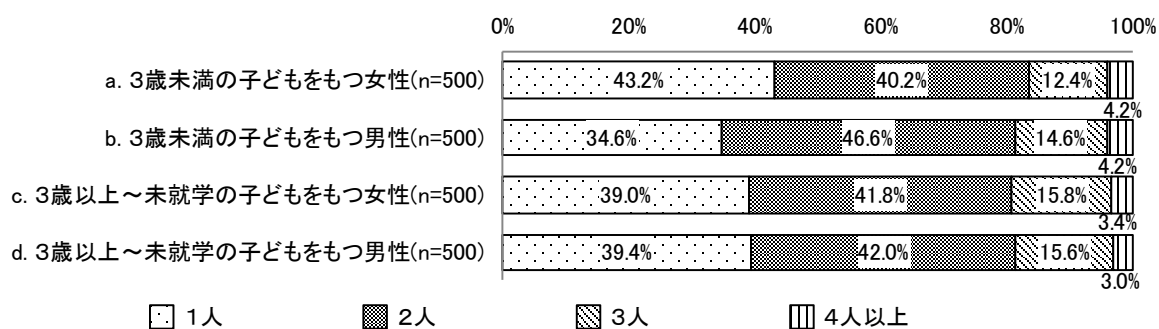
図表 24 子の有無：単数回答（Q3）



(4) 子の人数

子どもがいる回答者層における、子どもの人数は、いずれのグループにおいても、「1人」もしくは「2人」の回答をあわせて8割前後となっている。

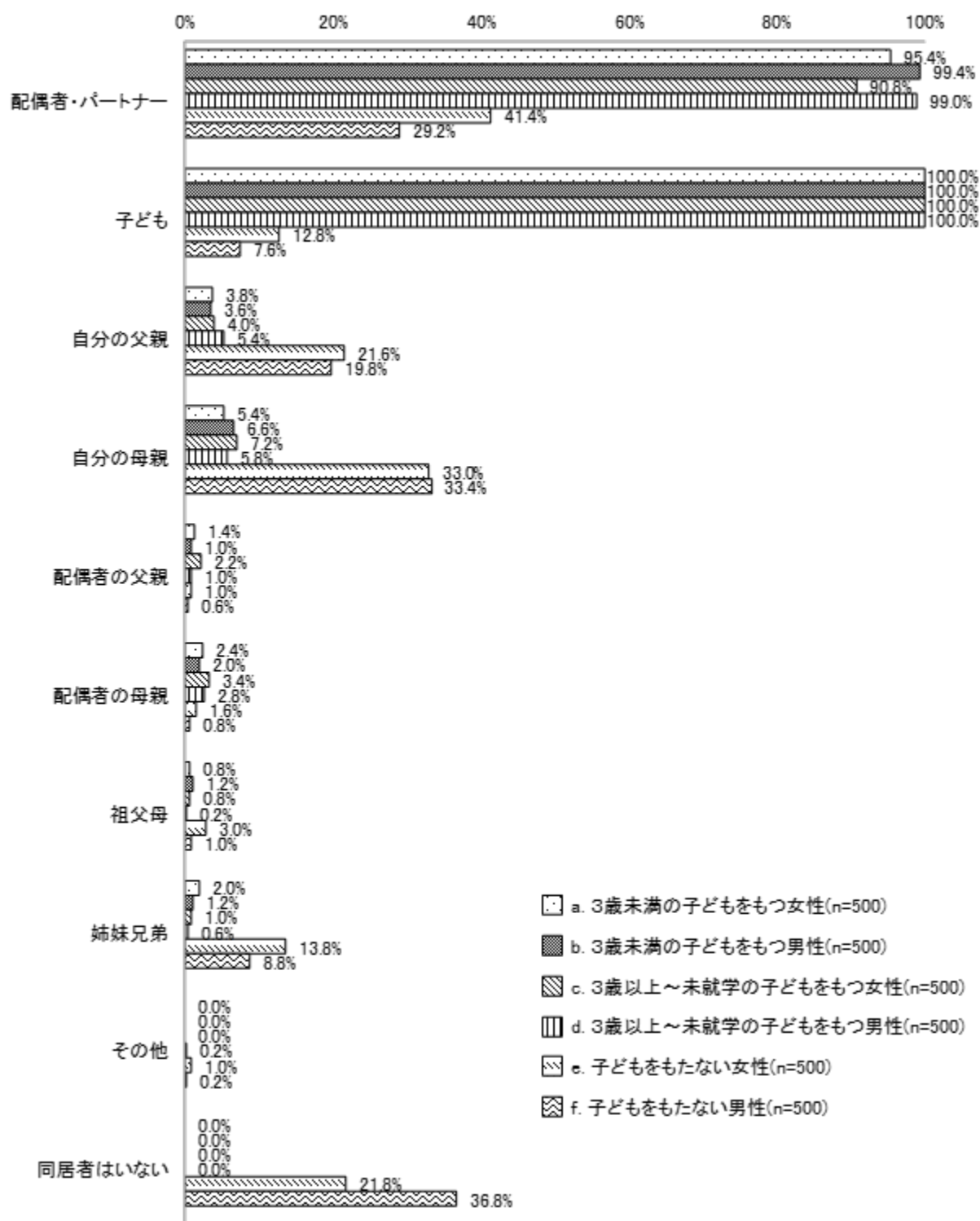
図表 25 子の人数：単数回答（Q3_1）



(5) 同居家族

同居家族については、以下のとおりである。なお、「e. 子どもをもたない女性」および「f. 子どもをもたない男性」において、「子ども」の回答がみられるが、自身が養育者ではない子ども（自身の兄弟姉妹の子どもなど）であることが考えられる。

図表 26 同居家族：複数回答（Q4）



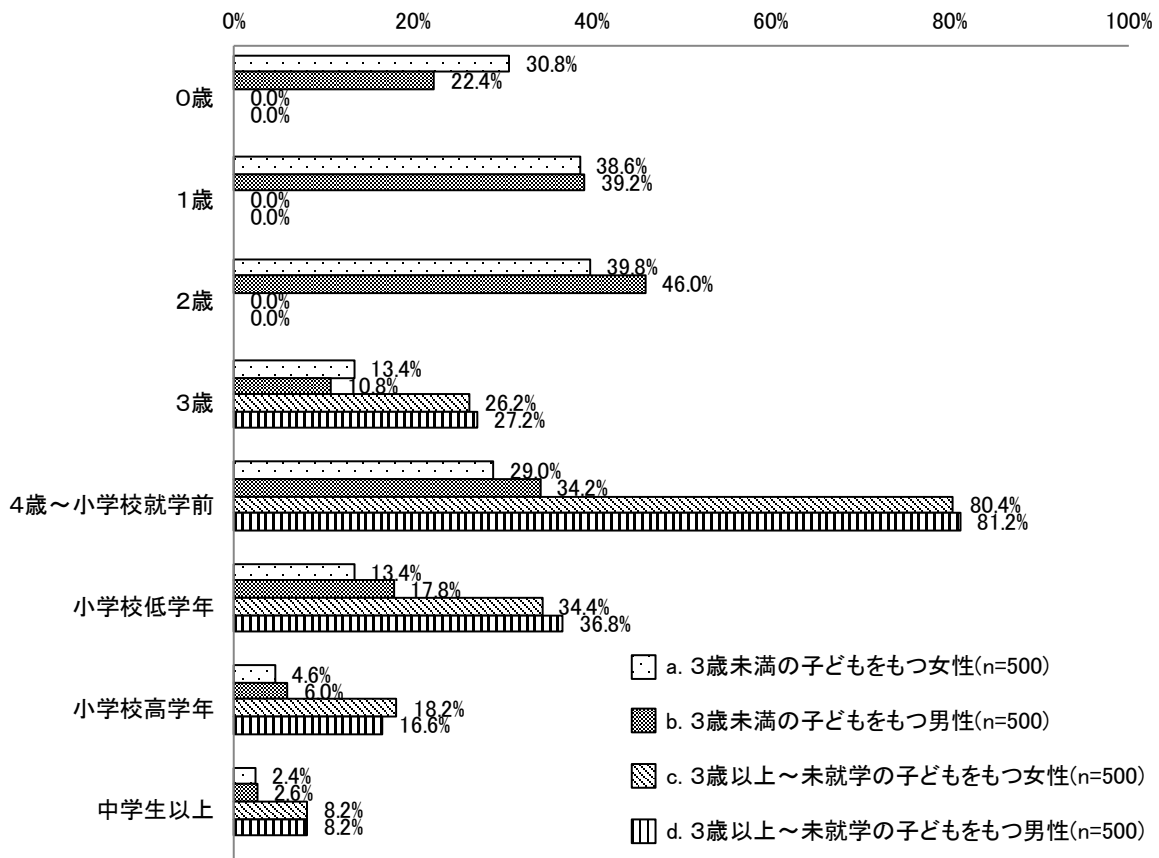
(6) 子の年齢

子どもがいる回答者層における、同居している子どもの年齢は以下のとおりである。

本調査においては、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」または「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」は、3歳未満の子どもがいる人を対象とした。そのため、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」および「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」は、3歳以上の子どもがいることがある。

また、「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」または「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」は、末子が3歳以上～未就学児を対象とした。そのため、「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」および「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」は3歳未満の子どもがいない回答者である。

図表 27 子の年齢：複数回答（Q5）



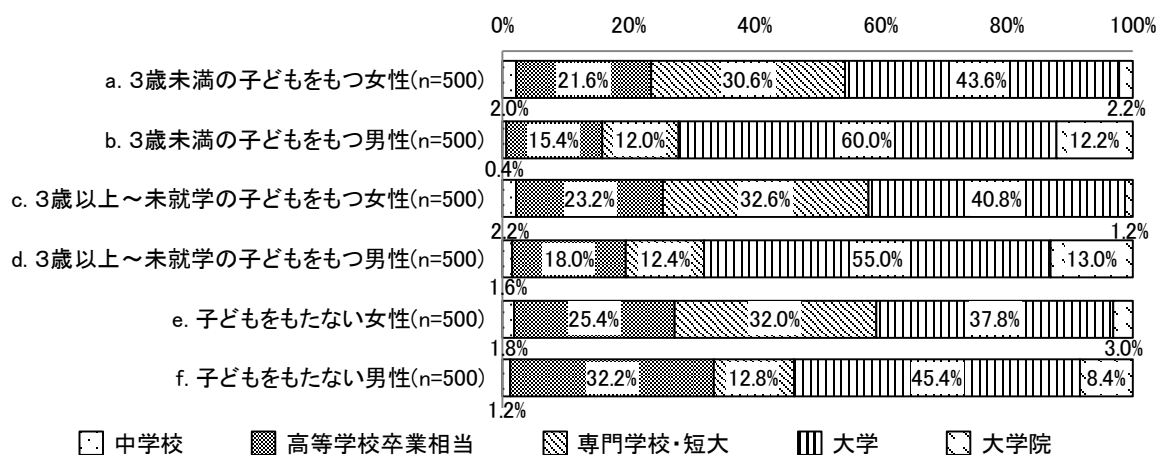
(7) 最終学歴

最終学歴をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「大学」が43.6%でもっとも割合が高く、次いで「専門学校・短大」が30.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「大学」が60.0%でもっとも割合が高く、次いで「高等学校卒業相当」が15.4%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「大学」が40.8%でもっとも割合が高く、次いで「専門学校・短大」が32.6%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「大学」が55.0%でもっとも割合が高く、次いで「高等学校卒業相当」が18.0%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「大学」が37.8%でもっとも割合が高く、次いで「専門学校・短大」が32.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「大学」が45.4%でもっとも割合が高く、次いで「高等学校卒業相当」が32.2%となっている。

図表 28 最終学歴：単数回答（Q6）



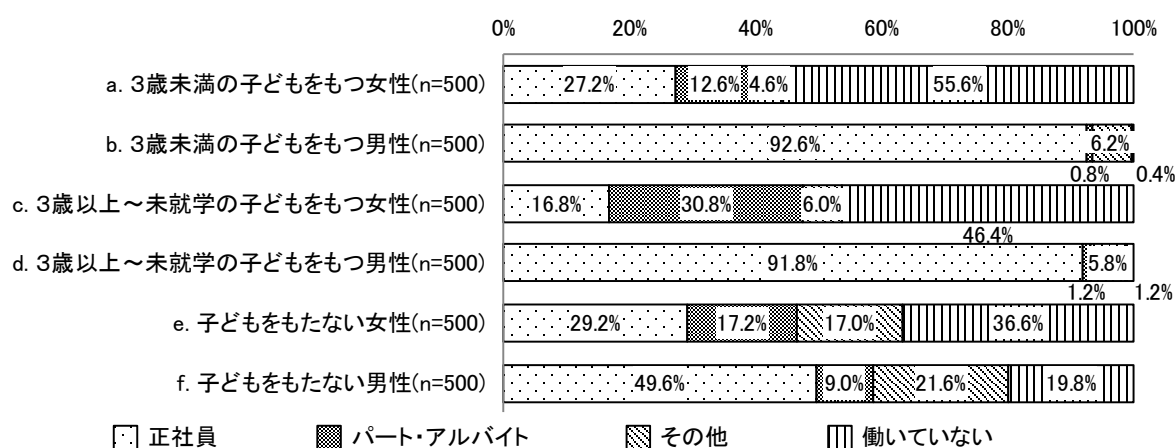
(8) 就労形態

現在の就労形態をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「働いていない」が55.6%でもっとも割合が高く、次いで「正社員」が27.2%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「正社員」が92.6%でもっとも割合が高く、次いで「その他」が6.2%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「働いていない」が46.4%でもっとも割合が高く、次いで「パート・アルバイト」が30.8%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「正社員」が91.8%でもっとも割合が高く、次いで「その他」が5.8%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「働いていない」が36.6%でもっとも割合が高く、次いで「正社員」が29.2%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「正社員」が49.6%でもっとも割合が高く、次いで「働いていない」が19.8%となっている。

図表 29 就労形態：単数回答（Q7）



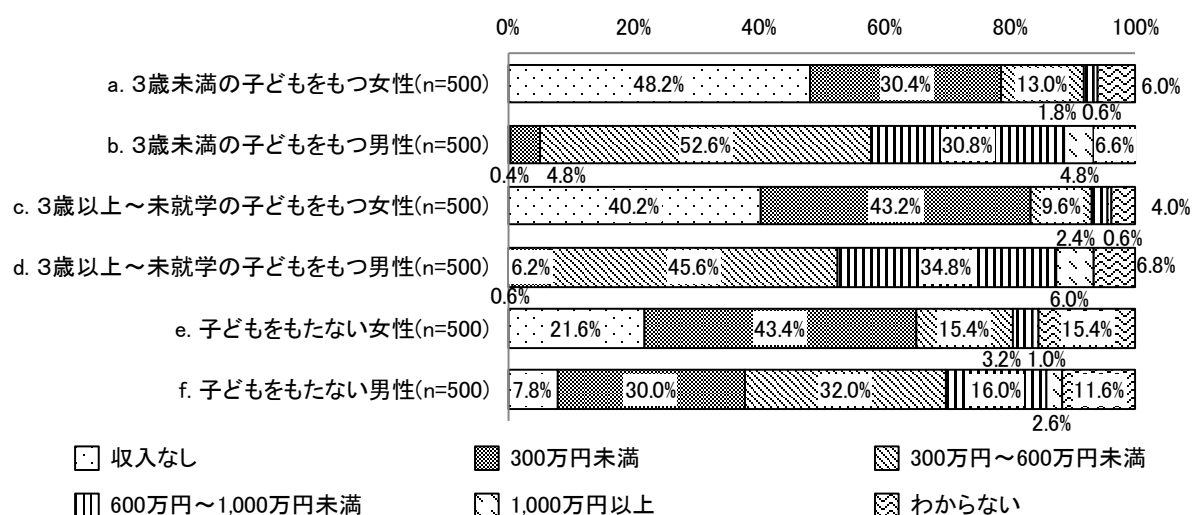
(9) 年収

昨年の年収をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「収入なし」が48.2%でもっとも割合が高く、次いで「300万円未満」が30.4%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「300万円～600万円未満」が52.6%でもっとも割合が高く、次いで「600万円～1,000万円未満」が30.8%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「300万円未満」が43.2%でもっとも割合が高く、次いで「収入なし」が40.2%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「300万円～600万円未満」が45.6%でもっとも割合が高く、次いで「600万円～1,000万円未満」が34.8%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「300万円未満」が43.4%でもっとも割合が高く、次いで「収入なし」が21.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「300万円～600万円未満」が32.0%でもっとも割合が高く、次いで「300万円未満」が30.0%となっている。

図表 30 昨年の年収：単数回答（Q8）



2. 子育てに関する環境や経験

(1) 【当事者層】子育て世帯における、他の子育て世帯との関わり

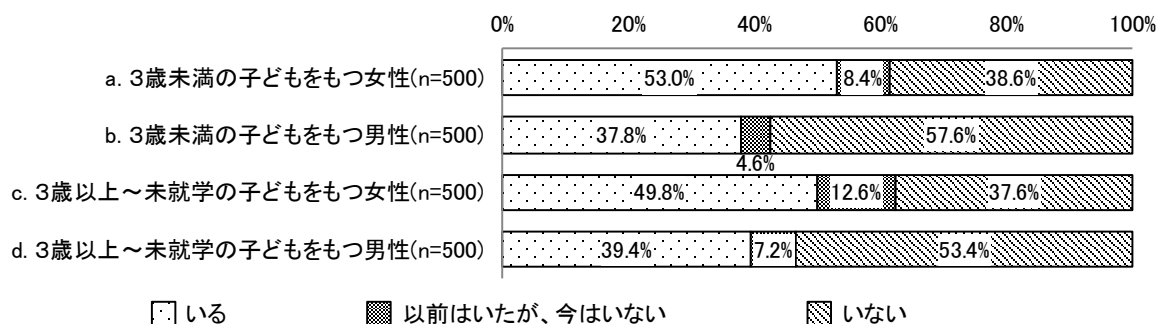
①【当事者層】子連れで一緒に外食をしたり、互いに家を訪問したりする人の有無

子どもがいる層について、子連れで一緒に外食をしたり、互いに家を訪問したりする人がいるかどうかをみると、「いる」と回答した割合は、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では53.0%、「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では37.8%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「いる」と回答した割合が49.8%、「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では39.4%となっている。

子どもの年齢にかかわらず、女性の方が、男性に比べて子連れで一緒に外食をしたり、互いに家を訪問したりする人がいる割合が高い傾向がみられる。

図表 31 【当事者層】子連れで一緒に外食をしたり、互いに家を訪問したりする人の有無：単数回答 (AQ10_1)



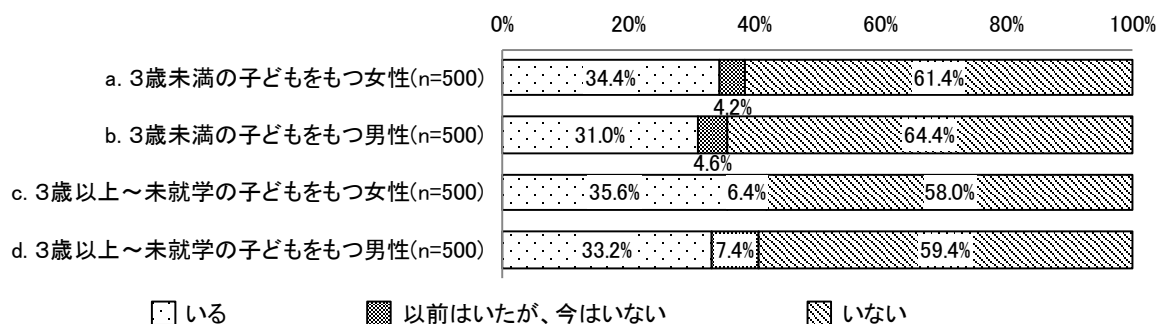
②【当事者層】子連れで一緒に、旅行・レジャー等に行く人の有無

子どもがいる層について、子連れで一緒に、旅行・レジャー等に行く人がいるかどうかをみると、「いる」と回答した割合は、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では34.4%、「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では31.0%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「いる」と回答した割合が35.6%、「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では33.2%となっている。

子連れで一緒に旅行・レジャー等に行く人がいる割合については、男女で大きな違いはみられない。

図表 32 【当事者層】子連れで一緒に、旅行・レジャー等に行く人の有無：単数回答 (AQ10_2)



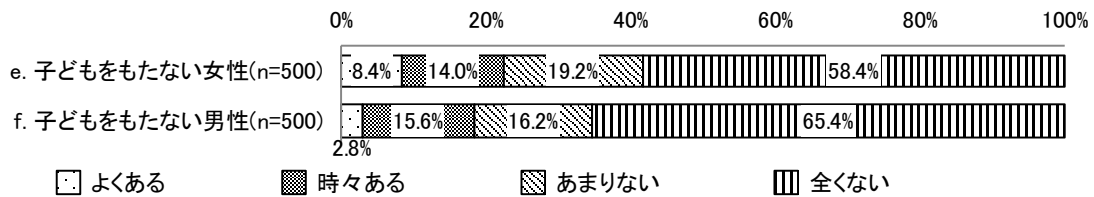
（２）【非当事者層】家族や友人を通じて、子どもと接する機会

①【非当事者層】家族や親戚の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶ機会

子どもがいない層について、家族や親戚の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶ機会があるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「全くない」が 58.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が 19.2%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「全くない」が 65.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が 16.2%となっている。

家族や親戚の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶ機会があるとする割合（「よくある」「時々ある」の合計）は男女とも２割前後であり、男女で大きな違いはみられない。

図表 33 【非当事者層】家族や親戚の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶ機会：単数回答（BQ10_1）

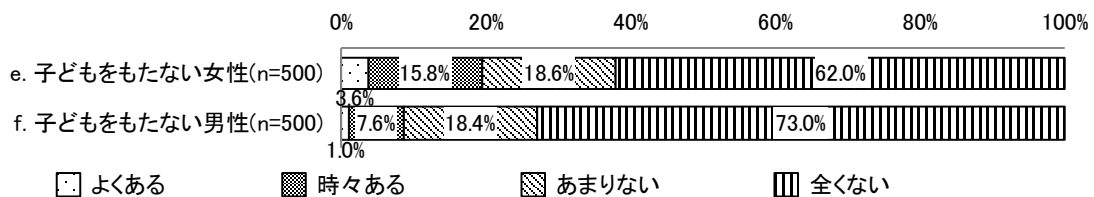


②【非当事者層】友人の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶ機会

子どもがいない層について、友人の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶ機会があるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「全くない」が 62.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が 18.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「全くない」が 73.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が 18.4%となっている。

友人の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶ機会があるとする割合（「よくある」「時々ある」の合計）は、女性は約２割、男性は１割弱と、女性の方が男性に比べて割合が高い傾向がみられる。

図表 34 【非当事者層】友人の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶ機会：単数回答（BQ10_2）

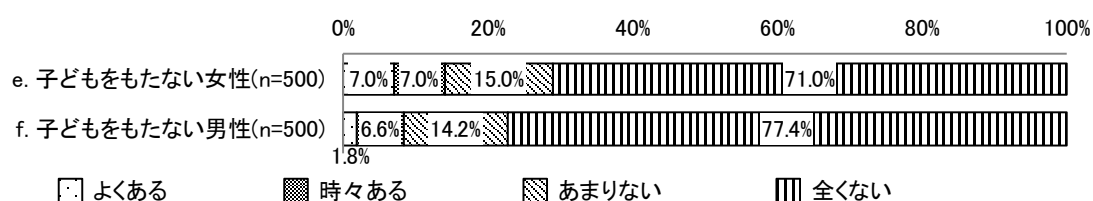


③【非当事者層】（家族や友人などの）子どもの世話（食事を食べさせるなど）をする機会

子どもがいない層について、子どもの世話（食事を食べさせるなど）をする機会があるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「全くない」が71.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が15.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「全くない」が77.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が14.2%となっている。

家族や友人などの子どもの世話（食事を食べさせるなど）をする機会があるとする割合（「よくある」「時々ある」の合計）は、女性は1割強、男性は1割弱と、女性の方が男性に比べてやや割合が高い傾向がみられる。

図表 35 【非当事者層】（家族や友人などの）子どもの世話（食事を食べさせるなど）をする機会：
単数回答（BQ10_3）



（３）仕事を通じて、子どもや子育て世帯と接する機会

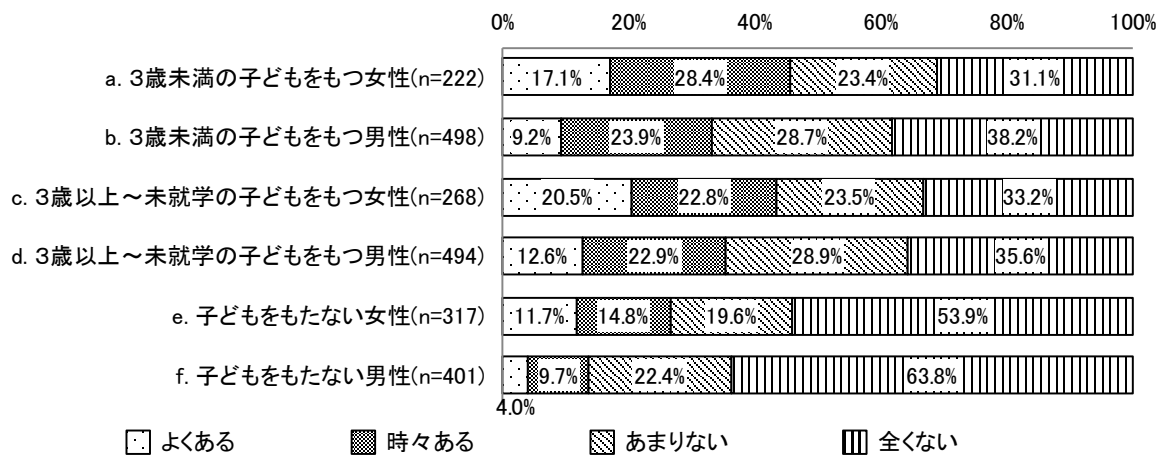
当事者層・非当事者層のうち働いている人（Q7で「働いていない」以外を回答した人）について、ふだんの仕事を通じて、子どもや子育て世帯と接する機会があるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「全くない」が31.1%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が28.4%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「全くない」が38.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が28.7%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「全くない」が33.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が23.5%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「全くない」が35.6%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が28.9%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「全くない」が53.9%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が19.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「全くない」が63.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が22.4%となっている。

当事者層、非当事者の男女をそれぞれ比較すると、女性の方が、男性に比べて、ふだんの仕事を通じて、子どもや子育て世帯と接する機会があるとする割合（「よくある」「時々ある」の合計）が高い傾向がみられる。

図表 36 ふだんの仕事を通じて、子どもや子育て世帯と接する機会：単数回答（Q11）



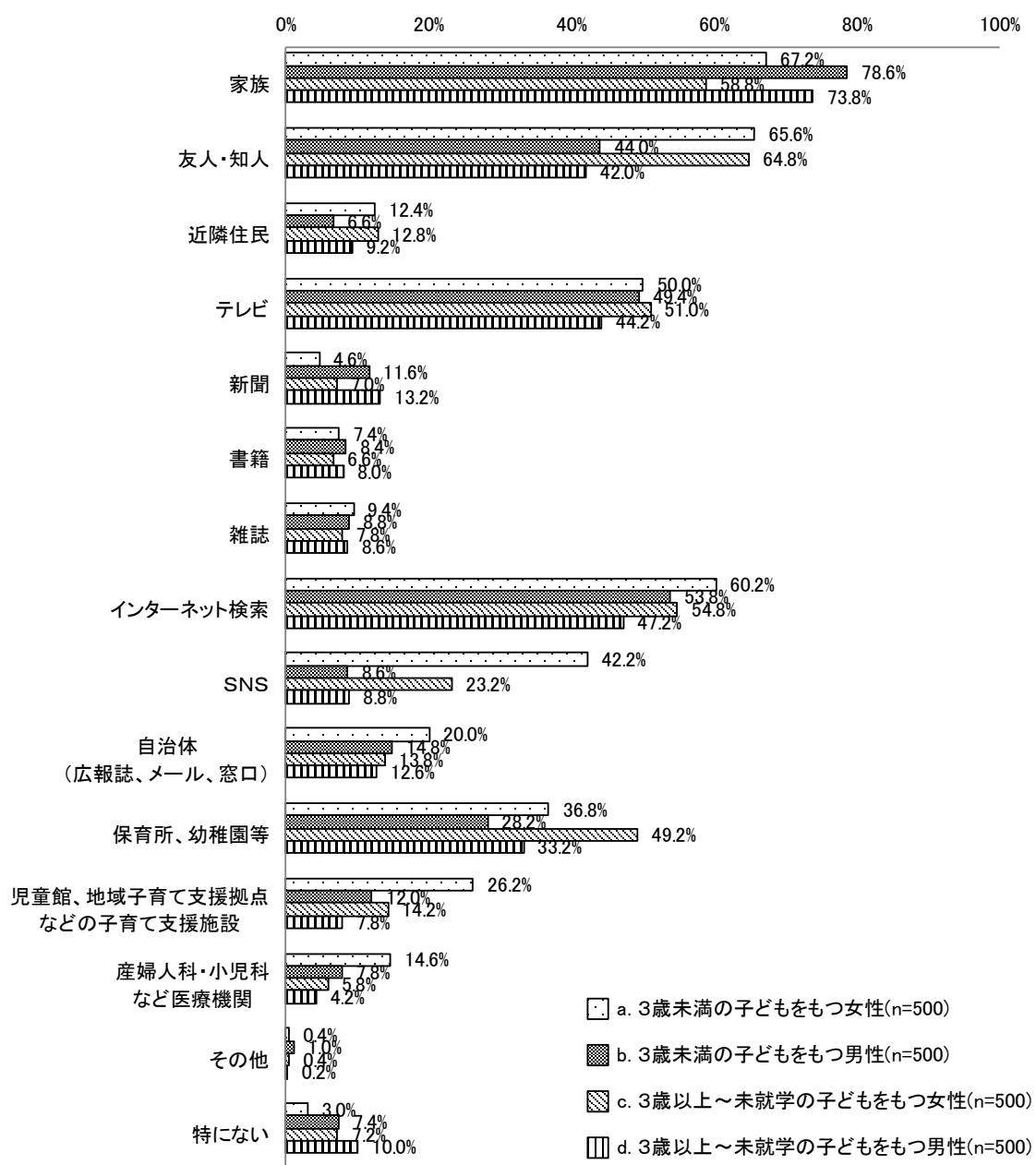
（４）子育てに関する情報に触れる機会

①【当事者層】子育てに関する情報源

子どもがいる層について、子育てに関する情報源をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「家族」が67.2%でもっとも割合が高く、次いで「友人・知人」が65.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「家族」が78.6%でもっとも割合が高く、次いで「インターネット検索」が53.8%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「友人・知人」が64.8%でもっとも割合が高く、次いで「家族」が58.8%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「家族」が73.8%でもっとも割合が高く、次いで「インターネット検索」が47.2%となっている。

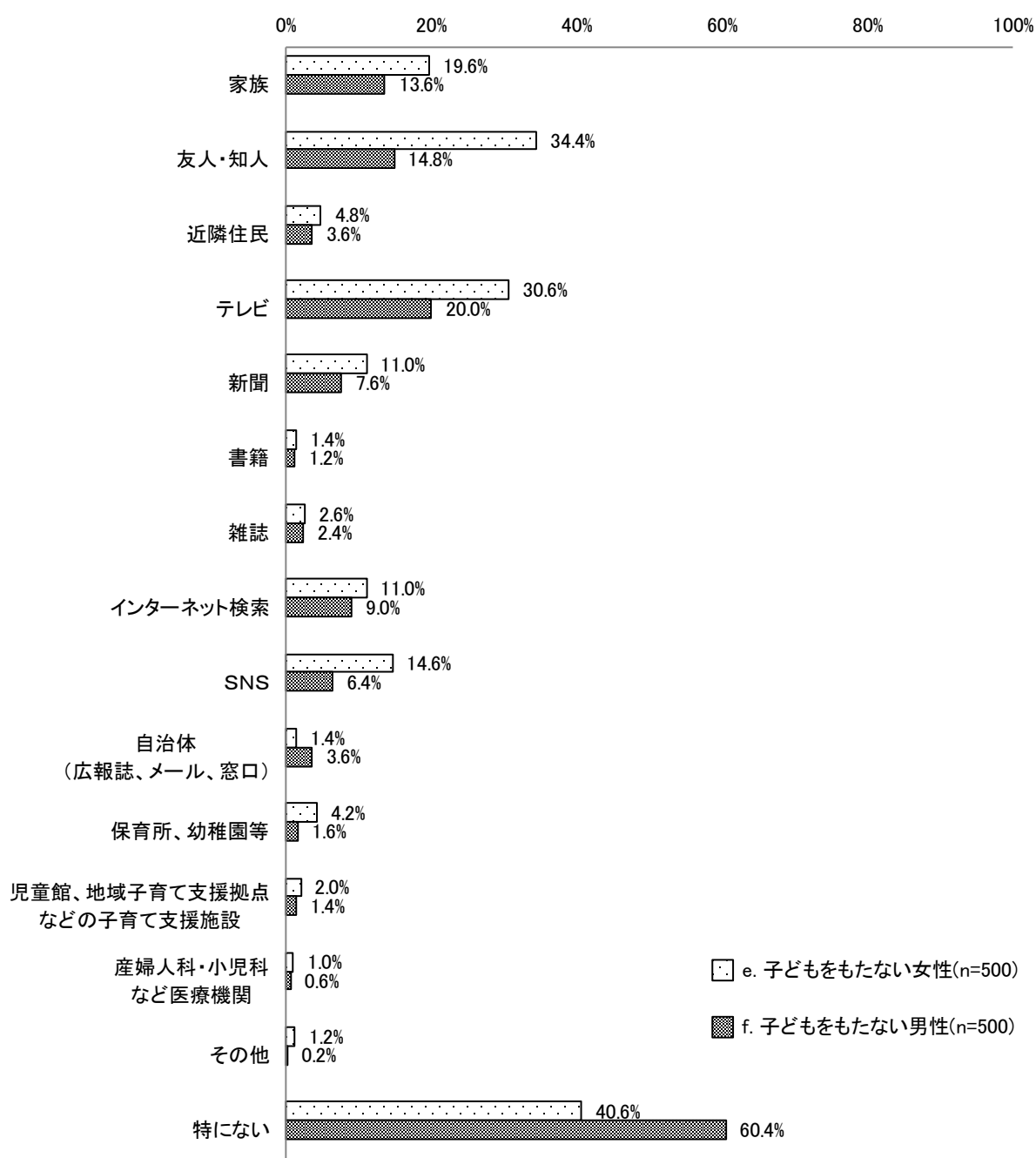
図表 37 【当事者層】子育てに関する情報源：複数回答（AQ12）



②【非当事者層】子育て世帯の悩みや困りごとを見聞きする機会・情報源

子どもがいない層について、子育て世帯の悩みや困りごとを見聞きする機会や情報源をみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「特にない」が 40.6%でもっとも割合が高く、次いで「友人・知人」が 34.4%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「特にない」が 60.4%でもっとも割合が高く、次いで「テレビ」が 20.0%となっている。

図表 38 【非当事者層】子育て世帯の悩みや困りごとを見聞きする機会・情報源：複数回答（BQ12）



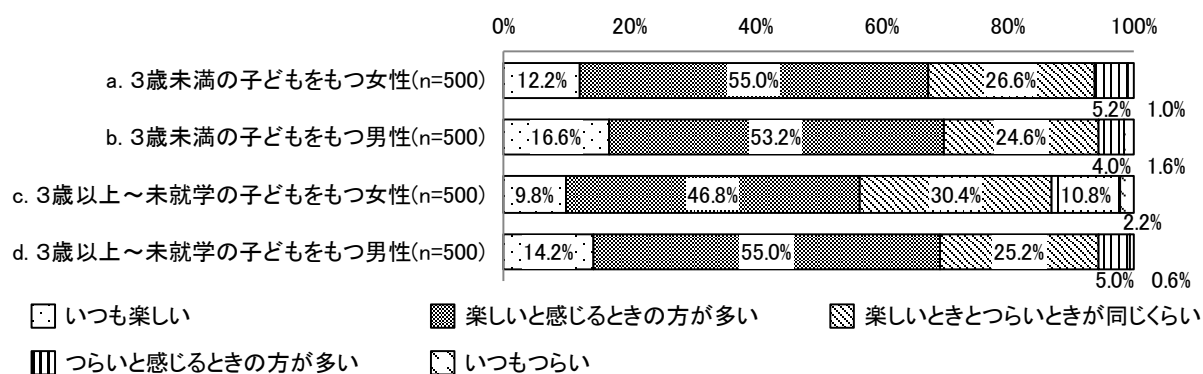
(5) 【当事者層】子育てを楽しんでいるか

子どもがいる層について、子育てを楽しんでいるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「楽しいと感じるときの方が多い」が 55.0%でもっとも割合が高く、次いで「楽しいときとつらいときが同じくらい」が 26.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「楽しいと感じるときの方が多い」が 53.2%でもっとも割合が高く、次いで「楽しいときとつらいときが同じくらい」が 24.6%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「楽しいと感じるときの方が多い」が 46.8%でもっとも割合が高く、次いで「楽しいときとつらいときが同じくらい」が 30.4%となっている。

「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「楽しいと感じるときの方が多い」が 55.0%でもっとも割合が高く、次いで「楽しいときとつらいときが同じくらい」が 25.2%となっている。

図表 39 【当事者層】子育てを楽しんでいるか:単数回答 (AQ13)



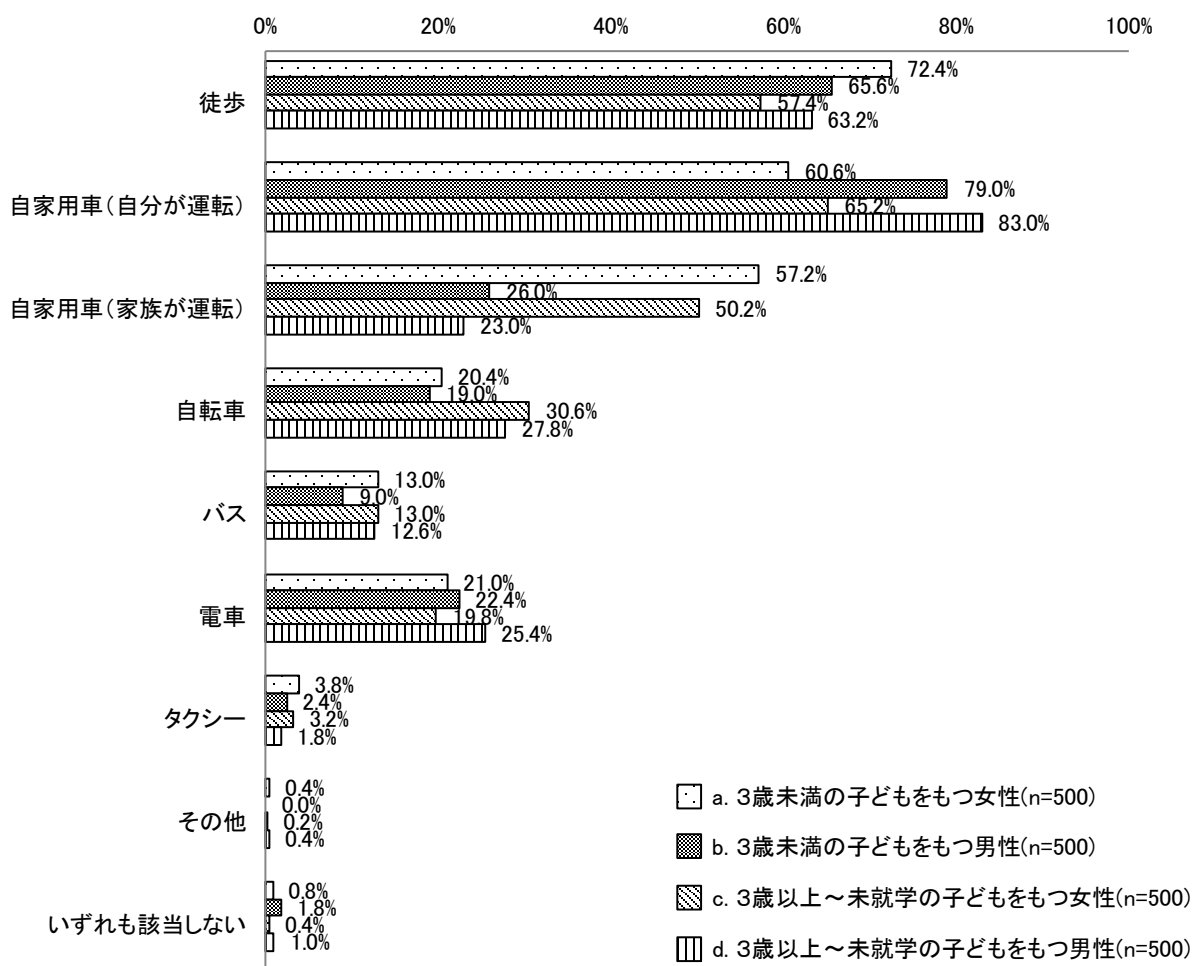
3. 子連れでの公共交通機関の利用

(1) 【当事者層】子どもを連れて外出する際の移動手段

子どもがいる層について、子連れで外出する際の移動手段をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「徒歩」が72.4%でもっとも割合が高く、次いで「自家用車（自分が運転）」が60.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「自家用車（自分が運転）」が79.0%でもっとも割合が高く、次いで「徒歩」が65.6%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「自家用車（自分が運転）」が65.2%でもっとも割合が高く、次いで「徒歩」が57.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「自家用車（自分が運転）」が83.0%でもっとも割合が高く、次いで「徒歩」が63.2%となっている。

図表 40 【当事者層】子どもを連れて外出する際の移動手段：複数回答（AQ14）



（２）公共交通機関でベビーカーを利用することについて

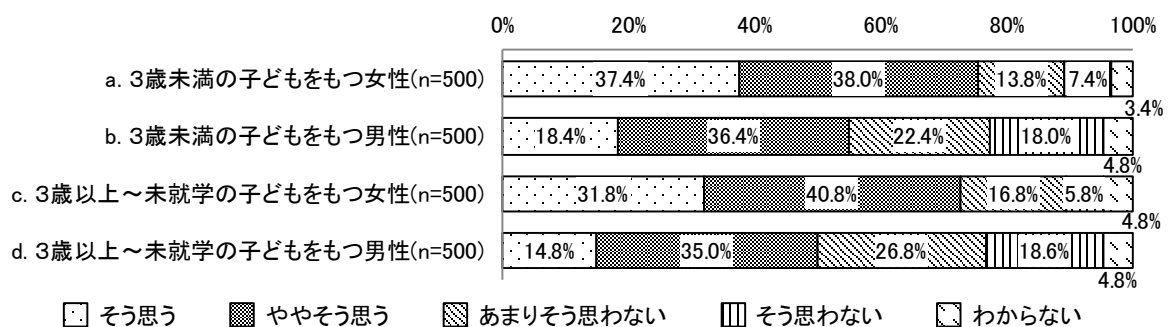
①【当事者層】公共交通機関でベビーカーを利用することにためらいを感じるか

子どもがいる層について、公共交通機関でベビーカーを利用することにためらいを感じるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が38.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が37.4%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が36.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が22.4%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が40.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が31.8%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が35.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が26.8%となっている。

子どもの年齢にかかわらず、女性の方が、男性に比べて、公共交通機関でベビーカーを利用することにためらいを感じると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）が高い傾向がみられる。

図表 41 【当事者層】公共交通機関でベビーカーを利用することにためらいを感じるか：単数回答
(AQ15_1)

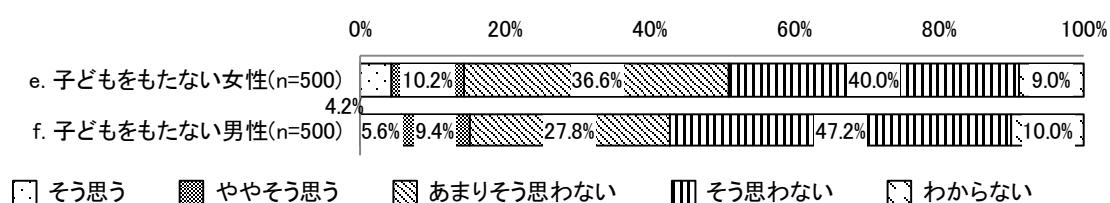


②【非当事者層】公共交通機関では、ベビーカーを使うべきではないと思うか

子どもがいない層について、公共交通機関では、ベビーカーを使うべきではないと思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「そう思わない」が40.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が36.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「そう思わない」が47.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が27.8%となっている。

公共交通機関では、ベビーカーを使うべきではないと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女ともに15%程度みられる。

図表 42 【非当事者層】公共交通機関では、ベビーカーを使うべきではないと思うか：単数回答
(BQ15_1)



（３）子連れで公共交通機関を利用する際の、周囲への気遣いについて

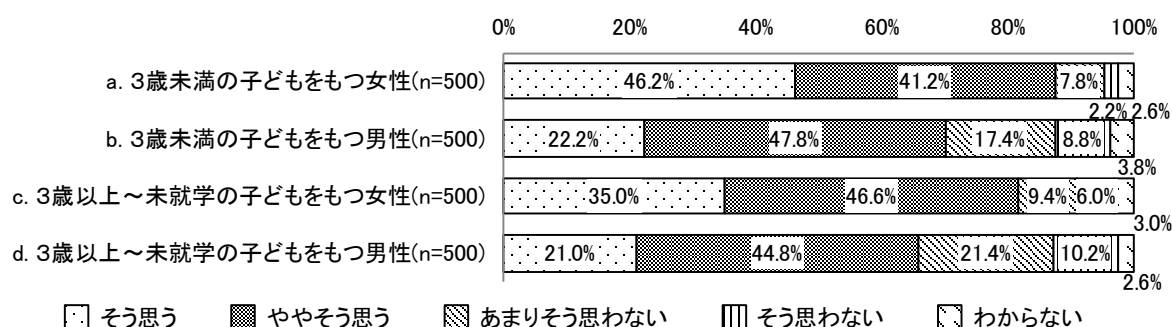
①【当事者層】公共交通機関を子どもと一緒に利用する際、周囲の人に気を遣うか

子どもがいる層について、公共交通機関を子どもと一緒に利用する際、周囲の人に気を遣うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「そう思う」が46.2%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が41.2%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が47.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が22.2%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が46.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が35.0%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が44.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が21.4%となっている。

子どもの年齢にかかわらず、女性の方が、男性に比べて、公共交通機関を子どもと一緒に利用する際、周囲の人に気を遣うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）が高い傾向がみられる。

図表 43 【当事者層】公共交通機関を子どもと一緒に利用する際、周囲の人に気を遣うか：単数回答
(AQ15_2)

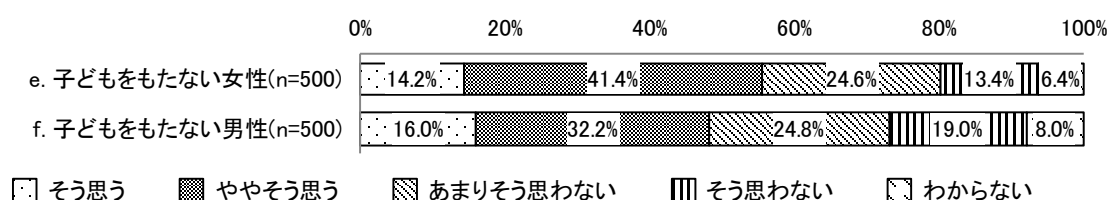


②【非当事者層】公共交通機関では、子連れの親は周囲の人に気を遣うべきだと思うか

子どもがいない層について、公共交通機関では、子連れの親は周囲の人に気を遣うべきだと思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が41.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が24.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が32.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が24.8%となっている。

公共交通機関では、子連れの親は周囲の人に気を遣うべきだと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、女性が6割弱、男性が半数弱と、女性の方がやや高い傾向がみられる。

図表 44 【非当事者層】公共交通機関では、子連れの親は周囲の人に気を遣うべきだと思うか：単数回答（BQ15_2）



（４）子連れで公共交通機関を利用する際の周囲の助けについて

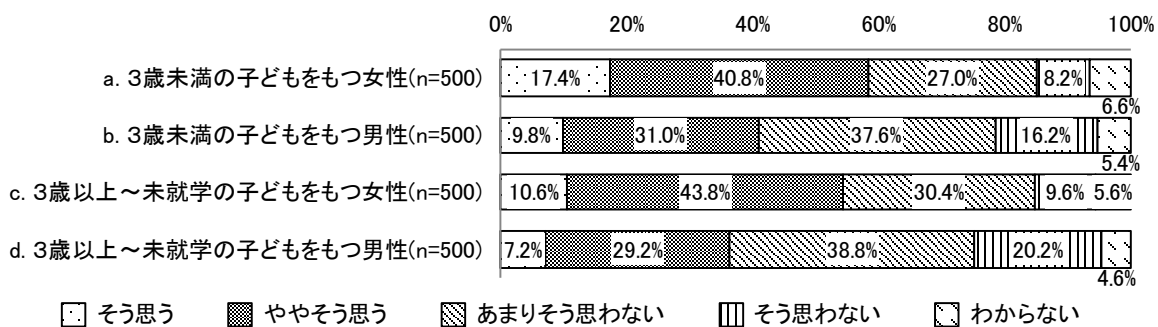
①【当事者層】公共交通機関を子どもと一緒に利用する際に困ったら、周囲の人に助けてもらいたい

子どもがいる層について、公共交通機関を子どもと一緒に利用する際に困ったら、周囲の人に助けてもらいたいかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が40.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が27.0%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が37.6%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が31.0%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が43.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が30.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が38.8%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が29.2%となっている。

子どもの年齢にかかわらず、女性の方が、男性に比べて、公共交通機関を子どもと一緒に利用する際に困ったら、周囲の人に助けてもらいたいと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）が高い傾向がみられる。

図表 45 【当事者層】公共交通機関を子どもと一緒に利用する際に困ったら、周囲の人に助けてもらいたい：単数回答（AQ15_3）

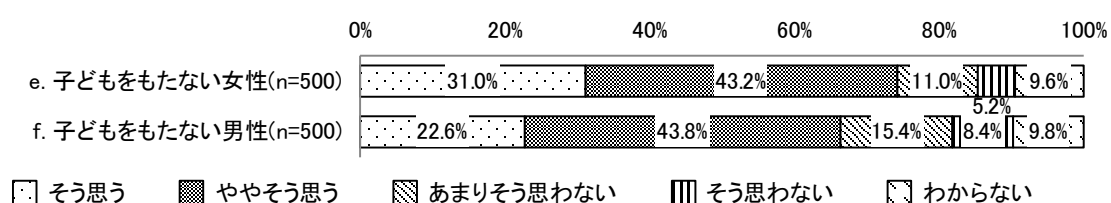


②【非当事者層】公共交通機関で子連れの親子が困っていたら、手助けをしたいと思うか

子どもがいない層について、公共交通機関で子連れの親子が困っていたら、手助けをしたいと思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が43.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が31.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が43.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が22.6%となっている。

公共交通機関で子連れの親子が困っていたら、手助けをしたいと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、女性が7割強、男性が7割弱と、女性の方がやや高い傾向がみられる。

図表 46 【非当事者層】公共交通機関で子連れの親子が困っていたら、手助けをしたいと思うか：
単数回答（BQ15_3）



（５）子連れで公共交通機関を利用した際の、周囲からの手助けの経験

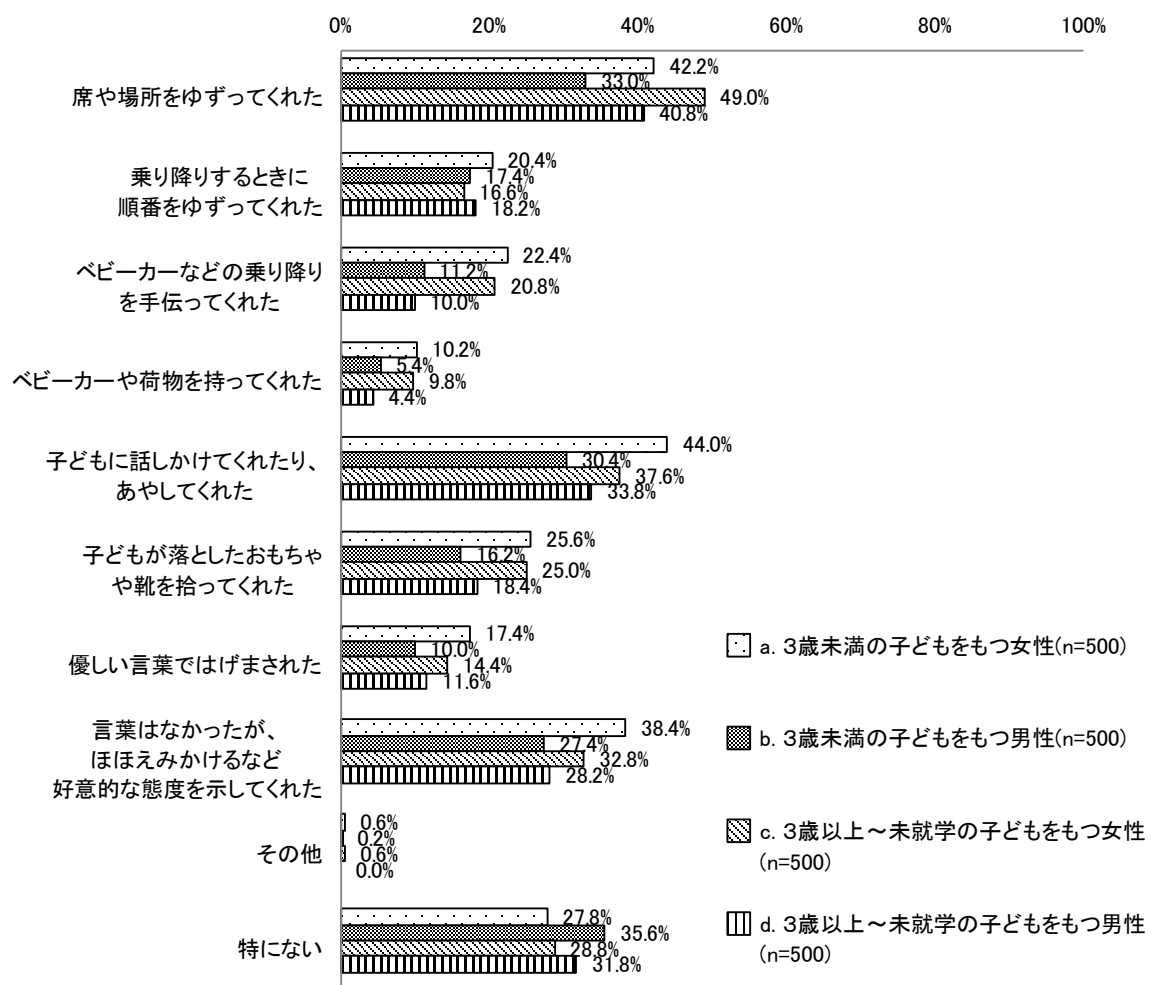
①【当事者層】公共交通機関を子連れで利用した際、うれしかったり、励ましてもらった経験

子どもがいる層について、公共交通機関を子連れで利用した際、うれしかったり、励ましてもらった経験をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」が44.0%でもっとも割合が高く、次いで「席や場所をゆずってくれた」が42.2%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「特にない」が35.6%でもっとも割合が高く、次いで「席や場所をゆずってくれた」が33.0%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「席や場所をゆずってくれた」が49.0%でもっとも割合が高く、次いで「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」が37.6%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「席や場所をゆずってくれた」が40.8%でもっとも割合が高く、次いで「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」が33.8%となっている。

a～dのいずれについても、公共交通機関を子連れで利用した際に、うれしかったり、励ましてもらった経験のある人が6～7割程度（「特にない」以外のいずれかを回答した人の割合）となっている。

図表 47 【当事者層】公共交通機関を子連れで利用した際、うれしかったり、励ましてもらった経験：複数回答（AQ16）

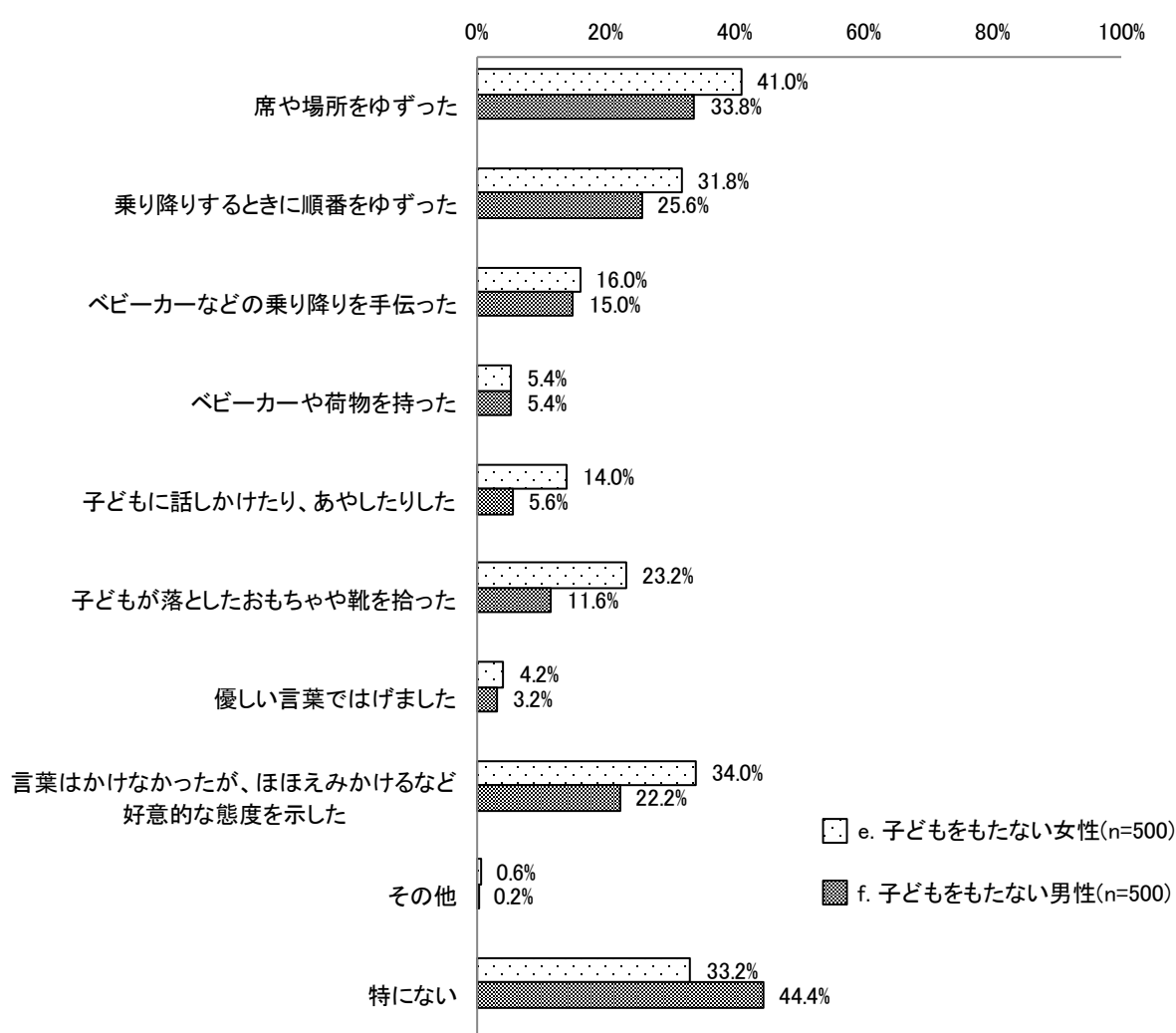


②【非当事者層】公共交通機関を子連れで利用している親子に、手助けや励ましをした経験

子どもがいない層について、公共交通機関を子連れで利用している親子に、手助けや励ましをした経験をみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「席や場所をゆずった」が41.0%でもっとも割合が高く、次いで「言葉はかけなかったが、ほほえみかけるなど好意的な態度を示した」が34.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「特にない」が44.4%でもっとも割合が高く、次いで「席や場所をゆずった」が33.8%となっている。

e・fのいずれについても、公共交通機関を子連れで利用している親子に、手助けや励ましをした経験のある人が6～7割程度（「特にない」以外のいずれかを回答した人の割合）となっている。

図表 48 【非当事者層】公共交通機関を子連れで利用している親子に、手助けや励ましをした経験：
複数回答（BQ16）



4. 子連れでの外出

(1) 外出先別にみた、子連れとの外出に関する意識・経験

①【当事者層】子どもを連れて行ってみたいが、出かけることを控えている外出先（自分一人と子どもとの外出）

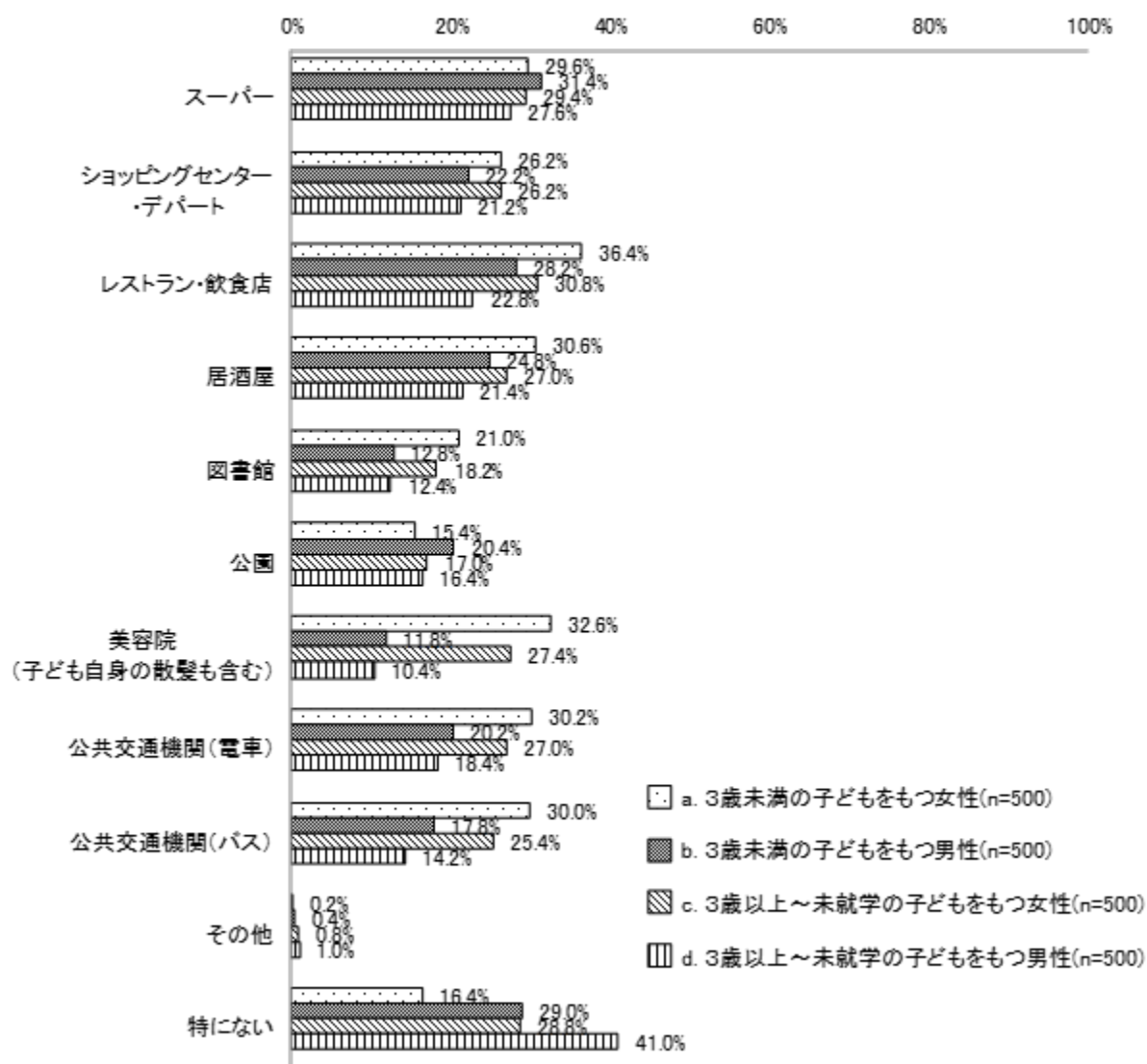
子どもがいる層について、自分一人と子どもとの外出の際に、控えている外出先をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「レストラン・飲食店」が36.4%でもっとも割合が高く、次いで「美容院（子ども自身の散髪も含む）」が32.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「スーパー」が31.4%でもっとも割合が高く、次いで「特にない」が29.0%となっている。「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「レストラン・飲食店」が30.8%でもっとも割合が高く、次いで「スーパー」が29.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「特にない」が41.0%でもっとも割合が高く、次いで「スーパー」が27.6%となっている。

外出先別にみると、「スーパー」「公園」は「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」において、控えているとする割合がもっとも高いが、それ以外については、子どもの年齢にかかわらず、女性の方が、男性に比べて外出を控えているとする割合が高い傾向がみられる。

また、a～dのグループについて、自分一人と子どもとの外出の際に、控えている外出先が何らかあると回答した割合は、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」が8割強（「特にない」以外のいずれかを回答した人の割合）でもっとも高く、「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」が同じく6割弱でもっとも低くなっている。

なお、後続の設問（AQ19）において、外出先別に子連れでの外出を控えている理由を把握するため、AQ17_1において4つ以上の外出先を選択している回答者に対して、AQ18を設け、理由を把握する外出先を3つ以内に絞るようにした。AQ18は、「特に控えている外出先」を把握する内容の設問ではあるが、あくまでも後続の設問（AQ19）における回答すべき外出先を絞ることが目的の設問であり、回答者全体における「特に控えている外出先」を示すためのものではないことから、AQ18の回答結果は非掲載とする。

図表 49 【当事者層】子どもを連れて行ってみたいが、出かけることを控えている外出先
(自分一人と子どもとの外出):複数回答(AQ17_1)



②【当事者層】子どもを連れて行ってみたいが、出かけることを控えている外出先（配偶者・パートナーとの外出）

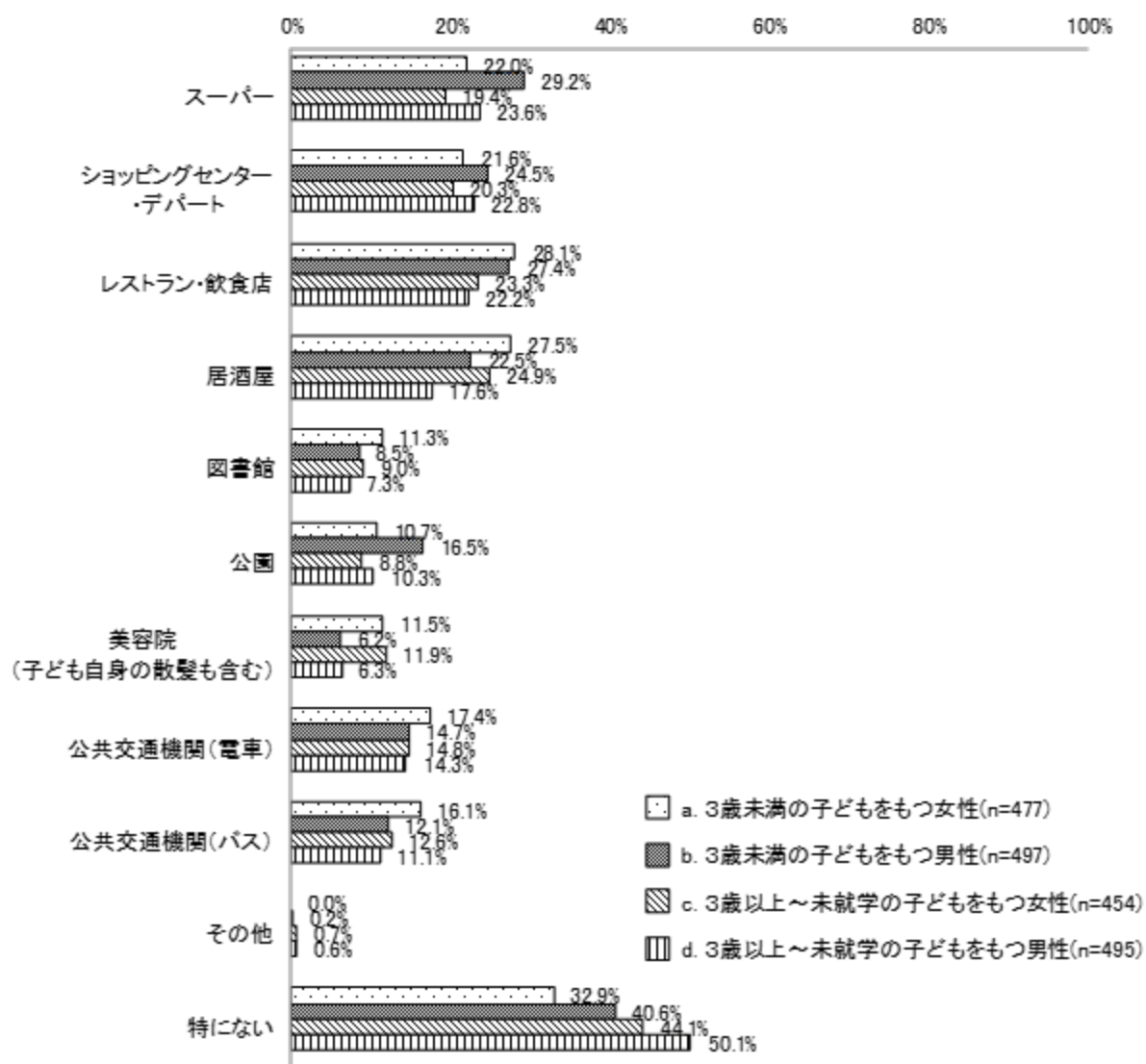
子どもがいる層について、配偶者・パートナーと一緒に子どもと外出する際に、控えている外出先をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「特にない」が32.9%でもっとも割合が高く、次いで「レストラン・飲食店」が28.1%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「特にない」が40.6%でもっとも割合が高く、次いで「スーパー」が29.2%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「特にない」が44.1%でもっとも割合が高く、次いで「居酒屋」が24.9%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「特にない」が50.1%でもっとも割合が高く、次いで「スーパー」が23.6%となっている。

前ページの「自分一人と子どもとの外出の際に、控えている外出先」と比較すると、全般的に回答割合が低くなっており、配偶者・パートナーと一緒に子どもと外出する際には、外出を控える傾向が緩和されることがわかる。また、「自分一人と子どもとの外出の際に、控えている外出先」と比べて、男女の差も小さくなる傾向がみられる。

ただし、a～dのグループについて、「特にない」と回答した人を除いて、配偶者・パートナーと一緒に子どもとの外出の際に、控えている外出先が何らかあると回答した割合をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」がもっとも高く、「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」がもっとも低いという傾向は同様にみられる。

図表 50 【当事者層】子どもを連れて行ってみたいが、出かけることを控えている外出先（配偶者・パートナーとの外出）：複数回答（AQ17_2）

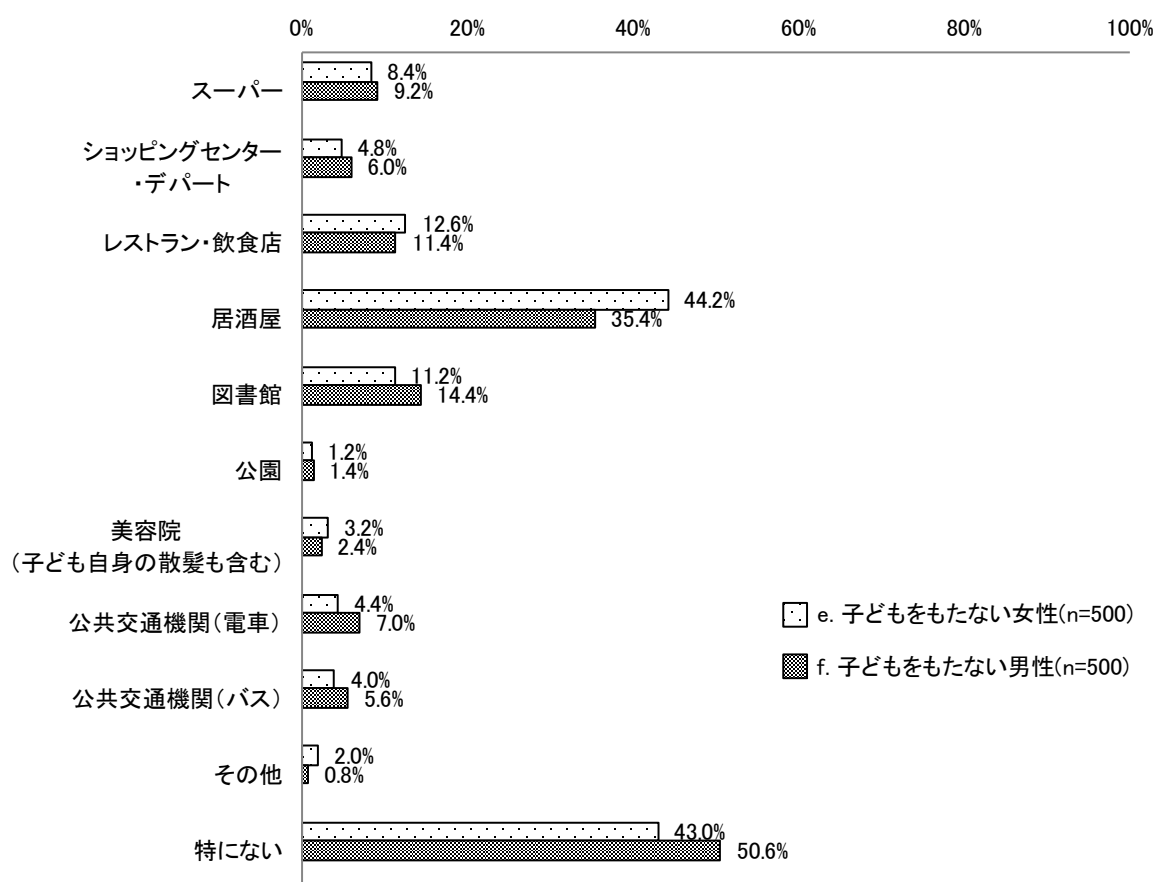


③【非当事者層】子どもを連れて外出すること・利用することを控えてほしいと思う場所

子どもがいない層について、子どもを連れて外出すること・利用することを控えてほしいと思う場所をみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「居酒屋」が 44.2%でもっとも割合が高く、次いで「特にない」が 43.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「特にない」が 50.6%でもっとも割合が高く、次いで「居酒屋」が 35.4%となっている。

子どもを連れて外出すること・利用することを控えてほしい先としては、「居酒屋」の割合が高いが、「レストラン・飲食店」や「図書館」についても、男女とも 1 割前後あげられている。

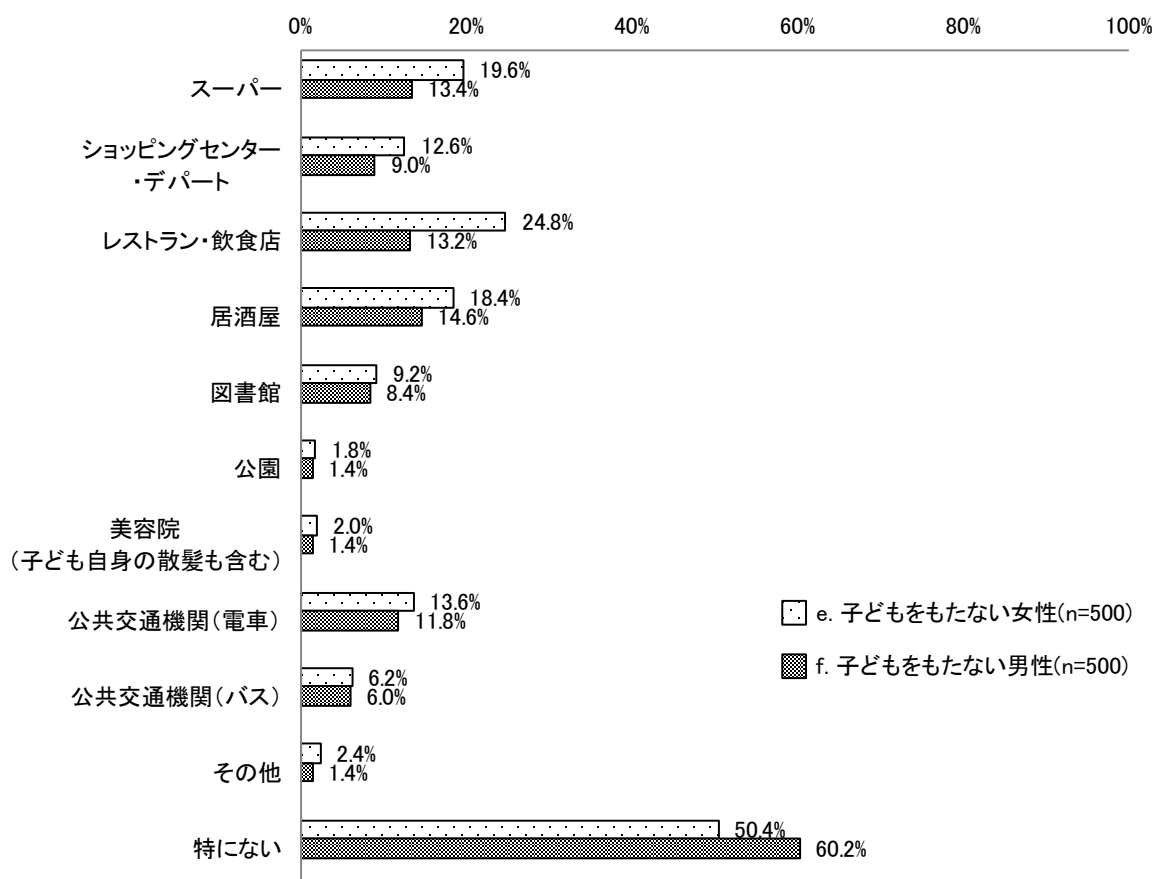
図表 51 【非当事者層】子どもを連れて外出すること・利用することを控えてほしいと思う場所：複数回答（BQ17_1）



④【非当事者層】これまで子連れの親子がいて迷惑に感じたことがあるところ

子どもがいない層について、これまで子連れの親子がいて迷惑に感じたことがあるところ、「e. 子どもをもたない女性」では、「特にない」が 50.4%でもっとも割合が高く、次いで「レストラン・飲食店」が 24.8%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「特にない」が 60.2%でもっとも割合が高く、次いで「居酒屋」が 14.6%となっている。

図表 52 【非当事者層】これまで子連れの親子がいて迷惑に感じたことがあるところ：複数回答
(BQ17_2)



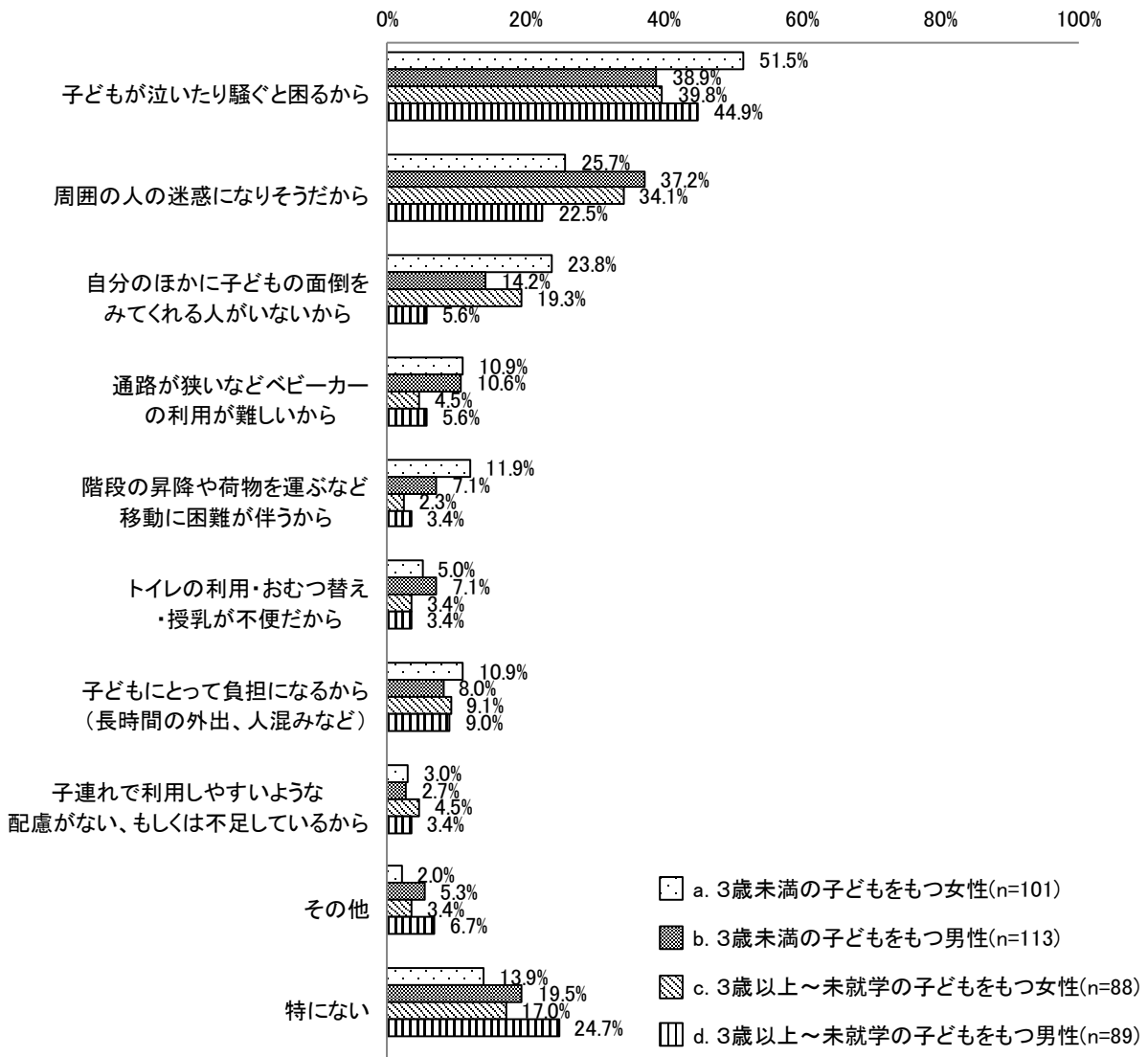
(2) 【当事者層】外出先別、子連れでの外出を控えている理由

①【当事者層】子連れでの外出を控えている理由：スーパー

自分一人と子どもで外出する際に、スーパーへの外出を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が51.5%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が25.7%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が38.9%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が37.2%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が39.8%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が34.1%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が44.9%でもっとも割合が高く、次いで「特にない」が24.7%となっている。

図表 53 【当事者層】子連れでのスーパーへの外出を控えている理由：複数回答（AQ19_1）

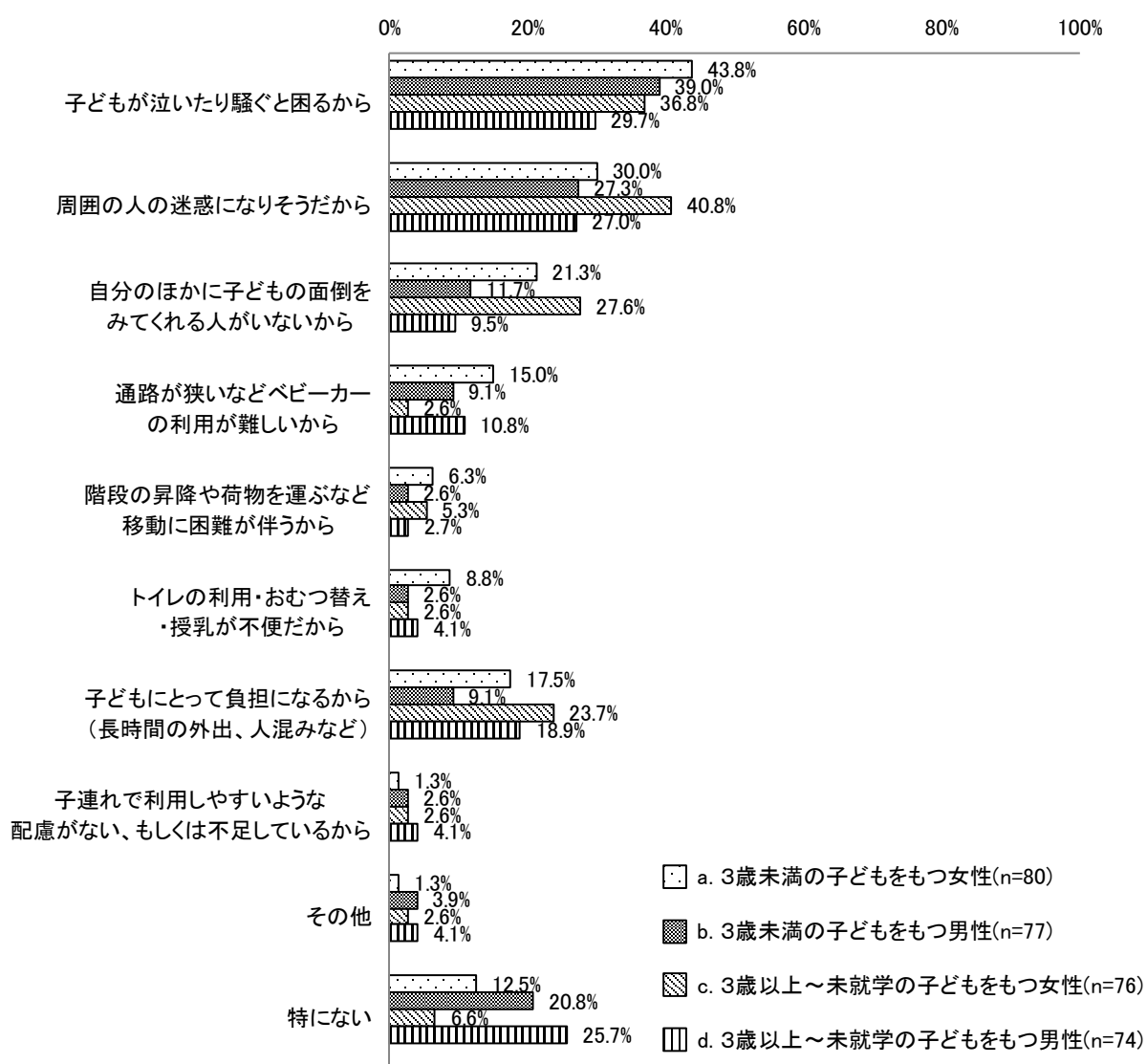


②【当事者層】子連れでの外出を控えている理由：ショッピングセンター・デパート

自分一人と子どもで外出する際に、ショッピングセンター・デパートへの外出を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が43.8%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が30.0%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が39.0%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が27.3%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「周囲の人の迷惑になりそうだから」が40.8%でもっとも割合が高く、次いで「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が36.8%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が29.7%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が27.0%となっている。

図表 54 【当事者層】子連れでのショッピングセンター・デパートへの外出を控えている理由：複数回答（AQ19_2）

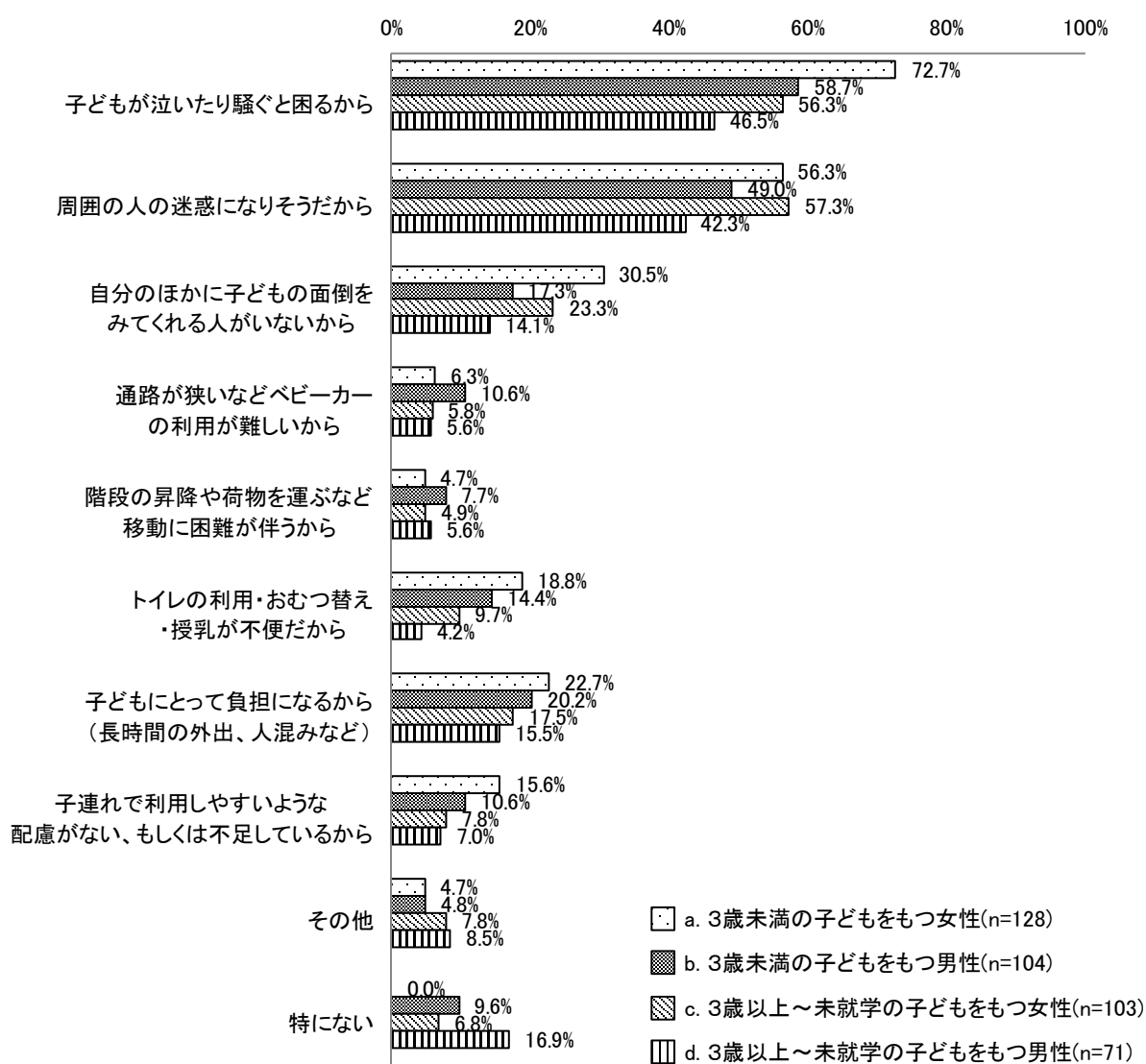


③【当事者層】子連れでの外出を控えている理由：レストラン・飲食店

自分一人と子どもで外出する際に、レストラン・飲食店への外出を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が72.7%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が56.3%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が58.7%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が49.0%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「周囲の人の迷惑になりそうだから」が57.3%でもっとも割合が高く、次いで「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が56.3%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が46.5%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が42.3%となっている。

図表 55 【当事者層】子連れでのレストラン・飲食店への外出を控えている理由：複数回答
(AQ19_3)

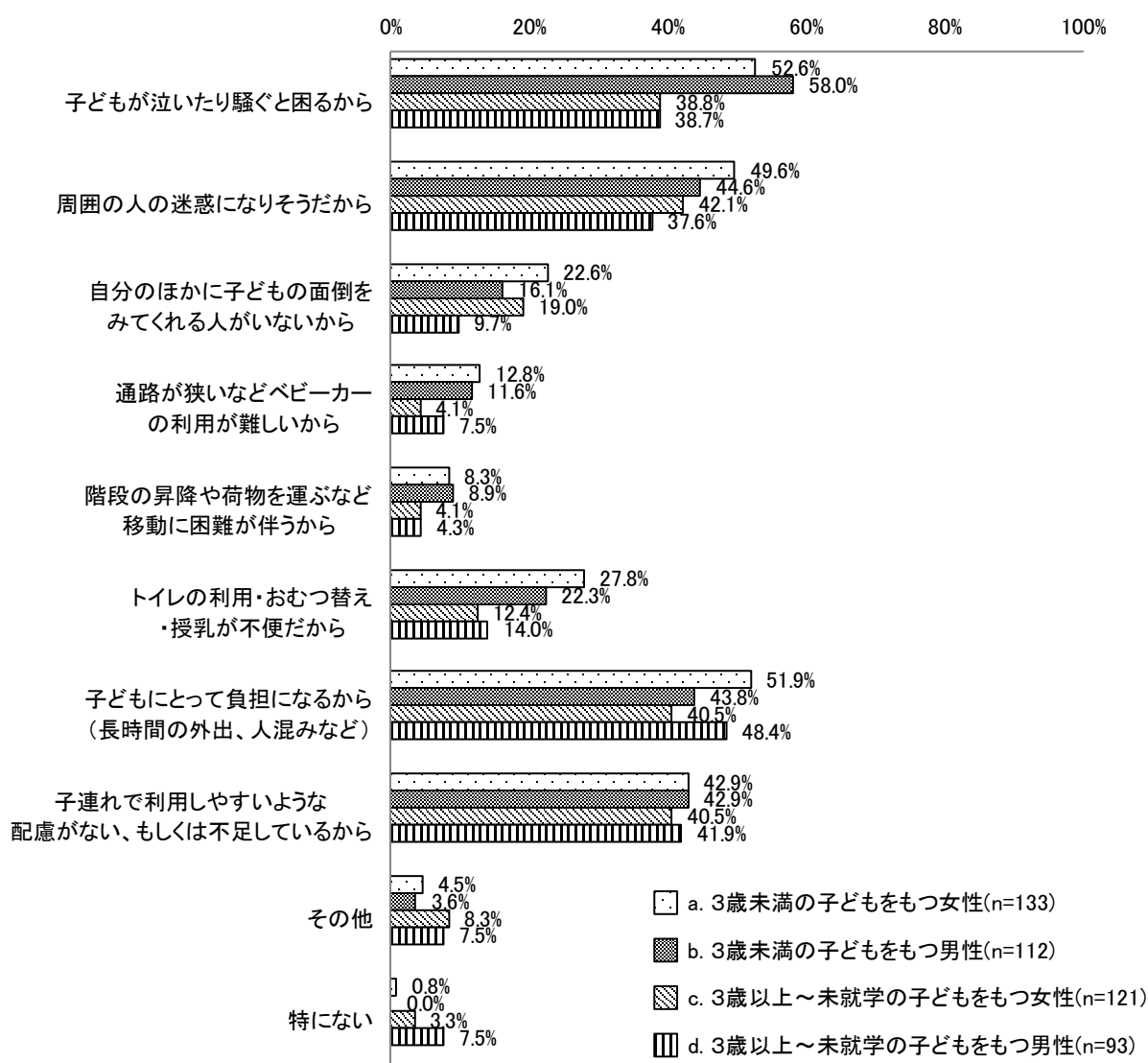


④【当事者層】子連れでの外出を控えている理由：居酒屋

自分一人と子どもで外出する際に、居酒屋への外出を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が52.6%でもっとも割合が高く、次いで「子どもにとって負担になるから（長時間の外出、人混みなど）」が51.9%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が58.0%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が44.6%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「周囲の人の迷惑になりそうだから」が42.1%でもっとも割合が高く、次いで「子どもにとって負担になるから（長時間の外出、人混みなど）」「子連れで利用しやすいような配慮がない、もしくは不足しているから」がそれぞれ40.5%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもにとって負担になるから（長時間の外出、人混みなど）」が48.4%でもっとも割合が高く、次いで「子連れで利用しやすいような配慮がない、もしくは不足しているから」が41.9%となっている。

図表 56 【当事者層】子連れでの居酒屋への外出を控えている理由：複数回答（AQ19_4）

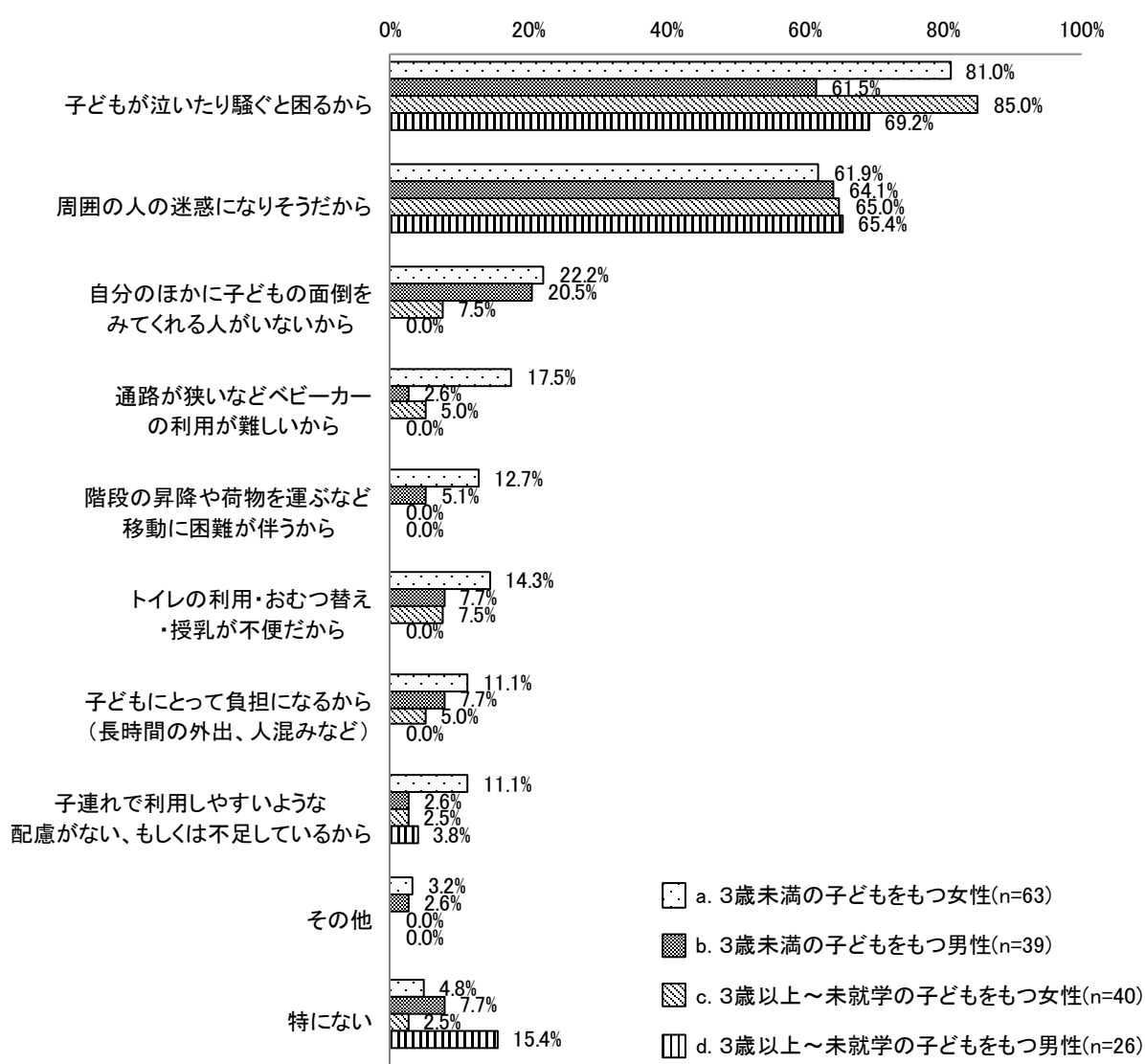


⑤【当事者層】子連れでの外出を控えている理由：図書館

自分一人と子どもで外出する際に、図書館への外出を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が81.0%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が61.9%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「周囲の人の迷惑になりそうだから」が64.1%でもっとも割合が高く、次いで「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が61.5%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が85.0%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が65.0%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が69.2%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が65.4%となっている。

図表 57 【当事者層】子連れでの図書館への外出を控えている理由：複数回答（AQ19_5）

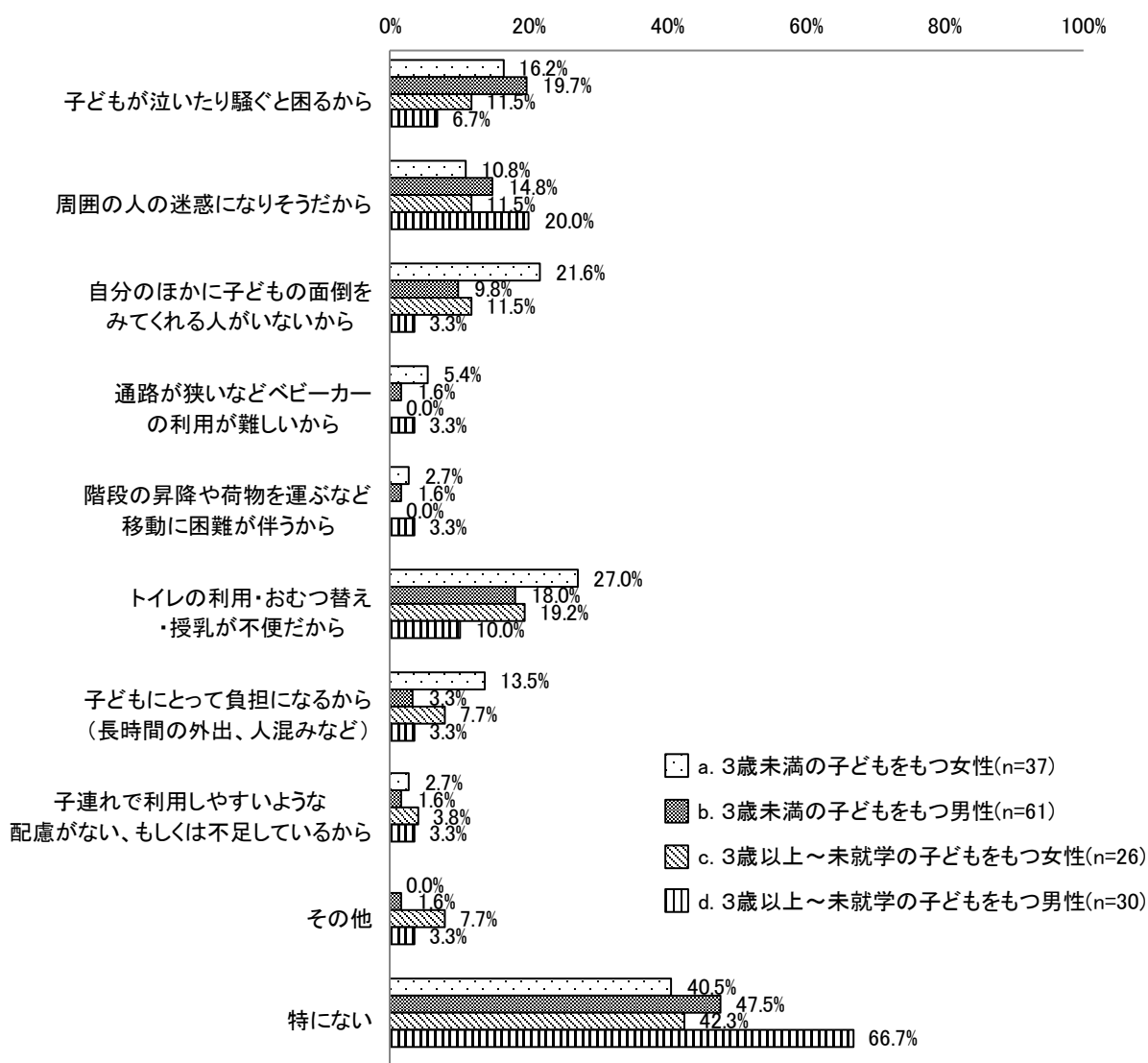


⑥【当事者層】子連れでの外出を控えている理由：公園

自分一人と子どもで外出する際に、公園への外出を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「特にない」が40.5%でもっとも割合が高く、次いで「トイレの利用・おむつ替え・授乳が不便だから」が27.0%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「特にない」が47.5%でもっとも割合が高く、次いで「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が19.7%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「特にない」が42.3%でもっとも割合が高く、次いで「トイレの利用・おむつ替え・授乳が不便だから」が19.2%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「特にない」が66.7%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が20.0%となっている。

図表 58 【当事者層】子連れでの公園への外出を控えている理由：複数回答（AQ19_6）

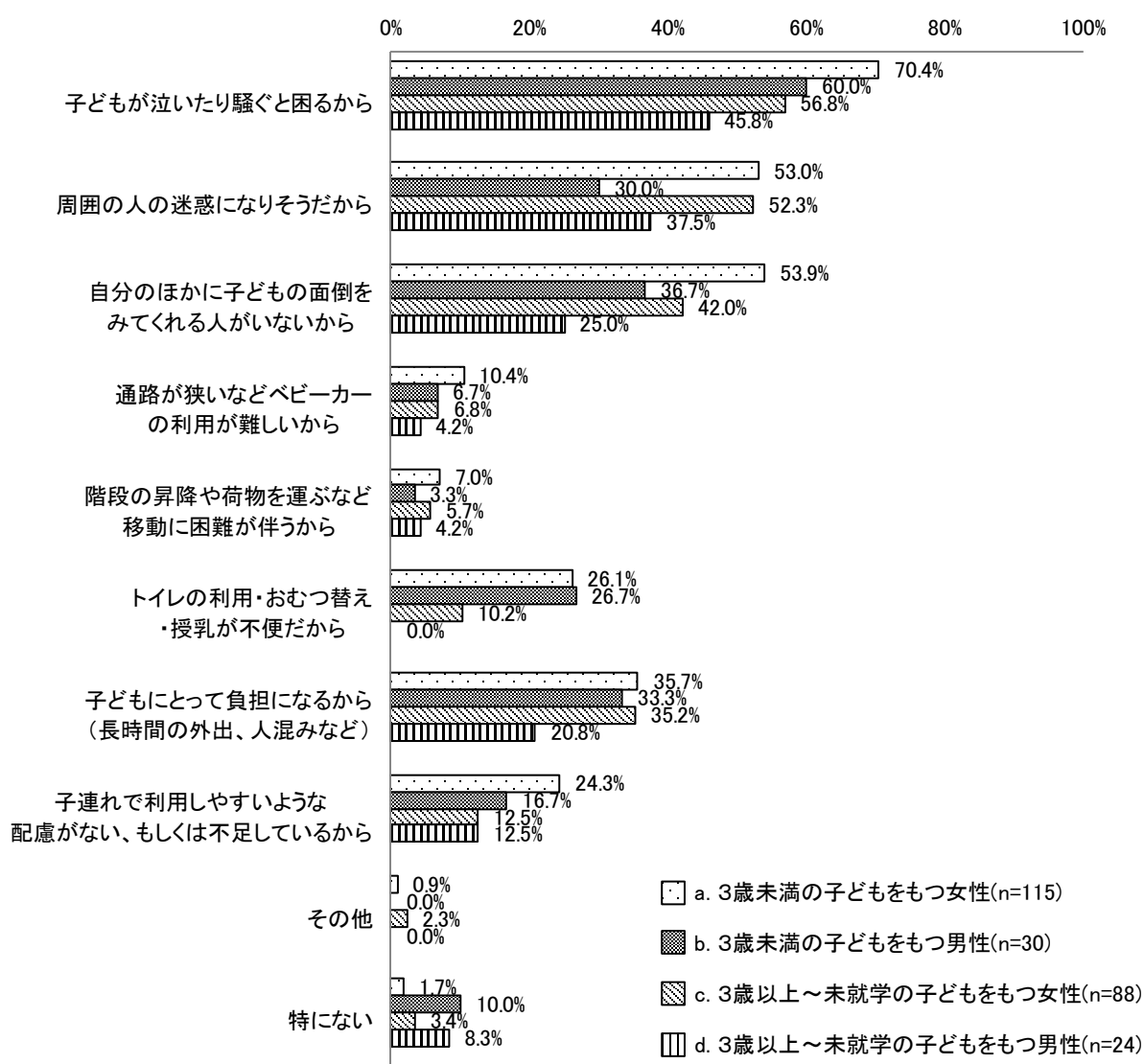


⑦【当事者層】子連れでの外出を控えている理由：美容院（子ども自身の散髪も含む）

自分一人と子どもで外出する際に、美容院（子ども自身の散髪も含む）への外出を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が70.4%でもっとも割合が高く、次いで「自分のほかに子どもの面倒をみてくれる人がいないから」が53.9%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が60.0%でもっとも割合が高く、次いで「自分のほかに子どもの面倒をみてくれる人がいないから」が36.7%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が56.8%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が52.3%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が45.8%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が37.5%となっている。

図表 59 【当事者層】子連れでの美容院（子ども自身の散髪も含む）への外出を控えている理由：複数回答（AQ19_7）



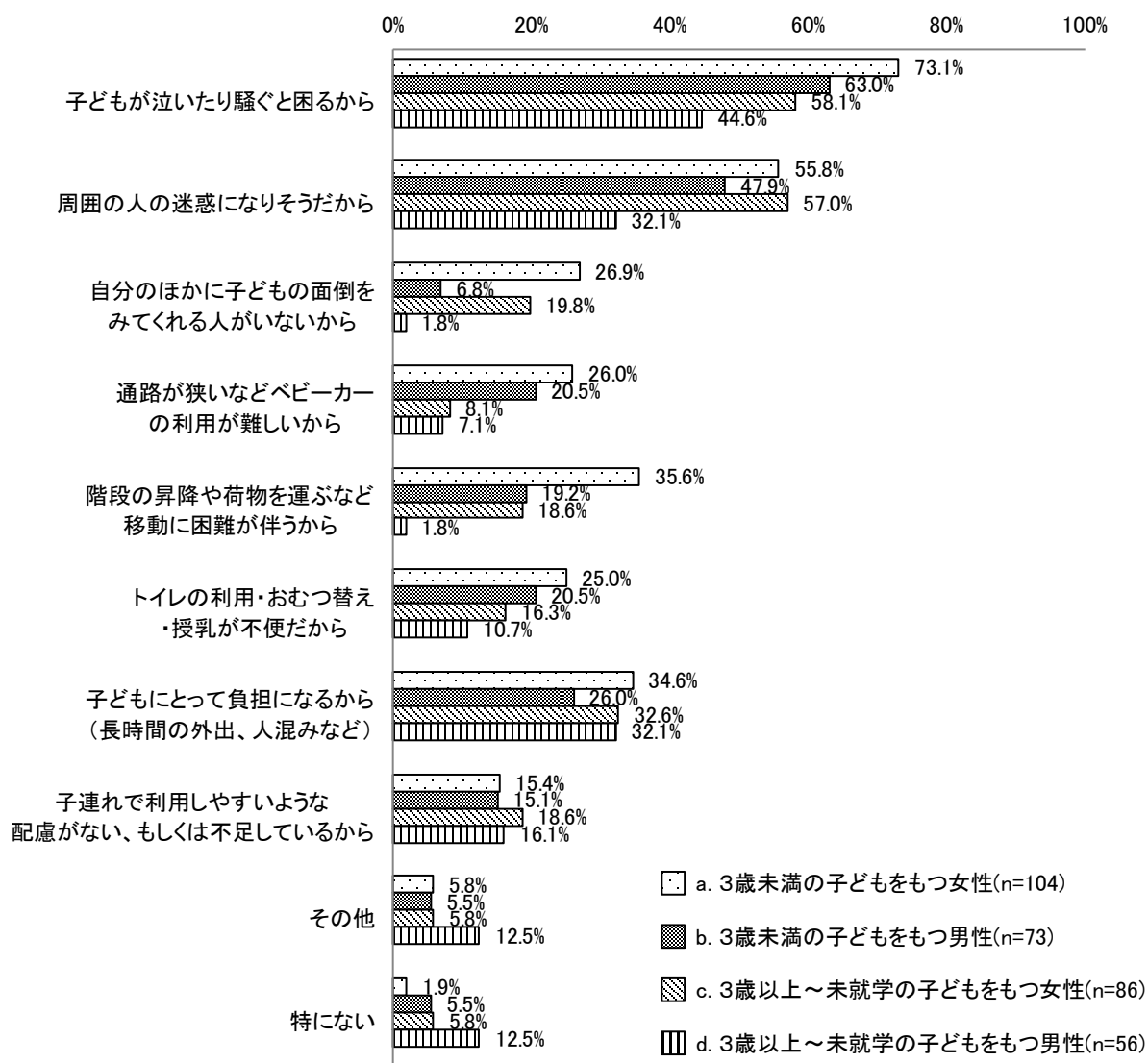
⑧【当事者層】子連れでの利用を控えている理由：公共交通機関（電車）

自分一人と子どもで外出する際に、公共交通機関（電車）の利用を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が73.1%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が55.8%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が63.0%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が47.9%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が58.1%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が57.0%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が44.6%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」「子どもにとって負担になるから（長時間の外出、人混みなど）」が32.1%となっている。

「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、他と比べて、「自分のほかに子どもの面倒をみてくれる人がいないから」「通路が狭いなどベビーカーの利用が難しいから」「階段の昇降や荷物を運ぶなど移動に困難が伴うから」「トイレの利用・おむつ替え・授乳が不便だから」の割合が高い傾向がみられる。

図表 60 【当事者層】子連れでの公共交通機関（電車）の利用を控えている理由：複数回答
(AQ19_8)



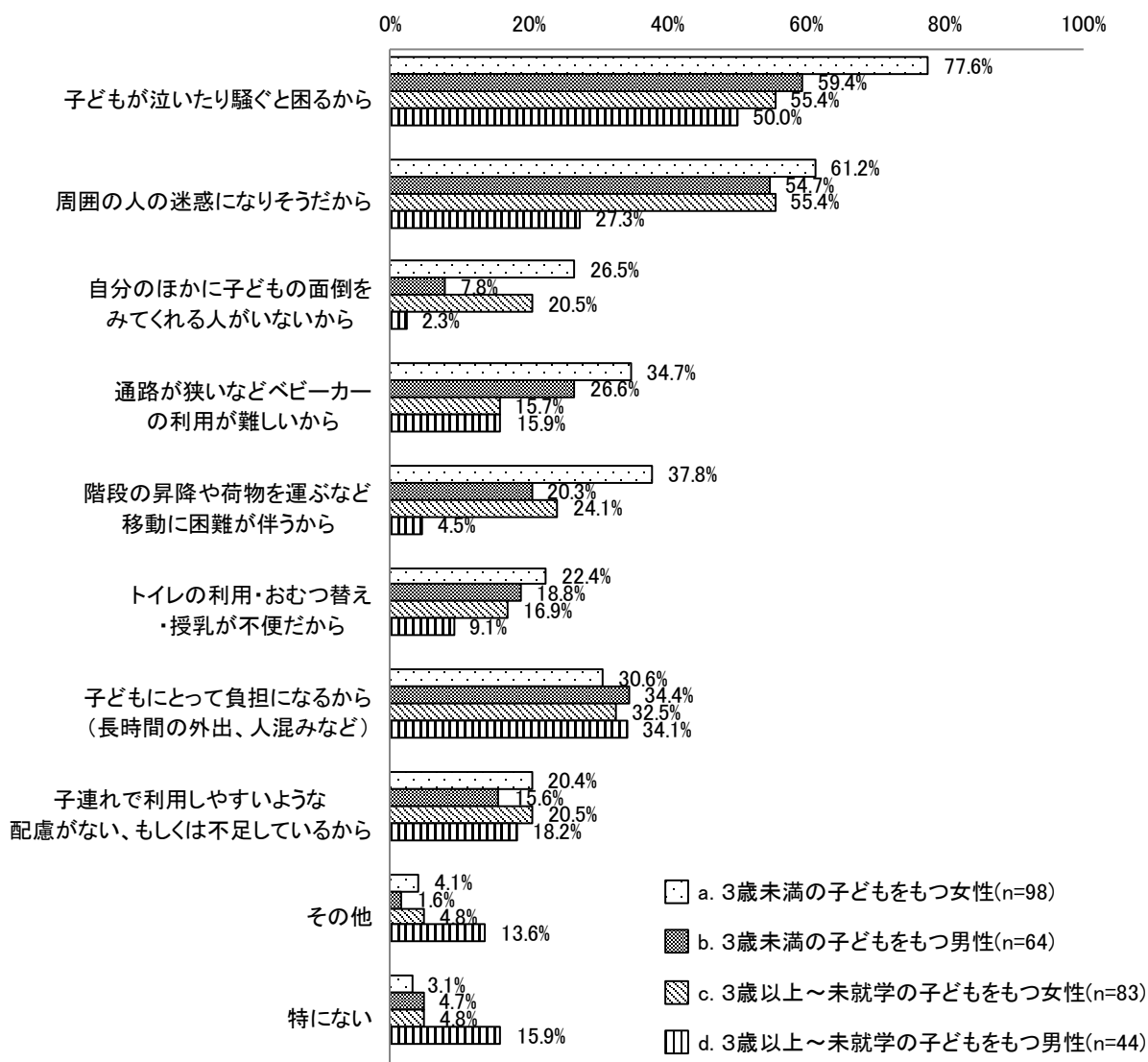
⑨【当事者層】子連れでの利用を控えている理由：公共交通機関（バス）

自分一人と子どもで外出する際に、公共交通機関（バス）の利用を控えていると回答した人について、その理由をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が77.6%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が61.2%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が59.4%でもっとも割合が高く、次いで「周囲の人の迷惑になりそうだから」が54.7%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」「周囲の人の迷惑になりそうだから」が55.4%でもっとも割合が高く、次いで「子どもにとって負担になるから（長時間の外出、人混みなど）」が32.5%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもが泣いたり騒ぐと困るから」が50.0%でもっとも割合が高く、次いで「子どもにとって負担になるから（長時間の外出、人混みなど）」が34.1%となっている。

「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、他と比べて、「自分のほかに子どもの面倒をみてくれる人がいないから」「通路が狭いなどベビーカーの利用が難しいから」「階段の昇降や荷物を運ぶなど移動に困難が伴うから」「トイレの利用・おむつ替え・授乳が不便だから」の割合が高い傾向がみられる。

図表 61 【当事者層】子連れでの公共交通機関（バス）の利用を控えている理由：複数回答
(AQ19_9)



（３）子連れでの外出中に周囲に助けられたいと思う経験／子連れの親子を助けようとする経験

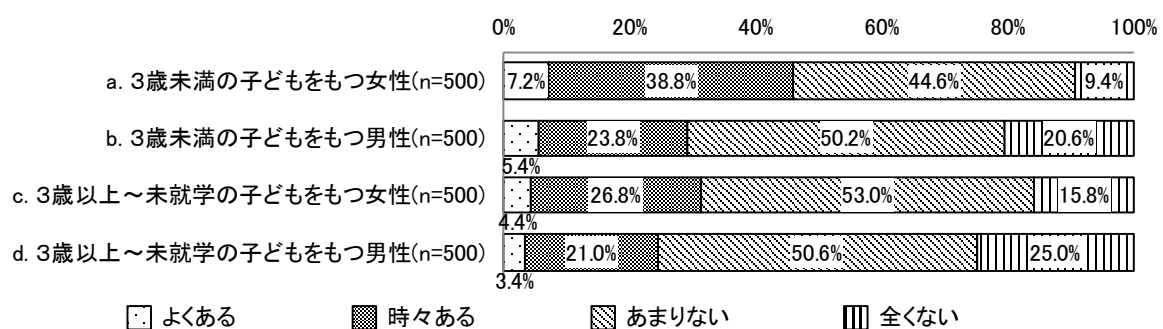
①【当事者層】子どもと外出中に困った際、周りの人の助けを借りたいと思うことがあるか

子どもがいる層について、子どもと外出中に困った際、周りの人の助けを借りたいと思うことがあるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「あまりない」が44.6%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が38.8%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「あまりない」が50.2%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が23.8%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「あまりない」が53.0%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が26.8%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「あまりない」が50.6%でもっとも割合が高く、次いで「全くない」が25.0%となっている。

子どもと外出中に困った際、周りの人の助けを借りたいと思うと回答した割合（「よくある」「時々ある」の合計）は、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」で他と比べて高い傾向がみられる。

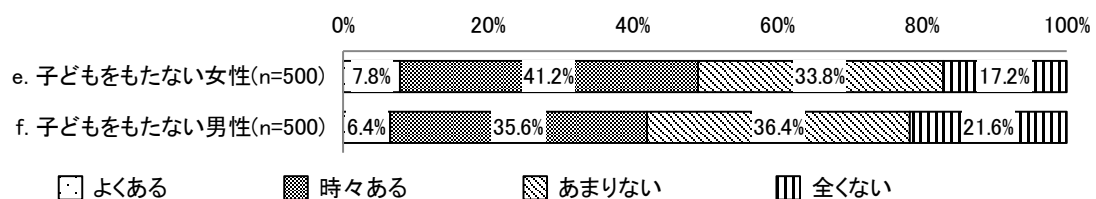
図表 62 【当事者層】子どもと外出中に困った際、周りの人の助けを借りたいと思うことがあるか：単数回答（AQ20_1）



②【非当事者層】外出先において、困っている様子の子連れの親を手助けしたいと思うことがあるか

子どもがいない層について、外出先において、困っている様子の子連れの親を手助けしたいと思うことがあるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「時々ある」が41.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が33.8%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「あまりない」が36.4%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が35.6%となっている。

図表 63 【非当事者層】外出先において、困っている様子の子連れの親を手助けしたいと思うことがあるか：単数回答（BQ20_1）



（４）子連れでの外出中に助けられる経験／子連れの親子を助ける経験

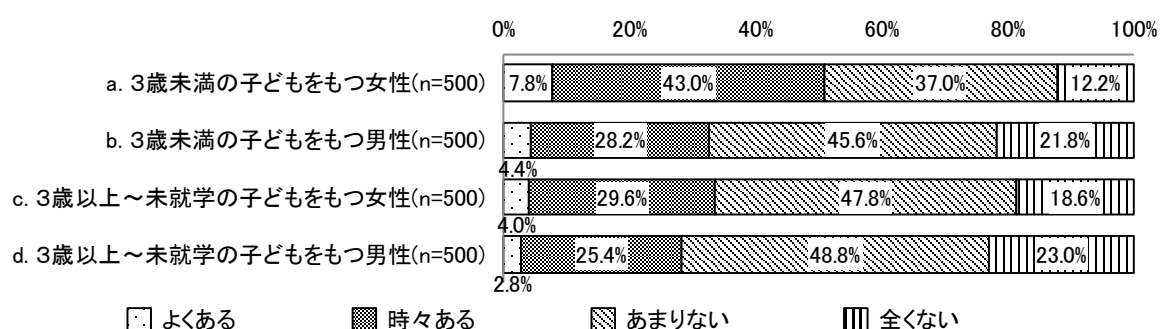
①【当事者層】子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられることがあるか

子どもがいる層について、子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられることがあるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「時々ある」が43.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりない」が37.0%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「あまりない」が45.6%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が28.2%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「あまりない」が47.8%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が29.6%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「あまりない」が48.8%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が25.4%となっている。

子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられることがあると回答した割合（「よくある」「時々ある」の合計）は、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」で他と比べて高い傾向がみられる。

図表 64 【当事者層】子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられることがあるか：単数回答（AQ20_2）

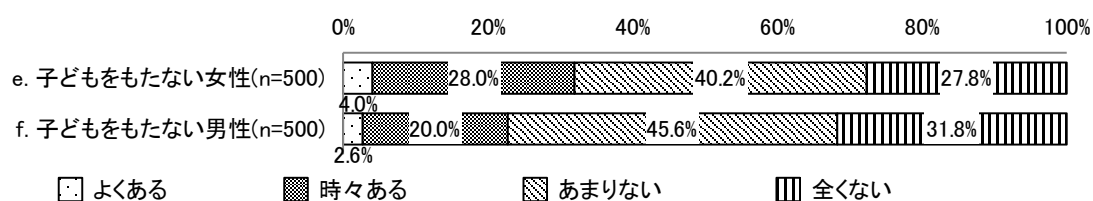


②【非当事者層】外出先において、困っている様子の子連れの子に声をかけたり、手助けすることがあるか

子どもがいない層について、外出先において、困っている様子の子連れの子に声をかけたり、手助けすることがあるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「あまりない」が40.2%でもっとも割合が高く、次いで「時々ある」が28.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「あまりない」が45.6%でもっとも割合が高く、次いで「全くない」が31.8%となっている。

外出先において、困っている様子の子連れの子に声をかけたり、手助けすることがあると回答した割合（「よくある」「時々ある」の合計）は、女性が3割強、男性が2割強と、女性の方が高い傾向がみられる。

図表 65 【非当事者層】外出先において、困っている様子の子連れの子に声をかけたり、手助けすることがあるか:単数回答 (BQ20_2)



(5) 子連れでの外出中に周囲に助けられることへの抵抗感／子連れ親子を手助けすることの抵抗感

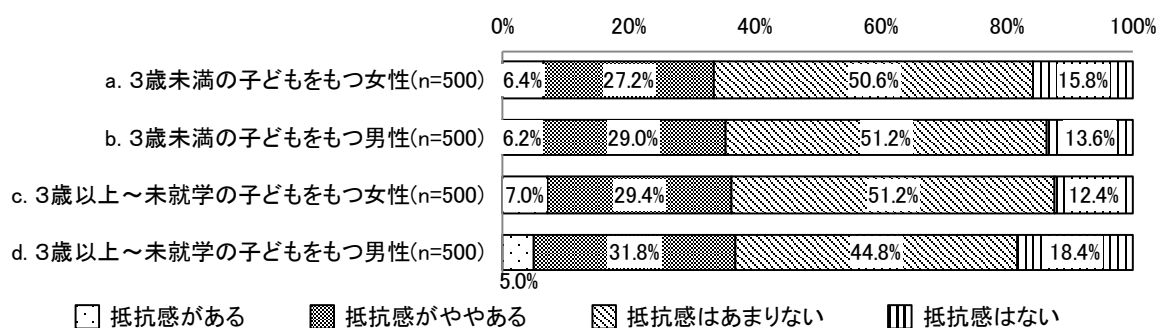
①【当事者層】子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられたりすることへの抵抗感

子どもがいる層について、子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられたりすることへの抵抗感があるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「抵抗感はありません」が50.6%でもっとも割合が高く、次いで「抵抗感がややある」が27.2%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「抵抗感はありません」が51.2%でもっとも割合が高く、次いで「抵抗感がややある」が29.0%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「抵抗感はありません」が51.2%でもっとも割合が高く、次いで「抵抗感がややある」が29.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「抵抗感はありません」が44.8%でもっとも割合が高く、次いで「抵抗感がややある」が31.8%となっている。

a～d いずれにおいても、子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられたりすることへの抵抗感があると回答した割合（「抵抗感がある」「抵抗感がややある」の合計）は35%前後で、男女や子どもの年齢による違いはみられない。

図表 66 【当事者層】子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられたりすることへの抵抗感：単数回答（AQ21）

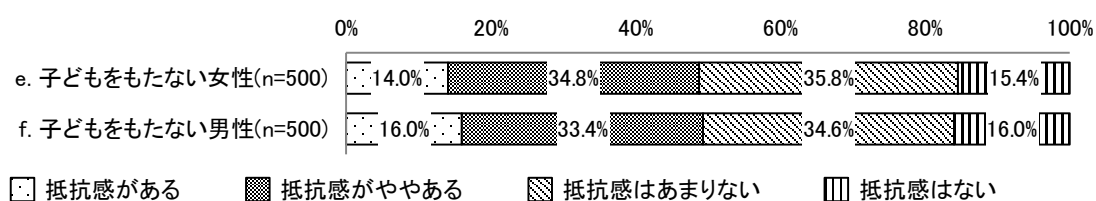


②【非当事者層】外出先において、困っている様子の子連れの親に声をかけたり、手助けをしたりすることへの抵抗感

子どもがいない層について、外出先において、困っている様子の子連れの親に声をかけたり、手助けをしたりすることへの抵抗感があるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「抵抗感はありません」が35.8%でもっとも割合が高く、次いで「抵抗感がややある」が34.8%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「抵抗感はありません」が34.6%でもっとも割合が高く、次いで「抵抗感がややある」が33.4%となっている。

男女ともに、抵抗感があると回答した割合（「抵抗感がある」「抵抗感がややある」の合計）と、抵抗感はないと回答した割合（「抵抗感はない」「抵抗感はありません」の合計）は、ほぼ拮抗している。

図表 67 【非当事者層】外出先において、困っている様子の子連れの親に声をかけたり、手助けをしたりすることへの抵抗感：単数回答（BQ21）



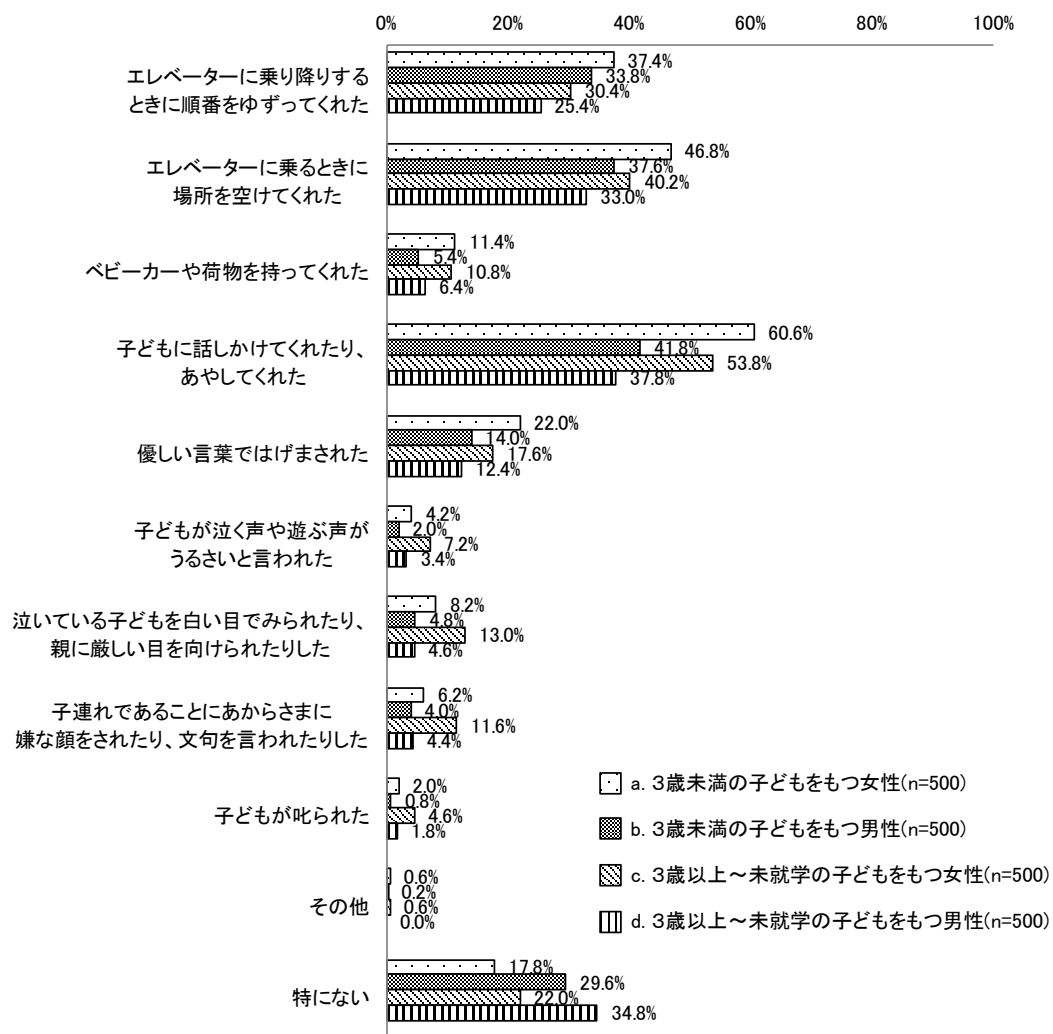
(6) 子連れでの外出時に周囲からされたり、言われたりした経験／子連れ親子にしたり、言ったりした経験

①【当事者層】子どもと外出した先で、周りの人からされたり、言われたりした経験

子どもがいる層について、子どもと外出した先で、周りの人からされたり、言われたりした経験をみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」が60.6%でもっとも割合が高く、次いで「エレベーターに乗るときに場所を空けてくれた」が46.8%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」が41.8%でもっとも割合が高く、次いで「エレベーターに乗るときに場所を空けてくれた」が37.6%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」が53.8%でもっとも割合が高く、次いで「エレベーターに乗るときに場所を空けてくれた」が40.2%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた」が37.8%でもっとも割合が高く、次いで「特にない」が34.8%となっている。

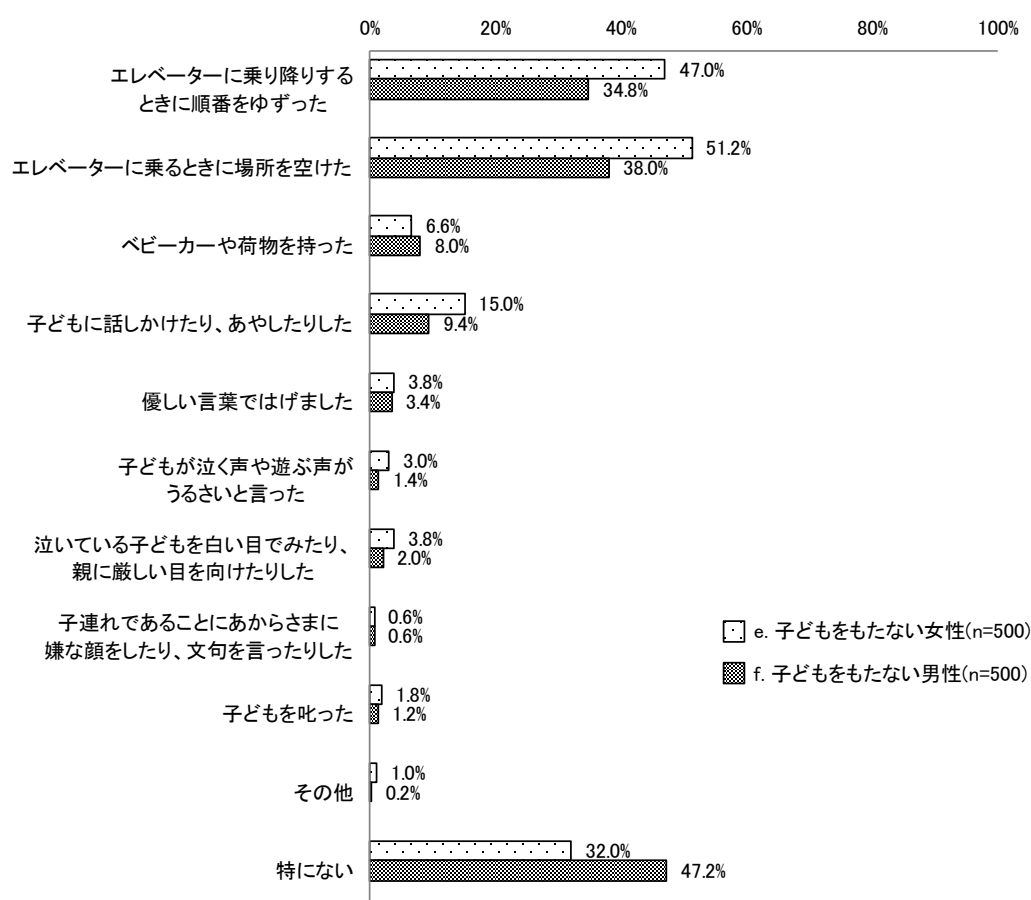
図表 68 【当事者層】子どもと外出した先で、周りの人からされたり、言われたりした経験：複数回答 (AQ22)



②【非当事者層】外出先で子連れの親子に対して、したり、言ったりした経験

子どもがいない層について、外出先で子連れの親子に対して、したり、言ったりした経験をみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「エレベーターに乗るときに場所を空けた」が51.2%でもっとも割合が高く、次いで「エレベーターに乗り降りするときに順番をゆずった」が47.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「特にない」が47.2%でもっとも割合が高く、次いで「エレベーターに乗るときに場所を空けた」が38.0%となっている。

図表 69 【非当事者層】外出先で子連れの親子に対して、したり、言ったりした経験：複数回答
(BQ22)



5. 地域における子ども

(1) 子どもが公園等で遊ぶときの子どもの遊ぶ声などについて

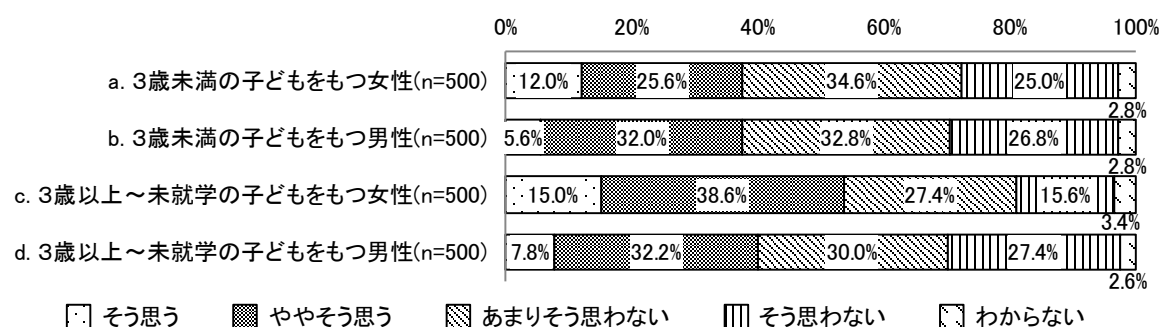
①【当事者層】子どもが公園等で遊ぶとき、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑がかからないか気になるか

子どもがいる層について、子どもが公園等で遊ぶとき、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑がかからないか気になるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「あまりそう思わない」が34.6%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が25.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が32.8%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が32.0%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が38.6%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が27.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が32.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が30.0%となっている。

子どもが公園等で遊ぶとき、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑がかからないか気になるかと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」で他と比べて高い傾向がみられる。

図表 70 【当事者層】子どもが公園等で遊ぶとき、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑がかからないか気になるか：単数回答（AQ23_1）

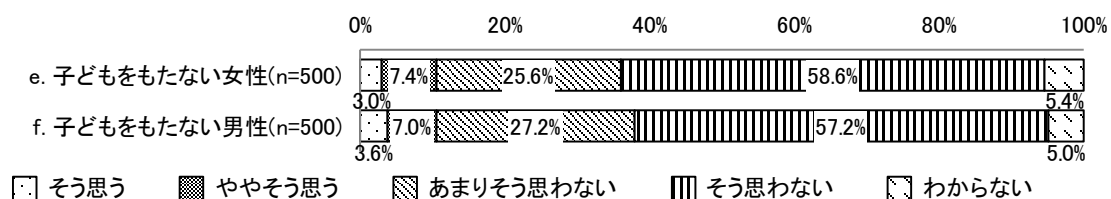


②【非当事者層】公園等で子どもが遊ぶ声を迷惑に思うか

子どもがいない層について、公園等で子どもが遊ぶ声を迷惑に思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「そう思わない」が 58.6%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 25.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「そう思わない」が 57.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 27.2%となっている。

公園等で子どもが遊ぶ声を迷惑に思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女とも 1 割前後となっている。

図表 71 【非当事者層】公園等で子どもが遊ぶ声を迷惑に思うか：単数回答（BQ23_1）



（２）自宅での生活における子どもの泣き声や足音などについて

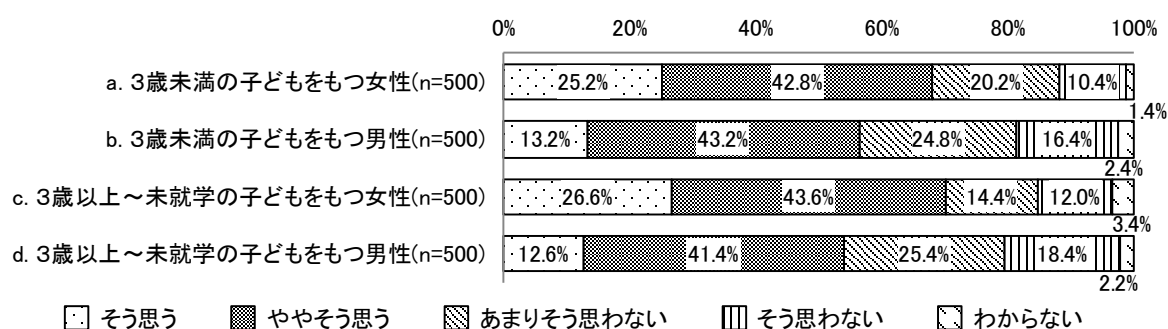
①【当事者層】自宅で生活するなかで、子どもの泣き声や足音などが、近隣の迷惑になるのではないかと気になるか

子どもがいる層について、自宅で生活するなかで、子どもの泣き声や足音などが、近隣の迷惑になるのではないかと気になるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が42.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が25.2%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が43.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が24.8%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が43.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が26.6%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が41.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が25.4%となっている。

子どもの年齢にかかわらず、女性の方が、男性に比べて、自宅で生活するなかで、子どもの泣き声や足音などが、近隣の迷惑になるのではないかと気になると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）が高い傾向がみられる。

図表 72 【当事者層】自宅で生活するなかで、子どもの泣き声や足音などが、近隣の迷惑になるのではないかと気になるか：単数回答（AQ23_2）

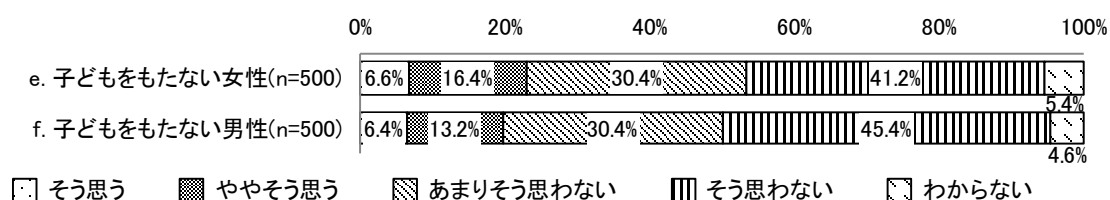


②【非当事者層】自宅で生活するなかで、近隣に住む子どもの泣き声や足音などを迷惑だと思
か

子どもがいない層について、自宅で生活するなかで、近隣に住む子どもの泣き声や足音などを迷惑だと思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「そう思わない」が41.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が30.4%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「そう思わない」が45.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が30.4%となっている。

自宅で生活するなかで、近隣に住む子どもの泣き声や足音などを迷惑だと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女とも2割前後となっている。

図表 73 【非当事者層】自宅で生活するなかで、近隣に住む子どもの泣き声や足音などを迷惑だと思
うか：単数回答（BQ23_2）



（３）保育施設等における子どもの子どもの遊ぶ声などについて

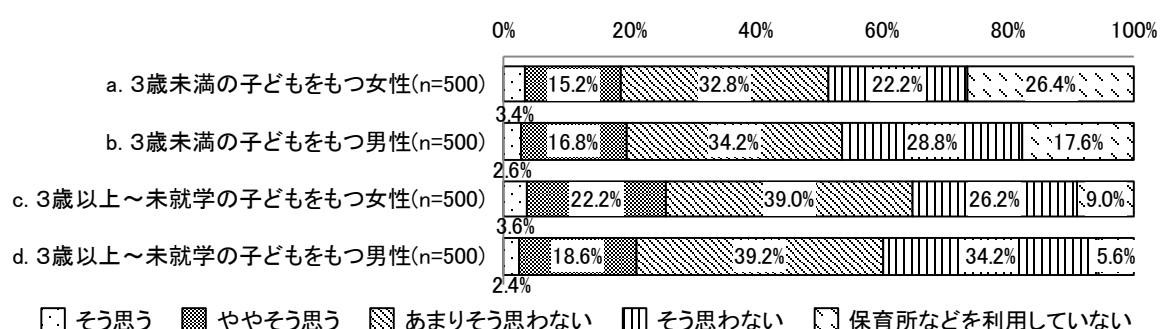
①【当事者層】子どもが利用している保育所などが、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑をかけていると感じるか

子どもがいる層について、利用している保育所などが、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑をかけていると感じるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「あまりそう思わない」が32.8%でもっとも割合が高く、次いで「保育所などを利用していない」が26.4%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が34.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が28.8%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「あまりそう思わない」が39.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が26.2%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が39.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が34.2%となっている。

子どもが利用している保育所などが、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑をかけていると感じると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）について、3歳以上～未就学児の子どもがいる層では、男女で大きな差はみられない。

図表 74 【当事者層】子どもが利用している保育所などが、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑をかけていると感じるか：単数回答（AQ24）

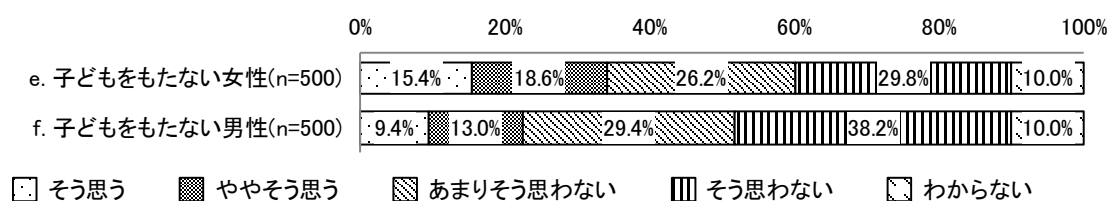


②【非当事者層】自宅の隣に保育所などができるとすると、子どもが遊ぶ声などに対する不安を感じるか

子どもがいない層について、自宅の隣に保育所などができるとすると、子どもが遊ぶ声などに対する不安を感じるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「そう思わない」が29.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が26.2%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「そう思わない」が38.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が29.4%となっている。

自宅の隣に保育所などができるとすると、子どもが遊ぶ声などに対する不安を感じると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、女性が3割強、男性が2割強と、女性の方が高い傾向がみられる。

図表 75 【非当事者層】自宅の隣に保育所などができるとすると、子どもが遊ぶ声などに対する不安を感じるか:単数回答（BQ24）



6. 公共の場における子連れ親子の振る舞いに関する意識

(1) 公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く静かにしてほしいか

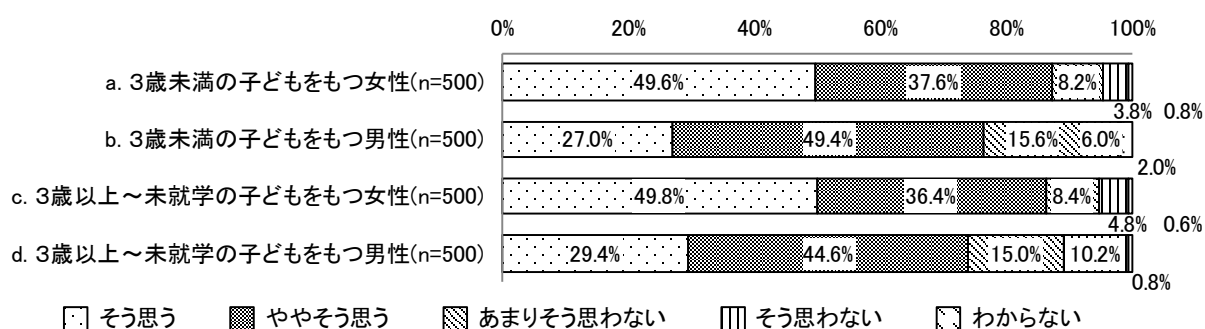
①【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思うか

子どもがいる層について、公共の場で自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「そう思う」が49.6%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が37.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が49.4%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が27.0%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「そう思う」が49.8%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が36.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が44.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が29.4%となっている。

公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、子どもの年齢にかかわらず、女性では9割弱、男性では7～8割程度とともに高い割合であるが、女性の方が、男性に比べてより強く感じている傾向がみられる。

図表 76 【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思うか：単数回答（AQ25_1）

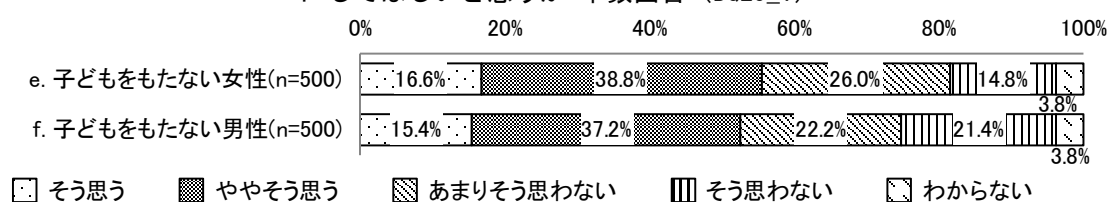


②【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思うか

子どもがいない層について、公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思うかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が38.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が26.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が37.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が22.2%となっている。

公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女とも5～6割前後となっている。

図表 77 【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思うか：単数回答（BQ25_1）



(2) 公共の場で子どもが泣いたり、騒いだりした際、申し訳なく思うことについて

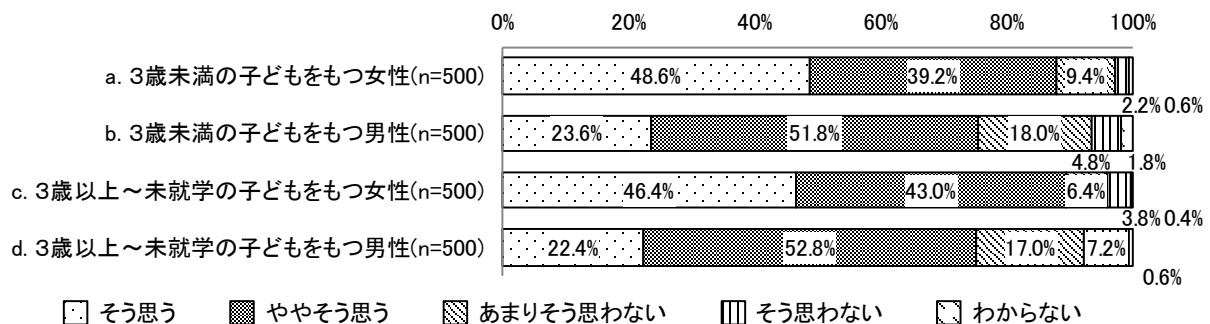
①【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、周りの人に対して申し訳なく思うか

子どもがいる層について、公共の場で自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、周りの人に対して申し訳なく思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「そう思う」が48.6%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が39.2%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が51.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が23.6%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「そう思う」が46.4%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が43.0%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が52.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が22.4%となっている。

公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、周りの人に対して申し訳なく思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、子どもの年齢にかかわらず、女性では9割弱、男性では7～8割程度とともに高い割合であるが、女性の方が、男性に比べてより強く感じている傾向がみられる。

図表 78 【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、周りの人に対して申し訳なく思うか：単数回答（AQ25_2）

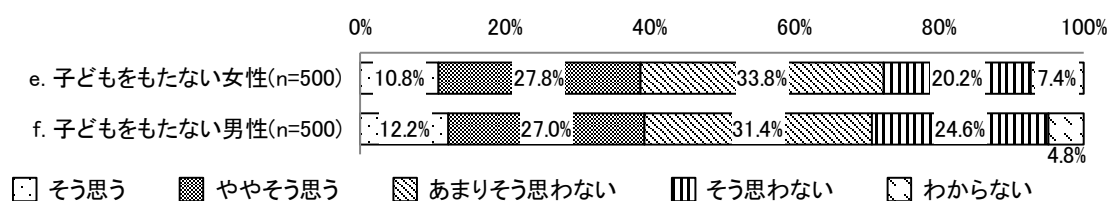


②【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、その親は周りの人に対して
申し訳なく思うべきだと思うか

子どもがいない層について、公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、その親は周りの人に対して申し訳なく思うべきだと思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「あまりそう思わない」が33.8%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が27.8%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「あまりそう思わない」が31.4%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が27.0%となっている。

公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、その親は周りの人に対して申し訳なく思うべきだと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女とも4割弱となっている。

図表 79 【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、その親は周りの人に対して申し訳なく思うべきだと思うか：単数回答（BQ25_2）



（３）公共の場で子どもが泣いたり、騒いだりした際の周囲の目

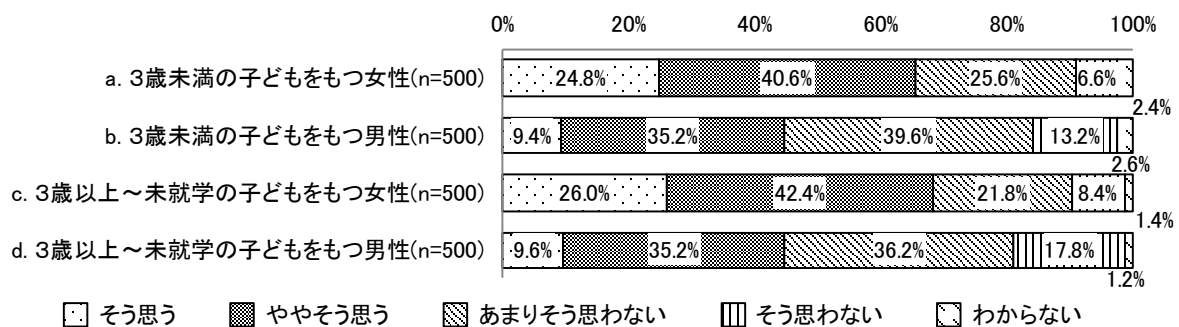
①【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、周囲から責められるのではないかと不安になるか

子どもがいる層について、公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、周囲から責められるのではないかと不安になるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が40.6%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が25.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が39.6%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が35.2%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が42.4%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が26.0%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が36.2%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が35.2%となっている。

公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、周囲から責められるのではないかと不安になると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、子どもの年齢にかかわらず、女性では6～7割程度となっており、女性の方が、男性に比べて高い傾向がみられる。

図表 80 【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりした際、周囲から責められるのではないかと不安になるか：単数回答（AQ25_3）

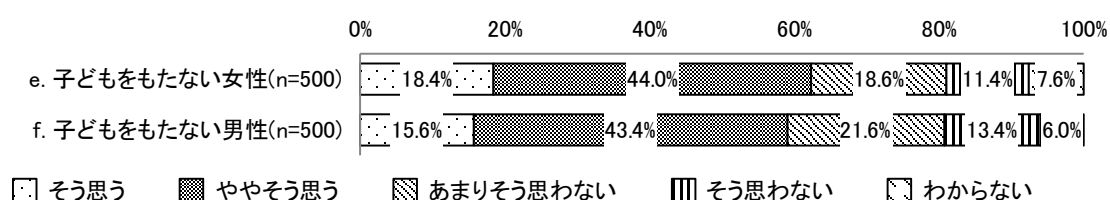


②【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、あたたかく見守りたいと思うか

子どもがいない層について、公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、あたたかく見守りたいと思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が44.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が18.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が43.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が21.6%となっている。

公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、あたたかく見守りたいと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女とも6割前後となっている。

図表 81 【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、あたたかく見守りたいと思うか：単数回答（BQ25_3）



（４）公共の場で子どもが泣いたり、騒いだりした際にそれを止める責任

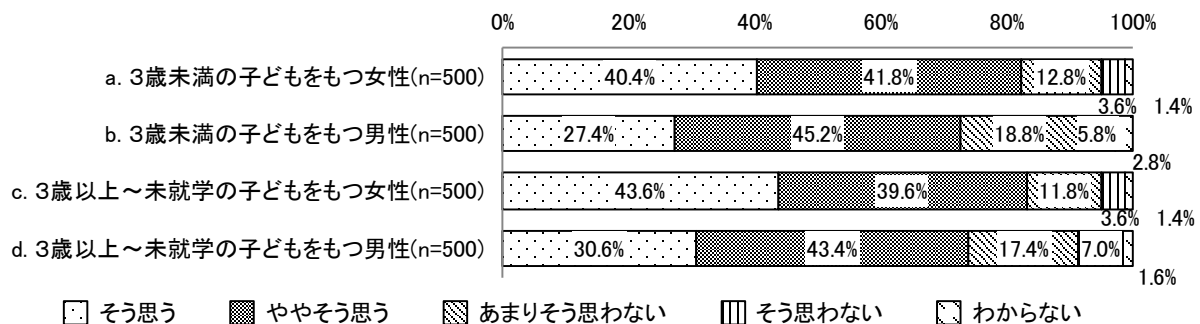
①【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、自分に止める責任があると思うか

子どもがいる層について、公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、自分に止める責任があると思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が41.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が40.4%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が45.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が27.4%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「そう思う」が43.6%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が39.6%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が43.4%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が30.6%となっている。

公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、自分に止める責任があると思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、子どもの年齢にかかわらず、女性では8割強、男性では7割強とともに高い割合であるが、女性の方が、男性に比べてより強く感じている傾向がみられる。

図表 82 【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、自分に止める責任があると思うか：単数回答（AQ25_5）

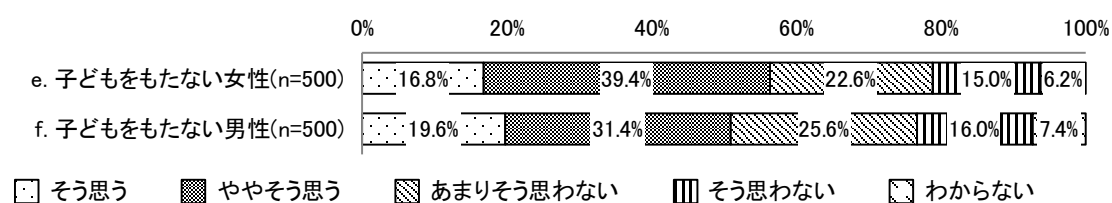


②【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その親は泣き止ませる責任があると思うか

子どもがいない層について、公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その親は泣き止ませる責任があると思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が 39.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 22.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が 31.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 25.6%となっている。

公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その親は泣き止ませる責任があると思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、女性が半数強、男性が4割強と、女性の方が高い傾向がみられる。

図表 83 【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その親は泣き止ませる責任があると思うか：単数回答（BQ25_5）



(5) 公共の場で子どもが泣いたり、騒いだりすることは仕方ないことだと思うか

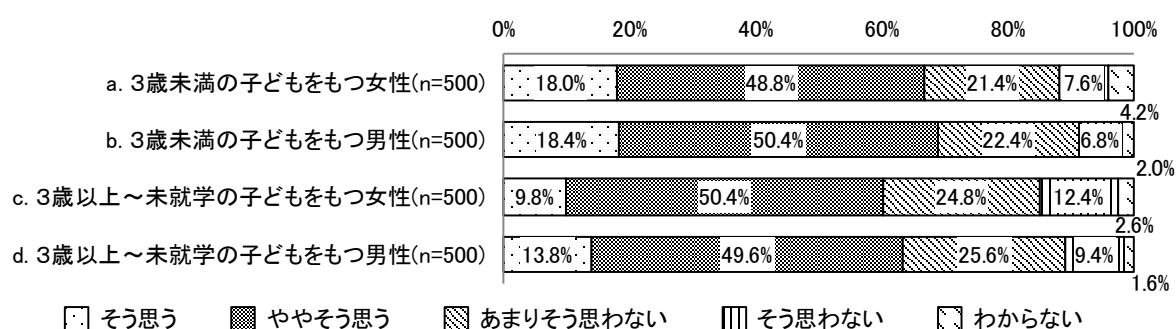
①【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、子どもだから仕方ないことだと思うか

子どもがいる層について、公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、子どもだから仕方ないことだと思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が48.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が21.4%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が50.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が22.4%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が50.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が24.8%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が49.6%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が25.6%となっている。

公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、3歳未満では男女とも7割弱、3歳以上～未就学児では男女とも6割強となっている。

図表 84 【当事者層】公共の場で、自分の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、子どもだから仕方ないことだと思うか:単数回答 (AQ25_6)

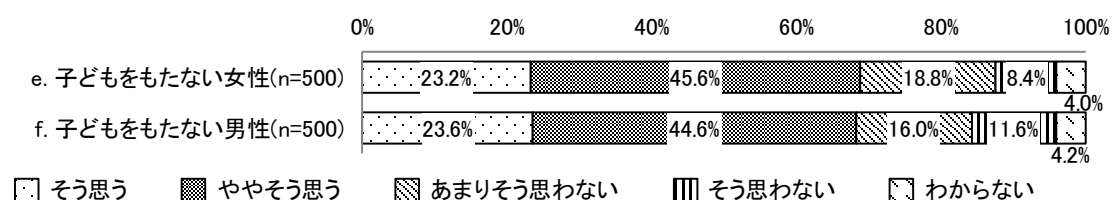


②【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることは仕方ないことだと思うか

子どもがいない層について、公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることは仕方ないことだと思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が 45.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 23.2%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が 44.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が 23.6%となっている。

公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることは仕方ないことだと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女とも7割弱となっている。

図表 85 【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることは仕方ないことだと思うか：単数回答（BQ25_6）



(6) 公共の場で子どもが泣いたり、騒いだりすることについて親を責める気持ち（その子の親がその子をあやす等している場合）

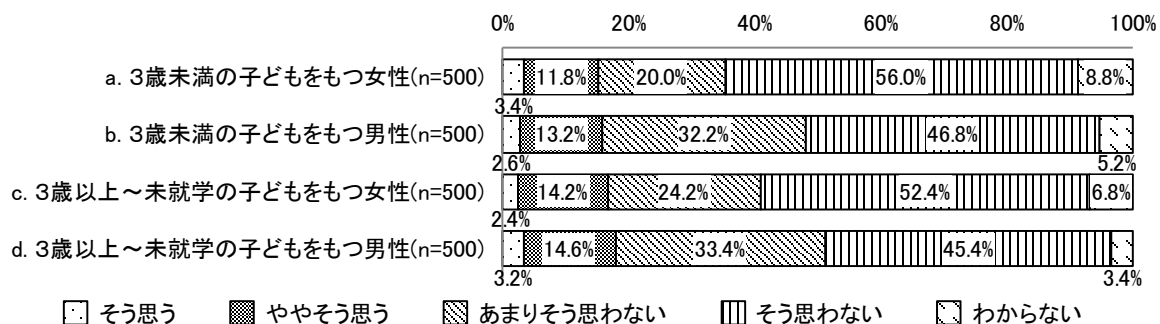
①【当事者層】公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになるか

子どもがいる層について、公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「そう思わない」が56.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が20.0%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「そう思わない」が46.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が32.2%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「そう思わない」が52.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が24.2%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「そう思わない」が45.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が33.4%となっている。

公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、自分の子どもの年齢にかかわらず1～2割程度であり、男女で大きな差はみられない。

図表 86 【当事者層】公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになるか：単数回答（AQ25_7）

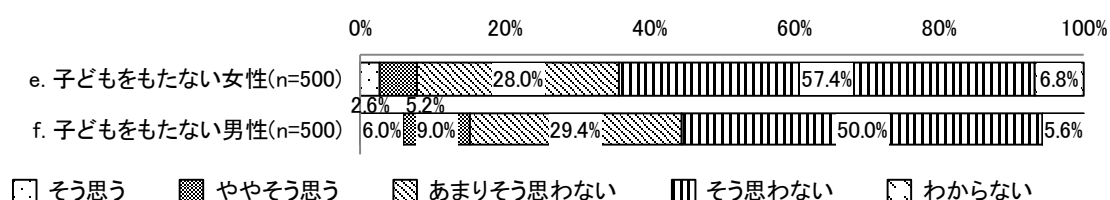


②【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになるか

子どもがいない層について、公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「そう思わない」が 57.4%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 28.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「そう思わない」が 50.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 29.4%となっている。

公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、女性は1割弱、男性は1割強となっている。

図表 87 【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになるか：単数回答（BQ25_7）



（７）公共の場で子どもが泣いたり、騒いだりすることについて親を責める気持ち（その子の親が何もしない場合）

①【当事者層】公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになるか

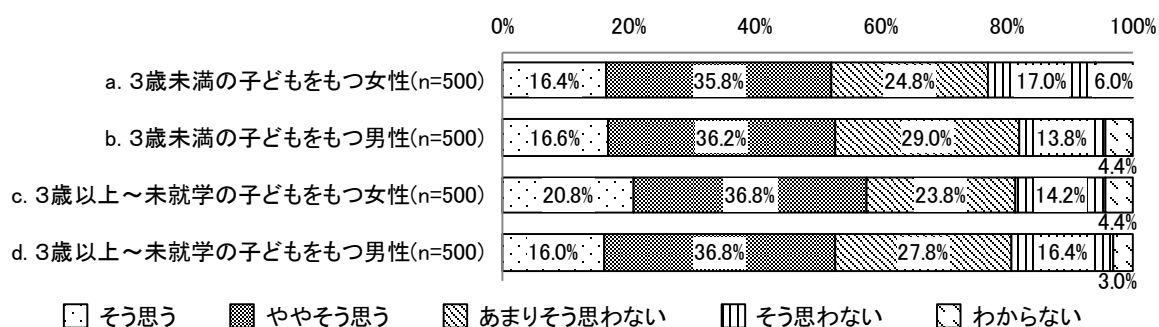
子どもがいる層について、公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになるかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が35.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が24.8%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が36.2%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が29.0%となっている。

「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が36.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が23.8%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が36.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が27.8%となっている。

公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、自分の子どもの年齢にかかわらず5～6割程度であり、男女で大きな差はみられない。

前問において、公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになると回答した割合（男女とも1～2割程度）と比べると、子どもが泣いたときの親の行動によって、親を責めたい気持ちになるかどうかが変わると考える人が一定程度いることがわかる。

図表 88 【当事者層】公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになるか：単数回答（AQ25_8）



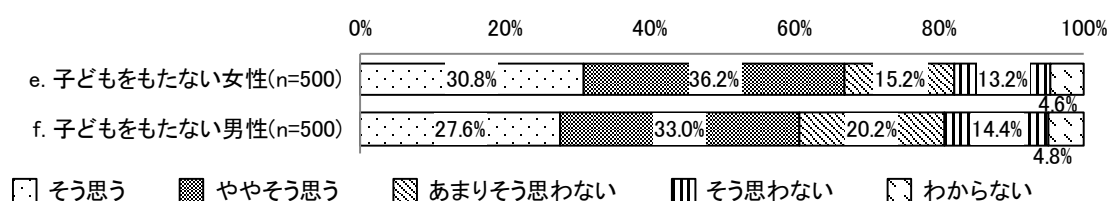
②【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになるか

子どもがいない層について、公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになるかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が36.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が30.8%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が33.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が27.6%となっている。

公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになると回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、女性が7割弱、男性は6割強であり、女性の方が、男性よりも高い傾向がみられる。

前問において、公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになると回答した割合（女性は1割弱、男性は1割強）と比べると、子どもがいない層においても、子どもが泣いたときの親の行動によって、親を責めたい気持ちになるかどうかが変わると考える人が一定程度いることがわかる。

図表 89 【非当事者層】公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになるか：単数回答（BQ25_8）



7. 他人の子どもに対する接し方や他人の子育てに対する意識

(1) 「他人の子どもを叱ること」についての考え

「他人の子どもを叱ってもよい」と思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が32.2%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が31.0%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が33.6%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が27.6%となっている。

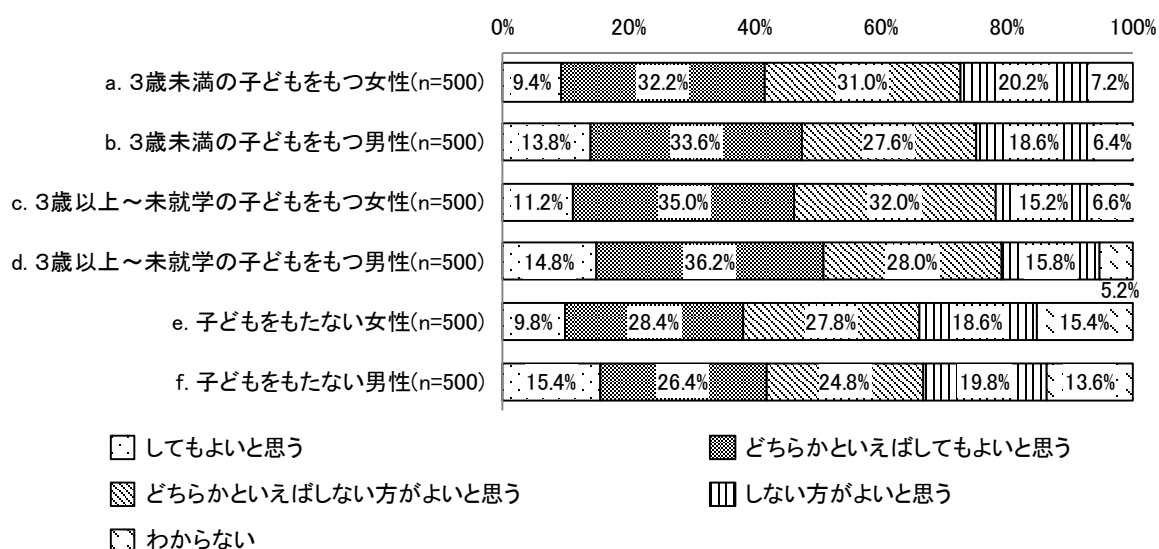
「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が35.0%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が32.0%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が36.2%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が28.0%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が28.4%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が27.8%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が26.4%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が24.8%となっている。

「他人の子どもを叱ってもよい」と思うと回答した割合（「してもよいと思う」「どちらかといえばしてもよいと思う」の合計）は、3歳以上の子どもをもつ層、3歳以上～未就学児の子どもをもつ層、子どもがいない層それぞれにおいて、男性の方が、女性に比べてやや高い傾向がみられる。

また、子どもがいない層では、「他人の子どもを叱ってもよい」と思うと回答した割合が男女とも4～5割程度と、子どもがいる層に比べて低い傾向がみられる。

図表 90 「他人の子どもを叱ること」についての考え：単数回答（Q26_1）



（２）「他人の子どもをあやすこと」についての考え

「他人の子どもをあやしてもよい」と思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「どちらかといえどもよいと思う」が47.6%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が34.4%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「どちらかといえどもよいと思う」が46.0%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が22.4%となっている。

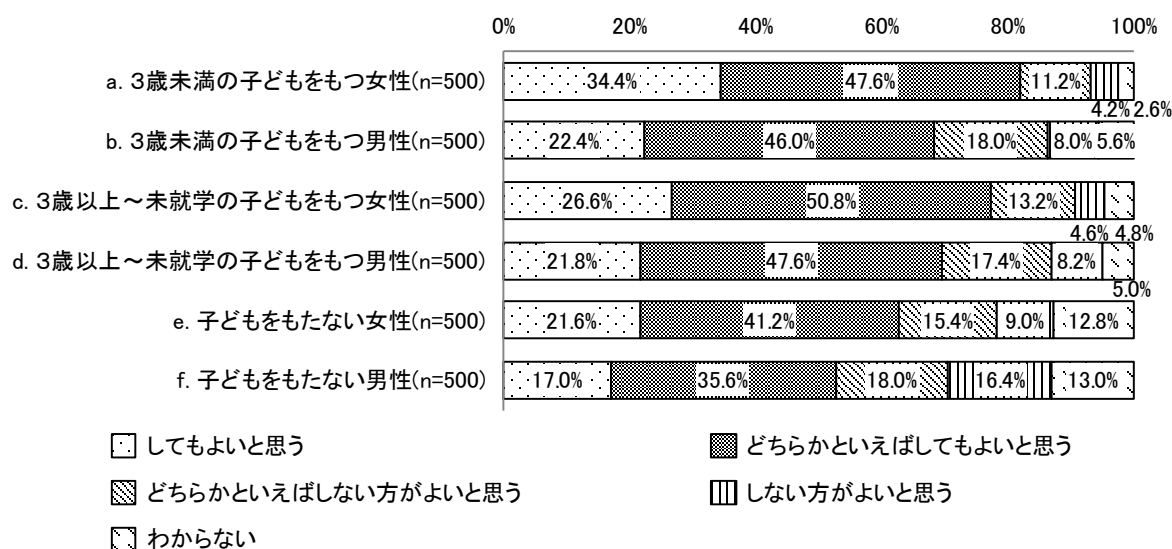
「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「どちらかといえどもよいと思う」が50.8%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が26.6%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「どちらかといえどもよいと思う」が47.6%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が21.8%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「どちらかといえどもよいと思う」が41.2%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が21.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「どちらかといえどもよいと思う」が35.6%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえどもよいと思わない方がよいと思う」が18.0%となっている。

「他人の子どもをあやしてもよい」と思うと回答した割合（「してもよいと思う」「どちらかといえどもよいと思う」の合計）は、3歳以上の子どもをもつ層、3歳以上～未就学児の子どもをもつ層、子どもがいない層それぞれにおいて、女性の方が、男性に比べてやや高い傾向がみられる。

また、子どもがいない層では、「他人の子どもをあやしてもよい」と思うと回答した割合が男女とも5～6割程度と、子どもがいる層に比べて低い傾向がみられる。

図表 91 「他人の子どもをあやすこと」についての考え：単数回答（Q26_2）



（３）「他人の子どもをほめること」についての考え

「他人の子どもをほめてもよい」と思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「してもよいと思う」が53.8%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしてもよいと思う」が37.6%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が42.2%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が36.4%となっている。

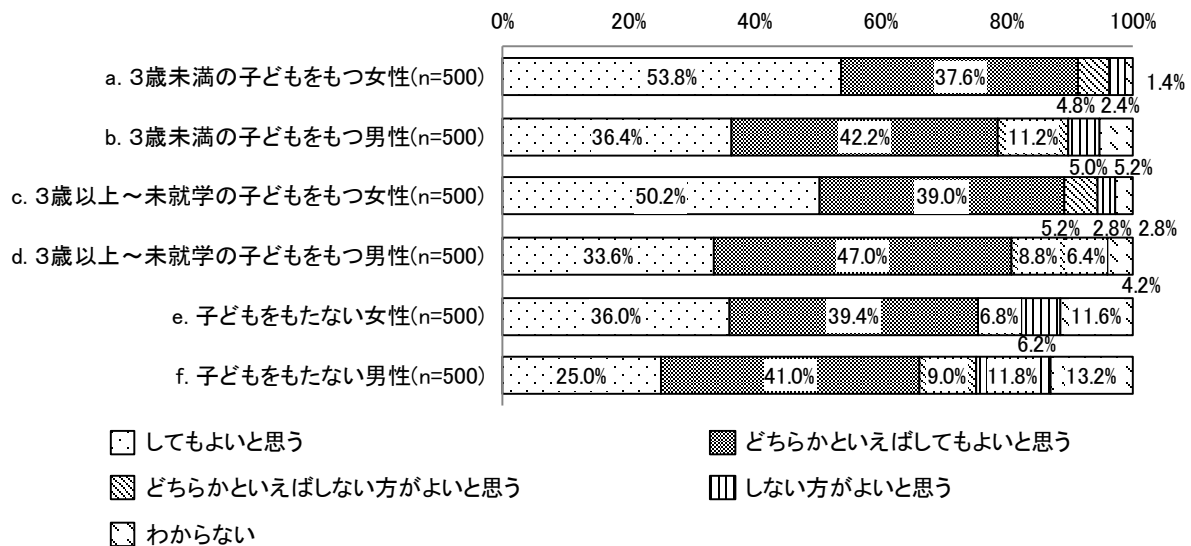
「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「してもよいと思う」が50.2%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしてもよいと思う」が39.0%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が47.0%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が33.6%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が39.4%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が36.0%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「どちらかといえばしてもよいと思う」が41.0%でもっとも割合が高く、次いで「してもよいと思う」が25.0%となっている。

「他人の子どもをほめてもよい」と思うと回答した割合（「してもよいと思う」「どちらかといえばしてもよいと思う」の合計）は、3歳以上の子どもをもつ層、3歳以上～未就学児の子どもをもつ層、子どもがいない層それぞれにおいて、女性の方が、男性に比べて高い傾向がみられる。

また、子どもがいない層では、「他人の子どもをほめてもよい」と思うと回答した割合が男女とも6～7割強と、子どもがいる層に比べて低い傾向がみられる。

図表 92 「他人の子どもをほめること」についての考え：単数回答（Q26_3）



（４）「子どもの世話の仕方について親に注意すること」についての考え

「子どもの世話の仕方について親に注意してよい」と思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「しない方がよいと思う」が43.8%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が36.2%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「どちらかといえばしない方がよいと思う」が36.8%でもっとも割合が高く、次いで「しない方がよいと思う」が28.0%となっている。

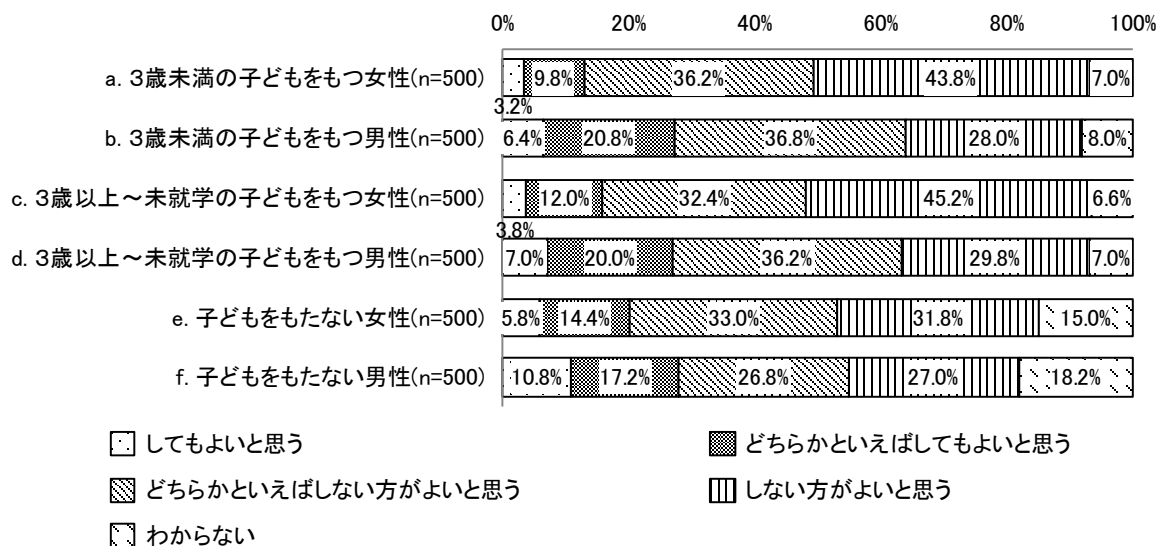
「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「しない方がよいと思う」が45.2%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が32.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「どちらかといえばしない方がよいと思う」が36.2%でもっとも割合が高く、次いで「しない方がよいと思う」が29.8%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「どちらかといえばしない方がよいと思う」が33.0%でもっとも割合が高く、次いで「しない方がよいと思う」が31.8%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「しない方がよいと思う」が27.0%でもっとも割合が高く、次いで「どちらかといえばしない方がよいと思う」が26.8%となっている。

「子どもの世話の仕方について親に注意してよい」と思うと回答した割合（「してもよいと思う」「どちらかといえばしてもよいと思う」の合計）は、3歳以上の子どもをもつ層、3歳以上～未就学児の子どもをもつ層、子どもがいない層それぞれにおいて、男性の方が、女性に比べて、そう思う割合が高い傾向がみられる。

また、子どもがいる層といない層で、「子どもの世話の仕方について親に注意してよい」と思うと回答した割合には大きな差はみられない。

図表 93 「子どもの世話の仕方について親に注意すること」についての考え：単数回答（Q26_4）



8. 子育て支援に対する社会の気運

(1) 日本社会は子育てがしやすい社会か

現在の日本社会は、子育てがしやすい社会かどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「あまりそう思わない」が42.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が30.4%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が35.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が27.8%となっている。

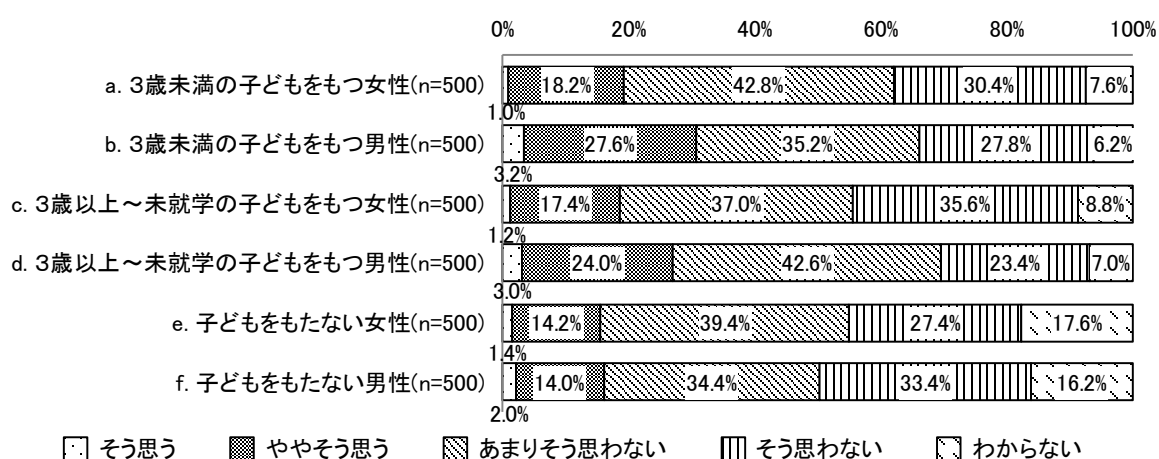
「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「あまりそう思わない」が37.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が35.6%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が42.6%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が24.0%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「あまりそう思わない」が39.4%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が27.4%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「あまりそう思わない」が34.4%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が33.4%となっている。

現在の日本社会は、子育てがしやすい社会だと思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、子どもがいる層においては、男性で3割前後、女性で2割弱であり、そう思わないとの回答（「そう思わない」「あまりそう思わない」の合計）の方が多くなっている。また、男女を比較すると、女性の方が、男性に比べて、そう思うと感じる割合が低い傾向がみられる。

子どもがいない層では、子育てがしやすい社会だと思うと回答した割合は、男女とも15%程度となっている。

図表 94 現在の日本社会は、子育てがしやすい社会だと思うか：単数回答（Q27）



(2) 「子育ては親だけが担うものではなく、社会全体が家庭における子育てや教育を応援し、支えていくことが求められる」という考え方について、どのように思うか

「子育ては親だけが担うものではなく、社会全体が家庭における子育てや教育を応援し、支えていくことが求められる」という考え方について、どのように思うかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が49.0%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が28.0%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が51.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が23.2%となっている。

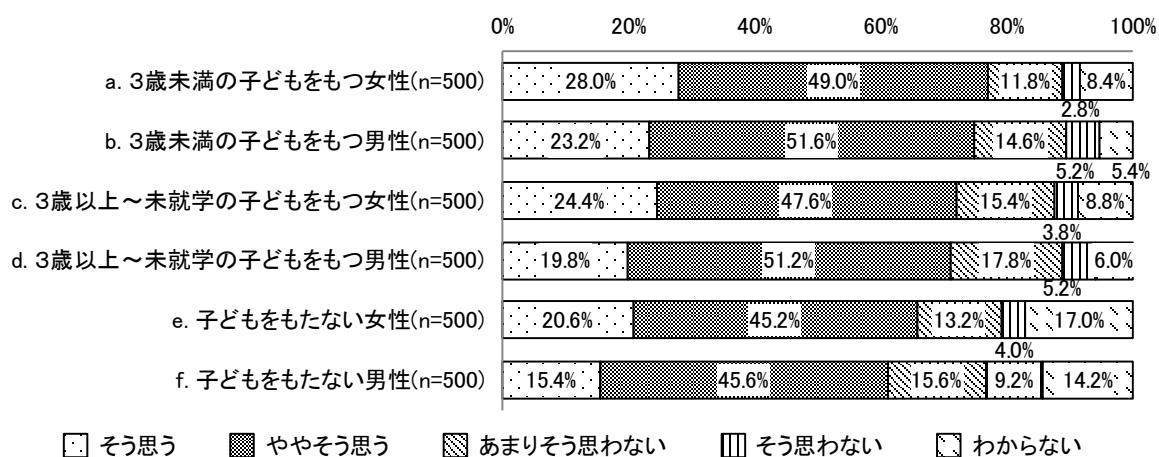
「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「ややそう思う」が47.6%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が24.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「ややそう思う」が51.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が19.8%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が45.2%でもっとも割合が高く、次いで「そう思う」が20.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が45.6%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が15.6%となっている。

「子育ては親だけが担うものではなく、社会全体が家庭における子育てや教育を応援し、支えていくことが求められる」という考え方について、そう思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、子どもがいる層では、子どもの年齢にかかわらず7～8割程度となっている。

また、子どもがいない層では、そう思うと回答した割合が男女とも6～7割程度と、子どもがいる層に比べて低い傾向がみられる。

図表 95 「子育ては親だけが担うものではなく、社会全体が家庭における子育てや教育を応援し、支えていくことが求められるという考え方」について、どのように思うか：単数回答（Q28）



（３）現在の日本では、公共の場において、子連れの親子をあたたく見守る人や助ける人が多くいると思うか

現在の日本では、公共の場において、子連れの親子をあたたく見守る人や助ける人が多くいると思うかどうかをみると、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」では、「あまりそう思わない」が39.0%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が31.8%となっている。「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が37.4%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が35.4%となっている。

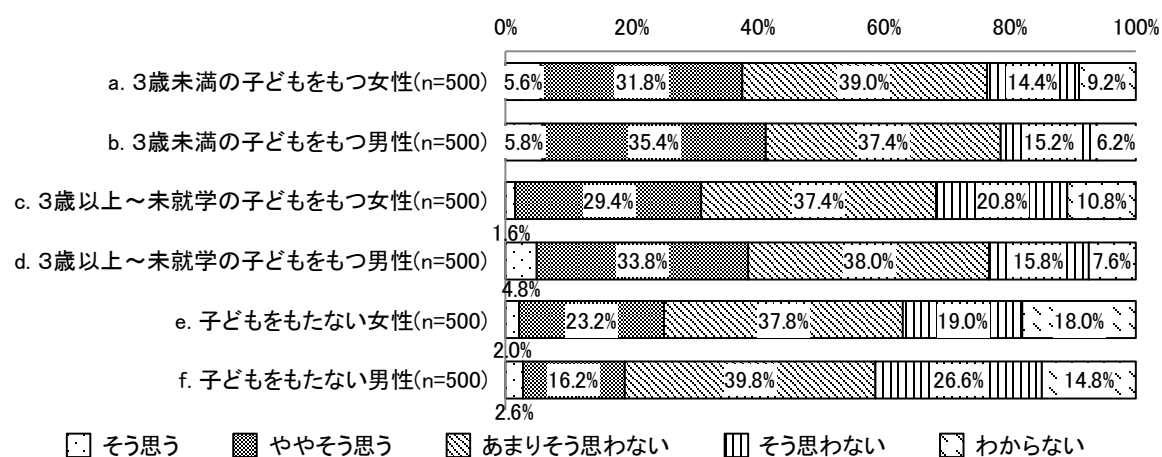
「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」では、「あまりそう思わない」が37.4%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が29.4%となっている。「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」では、「あまりそう思わない」が38.0%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が33.8%となっている。

「e. 子どもをもたない女性」では、「あまりそう思わない」が37.8%でもっとも割合が高く、次いで「ややそう思う」が23.2%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「あまりそう思わない」が39.8%でもっとも割合が高く、次いで「そう思わない」が26.6%となっている。

現在の日本では、公共の場において、子連れの親子をあたたく見守る人や助ける人が多くいると思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、子どもがいる層では、子どもの年齢にかかわらず、男性の方が、女性に比べてやや高い傾向がみられる。

一方、子どもがいない層では、そう思うと回答した割合は、女性の方が、男性に比べてやや高い傾向がみられる。

図表 96 現在の日本では、公共の場において、子連れの親子をあたたく見守る人や助ける人が多くいると思うか：単数回答（Q29）



9. 子育て等に関する認知

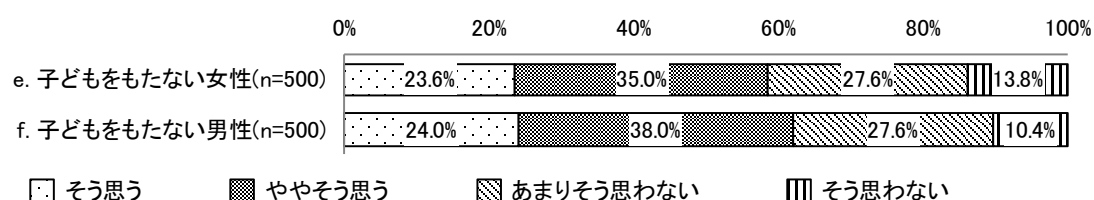
(1) 【非当事者層】子どもや子育てに関して知らないこと

①【非当事者層】子どもとどのように接してよいかわからない

子どもがいない層について、「子どもとどのように接しよいかわからない」と思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が 35.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 27.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が 38.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 27.6%となっている。

「子どもとどのように接しよいかわからない」と思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女とも 6 割前後となっている。

図表 97 【非当事者層】子どもとどのように接してよいかわからない：単数回答（BQ30_1）

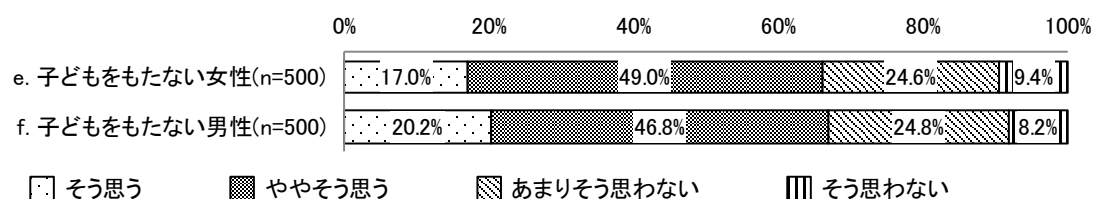


②【非当事者層】子育て世帯がどのようなことに困るのかわからない

子どもがいない層について、「子育て世帯がどのようなことに困るのかわからない」と思うかどうかをみると、「e. 子どもをもたない女性」では、「ややそう思う」が 49.0%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 24.6%となっている。「f. 子どもをもたない男性」では、「ややそう思う」が 46.8%でもっとも割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が 24.8%となっている。

「子育て世帯がどのようなことに困るのかわからない」と思うと回答した割合（「そう思う」「ややそう思う」の合計）は、男女とも 7 割弱となっている。

図表 98 子育て世帯がどのようなことに困るのかわからない：単数回答（BQ30_2）

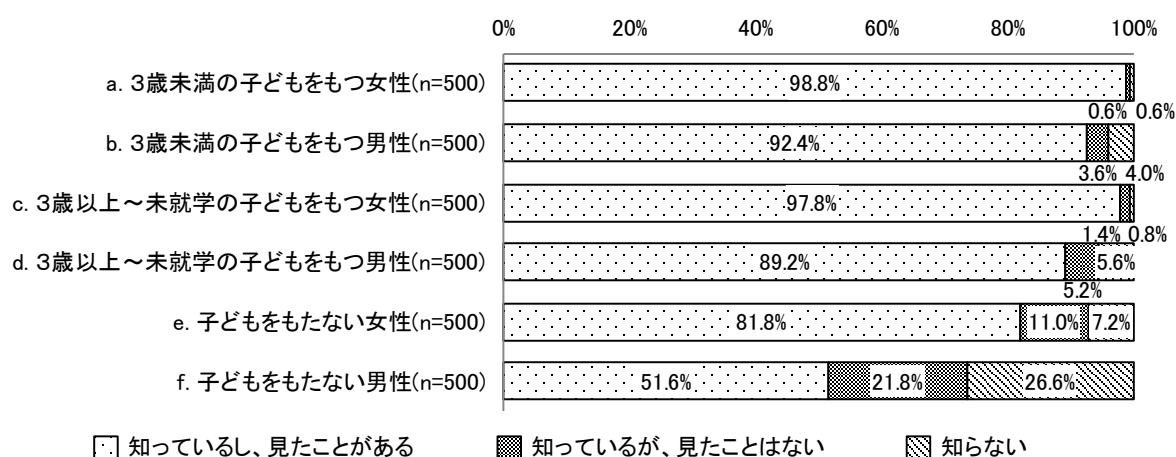


(2) マーク等の認知

① マタニティマークの認知

マタニティマークの認知状況をみると、「知っているし、見たことがある」という割合は、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」で98.8%、「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」で92.4%、「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」で97.8%、「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」で89.2%、「e. 子どもをもたない女性」で81.8%、「f. 子どもをもたない男性」で51.6%となっている。

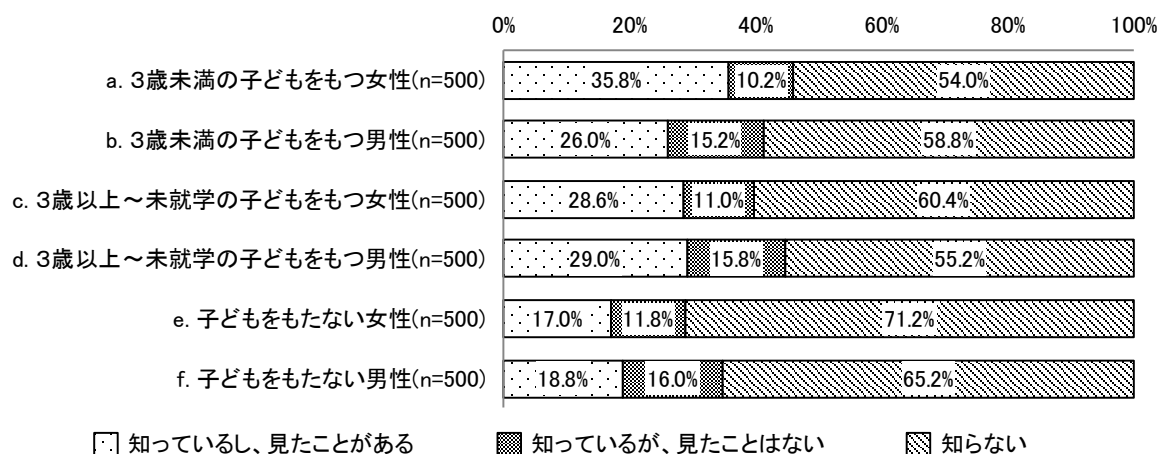
図表 99 マタニティマークの認知:単数回答 (Q32_1)



② ベビーカーマークの認知

ベビーカーマークの認知状況をみると、「知っているし、見たことがある」という割合は、「a. 3歳未満の子どもをもつ女性」で35.8%、「b. 3歳未満の子どもをもつ男性」で26.0%、「c. 3歳以上～未就学の子どもをもつ女性」で28.6%、「d. 3歳以上～未就学の子どもをもつ男性」で29.0%、「e. 子どもをもたない女性」で17.0%、「f. 子どもをもたない男性」で18.8%となっている。

図表 100 ベビーカーマークの認知:単数回答 (Q32_2)



第5章 団体インタビュー調査結果

本章では、インタビュー調査の結果について記載する。対象となった団体は以下のとおりである。インタビュー対象は、文献・インターネット・自治体アンケート調査等により情報収集を行った上で、全国の自治体、NPO・子育て支援団体、企業等のうち、非当事者層も含めた子育て支援の普及啓発に取り組んでいる団体や、子育てしやすい社会のために必要な社会的配慮の取組を行っている団体を選定した。

<団体インタビュー：7件>

No	取組の名称（インタビュー先団体）	調査実施日
1	WE ラブ赤ちゃんプロジェクト（エキサイト株式会社）	令和2年12月16日（水）
2	WE ラブ赤ちゃんプロジェクト（世田谷区）	令和2年3月9日（火） （書面調査）
3	地域子育て応援マークプロジェクト（NPO 法人いずみの会）	令和3年2月10日（水）
4	&HAND プロジェクト（一般社団法人 PLAYERS）	令和3年3月2日（火）
5	赤ちゃんが泣かない!?ヒコーキプロジェクト （全日本空輸株式会社（ANA）、NTT 物性科学基礎研究所）	令和3年3月9日（火）
6	赤ちゃんタイム（神栖市立中央図書館）	令和3年3月9日（水）
7	芦花公園団地における地域住民との交流の取組 （独立行政法人都市再生機構（UR 都市機構））	令和3年3月18日（木）

1. WE ラブ赤ちゃんプロジェクト（エキサイト株式会社）

調査対象	エキサイト株式会社
調査実施時期	令和2年12月16日（水）

（1）実施している子育て支援の普及啓発に係る取組について

①取組の開始時期と経緯・目的

- ・平成27年にエッセイストである柴原明子氏がカフェで仕事をしていた際、向かいに座っている赤ちゃんが泣き出してしまった。母親は赤ちゃんをあやしながら、周囲に迷惑をかけているのでは、うるさいと思われるのでは、と心配していることが感じられる様子であった。
- ・柴原氏も10年以上も前に小さな子ども連れの外出で苦勞し、このような状況下で母親が肩身の狭い思いを抱えてしまう経験があった。自身は赤ちゃんが泣いていても迷惑とは思っていないという思いを伝えたい、何か伝える方法はないだろうかと考えたとき、ノートパソコンの天板やスマートフォンの背面などに、「泣いてもいいですよ」と表示したステッカー等を貼っておけば、意思表示ができるのではないかと考えた。
- ・柴原氏は当社（エキサイト社）にてライター活動を行っていたこともあり、その出来事をきっかけに、当社と連携してステッカーを作成することとなった。第一弾である、初回作成のステッカーは30名にプレゼントとしてSNS上で応募者を募ったところ、900名以上の応募がくるなど、反響が非常に大きかった。
- ・そこで、「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトという名称でプロジェクト化することとなり、平成28年5月に子育て中の母親を対象とした子育て応援のためのメディアとして、「ウーマンエキサイト」のサイトが発足した。
- ・平成28年10月には、ステッカー配布について周知したり、賛同者がメッセージを発信したりする場として、「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトの公式ホームページを作成した。

図表 101 「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトの公式ホームページ



出所：WE ラブ赤ちゃんプロジェクトウェブサイト

<https://woman.excite.co.jp/welovebaby/>（令和3年3月22日確認）

②組織体制、普及啓発の対象、利用している媒体、取組にかかる費用等具体的な取組内容

- ・「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトは、当社の編集部内で有志が集まって立ち上げたプロジェクトであり、会社の組織として位置づけられたものではない。発足当時は「ウーマンエキサイト」の担当者が、「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトのサイトの運営を行い、広告担当者、営業担当者等に呼びかけて、活動に参加してくれるメンバーを集めた。
- ・メンバーは全員、通常の業務と兼任で活動しており、子どものいるスタッフもいれば、子どもがいなくてもプロジェクトの趣旨に賛同するスタッフ、性別・年齢も多様なスタッフが、10名程度集まった。
- ・「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトに賛同した人は、「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトのサイト上で「賛同する」をクリックし、さらにコメントを投稿することができる。その際、年代をコメントと一緒に掲載してもらおうが、その選択肢は10代～60代となっている。60代以上の賛同者も想定しており、10代の若者にも赤ちゃんが泣くことや、泣いてもいいよという気持ちを伝えていきたいと考えている。
- ・プロジェクトで作成した「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトの応援ポスターも、子育て世帯だけでなく、年齢・性別を問わず、幅広い人へ届けるため、イラストには祖父母世代、ディンクス、学生、犬や猫の絵も入れるなど、工夫をしている。ウェブサイトで賛同メッセージを投稿するときに選択できる投稿者の顔のイラストについても、同様である。

図表 102 「泣いてもいいよ！」応援ポスター



出所：WE ラブ赤ちゃんプロジェクトウェブサイト

- ・当初から SNS、インターネット等で反響が大きく、個人が SNS 上で拡散したり、新聞の一面に取り上げてもらったり、プロジェクトの PR をそれほどしなくても、全国的に展開していった。「泣いてもいいよ!」と思っていることを可視化したいという思いを有する人は少なくないが、それを形にして伝えられる手段がなかったのではないか。

- ・現在プロジェクトの拡散は、オリジナルツイッターアカウント等の SNS や、ステッカーの配布等を通じて行っている。また、公式ホームページ上で「賛同する」のボタンを押すことによりコメントをシェアできるなど、拡散しやすい仕組みを工夫している。
- ・サイトの運営やステッカーの印刷・配送作業は、部署を隔てることなく行っている。ステッカーの制作費は、ウーマンエキサイトの PR 費としてメンバーが会社に掛け合い、印刷を行う都度、捻出している。これまで、ステッカーのほかに、賛同数が 2 万件に達した記念として、「泣いてもいいよ！」キーホルダーを 100 個作成した。また、各地の方言版などに関しては、賛同する自治体の費用負担により作成している。

③取組を行う際の連携先の有無

i) 自治体

- ・当初は企業団体からの賛同・連携を想定していたが、平成 29 年に新聞にプロジェクトが掲載されたことをきっかけに、三重県の担当者から電話があり、自治体としてもプロジェクトに賛同したいとの旨を受け、自治体等との連携も実施することとなった。
- ・平成 29 年 11 月に三重県が行政として、初めてプロジェクトに賛同。当社と連携し、三重の方言を使った三重県独自の「泣いてもいいんやに！」ステッカーを作成した。これが、「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトのご当地ステッカーの第一弾となった。ステッカーの制作・印刷作業は当社で行い、費用負担は自治体が行っている。反響も大きく、三重県庁などで配布した 1,000 枚のステッカーはすぐに配布し終えたと聞いている。

図表 103 三重県の方言を使った「泣いてもええんやに！」ステッカー



出所：WE ラブ赤ちゃんプロジェクトウェブサイト

- ・自治体がプロジェクトに賛同しようとする際、赤ちゃんだけを優先する取組としてとらえられてしまうと施策化が難しい、という声を聞くこともあるが、地方では出生率が下がっている地域も多く、少子化対策の一環として賛同する自治体も増えている。そうした自治体では、予算等も比較的確保しやすいと思われる。
- ・最初に連携した三重県の先導もあり、平成 30 年 5 月に、「日本創生のための将来世代応援知事同盟サミット in みやぎ」にて、将来世代応援知事同盟 14 県から、「WE ラブ赤ちゃん」プ

プロジェクトに一斉賛同を受けた。平成 30 年 11 月 19 日の「いい育児の日」に、各自治体にそれぞれの方言を用いて作成したご当地ステッカーを配布した。現在、自治体の賛同数は 15 県となっている。賛同した自治体からは、「いい育児の日」に訴求力のあるイベントの素材を求めているのでありがたい、などの声を頂いている。

- ・令和元年 6 月には、世田谷区から賛同を受け、世田谷区主催のイベントでプロジェクトのブースを出店し、区内の子育て支援者に、缶バッジやステッカーを配布した。ステッカーは 75,000 枚作成し、世田谷区内の店舗の店頭等に置いてもらっている。制作は、自治体が予算を確保して実施している。世田谷区が賛同したきっかけは、区内での子育てストレスにより起こった痛ましい事件を防止したい、子育てを見守りあえる社会にしたい、と考えたことと聞いている。

ii) 企業・NPO 法人等

- ・現在、約 200 社から賛同を受けており、業種により、ステッカーの配布、店舗にポスターを掲示するなど、様々な形で協力をいただいている。賛同いただいた企業には、最初にステッカーを 100 枚進呈し、周知・配布を行ってもらっている。プロジェクトの公式ホームページに、「賛同企業・団体様一覧」を掲載している。
- ・本業が、子どもや子育て支援に特に関連のない企業も多いが、賛同したコメントをみると、社内に育児中のスタッフが多いので参加した、プロジェクトの理念に感動した、などの声がみられる。
- ・業種別に比較すると、賛同数が多い傾向にあるのは飲食店や病院である。子ども連れで来ても大丈夫、安心であることを伝えたいという想いがあると思われる。当初、賛同企業の業種を子どもや子育て支援に関連する企業のみ絞ろうという意見もプロジェクト内にあったが、検討した結果、本取組の啓発対象は子育ての当事者以外でもあることから、業種を絞らずに行うことになった。結果として、様々な企業に賛同が集まっている。
- ・賛同企業のうち、店舗等でのステッカー配布に協力してもよいという企業には、店頭等に置いてもらっている。最初にステッカーを店頭に置いてもらったのは平成 29 年頃で、手芸用品の店舗であった。日頃から子育て世帯の利用者も多く、店舗に置かれたステッカーをもらいたいということで集客にもつながるため、相互に利益があるとのことである。

④実施したことによる効果、取組を行う上での課題

- ・プロジェクト開始当初から、公式ホームページでの賛同数が順調に増えているほか、ステッカーの配布数、自治体の賛同数も増え、手ごたえを感じている。
- ・プロジェクトへの反応を SNS 上でも確認しながら、今後どのような、取組を行えば、赤ちゃんの泣き声に寛容な社会につながられるか探っている。
- ・「泣いてもいいよ！」という意思表示は、受け取り方によっては「泣かせてもいいよ」と捉えられ、大きな声・音に敏感な方や障がいのある方にとっては、配慮が必要な場合もある。プロジェクトの発展の中で、公共の場で赤ちゃんへの対応と、多様な人々へのケアや対応にも配慮するという視点で考えたときに、今後の課題でもある。
- ・当プロジェクトについて、イギリスのメディアから取材を受けた際、記者から「海外の感覚

として、赤ちゃんが泣くのは当たり前であり、あえて『泣いてもいいよ!』という発想が日本特有で面白い」と指摘された。海外と日本で、赤ちゃんが泣くことに対する受け止め方の違いを感じた。運営側も本来は、こうした取組が不要になることが望ましいと考えている。

- ・プロジェクトが対象とする子どもは1歳前後としている。

⑤参考にした取組

- ・プロジェクトのサイト構築、見せ方などについて、グーグル株式会社の「Women Will」プロジェクトを参考とした。
- ・また、企業が共同で参画したり、宣言をしたりする取組方法として、厚生労働省の「イクメンプロジェクト」や、自治体が行う「子育て応援宣言企業」の登録制度等を参考にした。

(2) 子育て支援の社会的気運の醸成のために、必要と考える取組

①乳幼児がいる子育て世帯が抱える課題

- ・公共の場等での子どもの泣き声について、親が子どもを泣き止ませたいという気持ちで、それを見守っていても、こちらが声をかけると余計泣いてしまうことがある。あえて声をかけないこともあるが、そういった気持ちは周囲に伝わりにくいと感じる。

②子育てしやすい社会づくりのために求められる取組

- ・子どもや子育て世帯だけの応援ではなく、多様な人々へのケアや対応も配慮しつつ、子育てに寛容な意識の醸成が必要である。
- ・「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトのように SNS やホームページなどから情報が発信され、子育てに直接関わりのない人々や企業、団体も応援のきっかけとなる取組があるとよい。

2. WE ラブ赤ちゃんプロジェクト（世田谷区）

調査対象	世田谷区（東京都）
調査実施時期	令和3年3月9日（火）

（１）実施している子育て支援の普及啓発に係る取組について

①取組の開始時期

- ・令和元年6月より、「WE ラブ赤ちゃんプロジェクト」の取組を開始した。

②取組の経緯・目的

- ・赤ちゃんの泣き声については、どのような保護者でも対応に悩むことがあり、乳児期家庭訪問や乳児健診、産後ケアセンター等での保護者からの相談でも、泣き声への対応に関する悩みが多かった。
- ・また、平成29年に世田谷区烏山地域で発生した児童虐待死亡事例の検証会議では、子どもの泣き声が周囲に迷惑をかけているのではないかと母親が悩んでいたことが指摘された。
- ・世田谷版ネウボラ推進協議会の意見を踏まえ検討した結果、令和元年6月よりエキサイト株式会社の先進的な民間の取組である「WE ラブ赤ちゃんプロジェクト」との連携、周知を開始した。

③組織体制、普及啓発の対象、利用している媒体、取組にかかる費用等具体的な取組内容

- ・プロジェクトの組織体制として、庁内の担当課は子ども・若者部子ども家庭課の子ども・子育て支援担当である。
- ・普及啓発の対象は、世田谷区民全般であり、区職員、各総合支所、出張所、児童館等をはじめ、区の関係施設や民間の協力店舗等にてステッカーの配布やキーホルダーの配布を行っている。
- ・令和2年度の事業予算は、プロジェクトのグッズ作成の費用として約4,147千円を計上した。
- ・プロジェクト普及のために利用している媒体は、世田谷区の広報誌、ホームページ、ツイッター、エキサイト株式会社の特設サイトなどである。

図表 104 世田谷区×「WE ラブ赤ちゃん」プロジェクトの公式ホームページ



出所：世田谷区×WE ラブ赤ちゃんプロジェクトウェブサイト

<https://woman.excite.co.jp/welovebaby/setagaya/>（令和3年3月22日確認）

④取組を行う際の連携先の有無

- ・「WE ラブ赤ちゃんプロジェクト」の主催者であるエキサイト株式会社と連携を行っている。

⑤実施したことによる効果、取組を行う上での課題

- ・取組の効果として、世田谷区の子育て支援事業について、行政機関以外の地域団体や商店街・企業等へ働きかける1つのツールとなったことが挙げられる。
- ・プロジェクトの展開方法として、広く寄附を募り、賛同のあった方に寄附金額に応じてステッカー等を配布することとしている。啓発物品の作成を行う場合には本来、寄附金額に応じて実施するものであり、寄附獲得による事業継続の可能性が今後の課題である。

（2）子育て支援の社会的気運の醸成のために、必要と考える取組

①乳幼児がいる子育て世帯が抱える課題

- ・核家族化の進行、地域社会との関わりの希薄化の進行が進み、子育てについて身近に相談できる人がいない、必要な情報が得られない、といった状況から、子育て家庭の孤立化、養育力の低下が懸念されている。
- ・地域の中で身近に妊婦や赤ちゃんと接する体験の機会が少なく、出産や子育てについての様々な情報が氾濫し正しい知識を得ることも難しく、妊娠期や子育てのイメージを持てずに妊娠・出産を迎えることが多くなっている。出産前後に育児不安や産後うつなどから育児に過度のストレスや不安を抱いたり、母親が孤立することがないよう適切な時期に必要な情報を届け予防する必要がある。
- ・新たに違う地域へ転入してきた世帯や日本の文化や言語の理解が難しい外国にルーツのある子育て家庭などは、地域とのつながりが持ちにくいことから、必要な情報を得にくく適切な支援につながっていない場合がある。

②子育てしやすい社会づくりのために求められる取組

- ・世田谷区では「子どもがいきいきわくわく育つまち」を目指している。子どもが「楽しい」と思って「元気に」日々を過ごすことのできる状況や「子どもの権利」が守られる環境の整備のためには、子どもが健やかに育ち、成長していくため、遊び、表現し、安らぐための場が身近にあり、人間性を豊かにするための多様な体験や様々なことにチャレンジできる機会の確保、すべての子どもが虐待やいじめ、また、障害の有無や家庭の経済状況などによって、守られるべき権利が侵害されることなく、安心して楽しく元気に過ごすことのできる環境を身近な地域の中で具体化することが必要であり、予防的な取組を推進していく。
- ・子どもが楽しいと思って、元気に日々を過ごすためにも、身近な地域の中で、周りの大人や若者、さらには子どもに見守られ、励まされ、支えられながら、やりたいことに挑戦し、持っている力を発揮できる環境が必要である。こうした環境の創出には、地域の子どもや子育てを気かけ、応援する人を増やし、「地域の子育て力」を高めていくことが重要であり、地域の人が地域の子どもに関心とあたたかいまなざしを持って見守り、一緒に育てるといった意識・気運を醸成するとともに、地域の子どもや子育てを応援したいと思う人が思いきり役割を果たせるような仕掛けづくりに努める。
- ・特に子育てしやすい社会づくりに関して、妊娠期・子育て期を孤立感なく安心して生活できるよう、すべての子育て家庭が適切な地域の子育て支援につながる仕組みの充実を図ることが必要であると認識している。子どもや保護者が身近な場で気軽に相談ができる体制を整えるとともに、最も身近な地区において多様な地域資源が連携・協力しながら適切な支援・見守りができるようネットワークの強化を図る。
- ・また、リスクやニーズが顕在化しにくい在宅子育て家庭の支援の一層の充実が必要であるが、他方、ひろばなど地域の子育て支援の場において、支援の受け手が担い手となっていく地域子育ての好循環が生まれている。ひろばの利用者が子ども・子育て支援に携わってもよいと考える割合が高いという区実施の調査結果もあり、今後も地域で見守り支える環境づくりの一層の展開を図る必要がある。

③子育て支援の普及啓発のために、必要と考える行政やNPO・子育て支援団体、企業等の取組

- ・行政の広報媒体を活用しながら、子育て支援事業についてこれまで以上に周知を図っていくことが必要と思われる。

3. 地域子育て応援マークプロジェクト（NPO 法人いずみの会）

調査対象	NPO 法人いずみの会
調査実施時期	令和3年2月10日（水）

（1）団体の概要

- ・NPO 法人いずみの会は、東京都武蔵野市にて子育てひろば事業、一時預かり事業、小規模保育事業を行う子育て支援施設「すくすく泉」を運営する団体である。こうした保育関連施設の運営のほか、市のコミュニティセンターでの親子ひろばの開催（アウトリーチ）も行っている。
- ・子育て支援施設ができる前は、私立幼稚園が立地していたが、平成18年、園長がご高齢のため閉園となった。幼稚園閉園後、跡地には地域の子どもたちを育んできた空間を活かし、子どもや地域の住民が集う新しい施設を作ってもらいたいという住民の声が多く寄せられた。そこで、卒園生や卒園生の保護者、青少年問題協議会、民生委員などを含む、地域に関わる関係者及び有志によって「泉幼稚園跡地利用を考える会」が発足した。
- ・「泉幼稚園跡地利用を考える会」での継続的な市民活動と武蔵野市との話し合いを進め、子育て応援施設を建設することが決定した。施設運営団体の公募に際して、他の企業や団体に運営を任せるのではなく、長らく有志で活動してきた地域住民で運営を担いたいと応募し、施設運営団体として正式に決定後、平成26年に「いずみの会」としてNPO 法人化した。
- ・現在、NPO 法人の理事は6名、会員数は63名（理事含む）であり、法人の事業に関わっているメンバーの多くは地域の住民である。「泉幼稚園跡地利用を考える会」の頃からのメンバーや、事業に直接は関わっていても、応援として会員になっているメンバーもいる。
- ・当法人は、子どもたちの成長を応援し、子育て世代の住民同士が交流を深め、地域の住民も子育てに協力・応援すること、そうして将来的に地域に貢献したいという意識醸成につながることを目指して活動している。

（2）実施している子育て支援の普及啓発に係る取組について

①取組の開始時期と経緯・目的

- ・子育てひろば事業を運営する中で、来訪している保護者から、「買い物先で赤ちゃんが泣いてしまい大変だった、そのため外出も控えてしまう」「イヤイヤ期の子どもが外出先で泣いていると、躰ができていないと見られているようで緊張する」といった声を聞くことが多くあった。一方で、「赤ちゃんが泣くのはあたりまえ」「自分の子育て中もそうだったので、気持ちはすごくわかる」という気持ちで暖かく見守っているつもりでも、わざわざ子連れ世帯に声をかけるきっかけがない、応援の手を出してよいかどうか迷ってしまう、といった地域住民の声も多く聞かれた。
- ・そこで、平成30年に、子育て世帯と地域住民の双方をつなぎ、地域で乳幼児を子育てしている保護者とその子どもに対して、暖かく見守っている地域の人がたくさんいるということ

可視化するための「地域子育て応援マーク」をデザインし、バッグ等に着けるチャームの作成を行った。

- ・法人の思いとしては、地域に温かく見守られて育った子どもたちやその親は、やがて将来地域の中にある高齢や障害等、様々な事情を抱える方たちに心を向けることにもつながり、「お互いがお互いの事情を思いやる温かい地域」につながる活動の一つであると考えている。

②組織体制、普及啓発の対象、利用している媒体、取組にかかる費用等具体的な取組内容

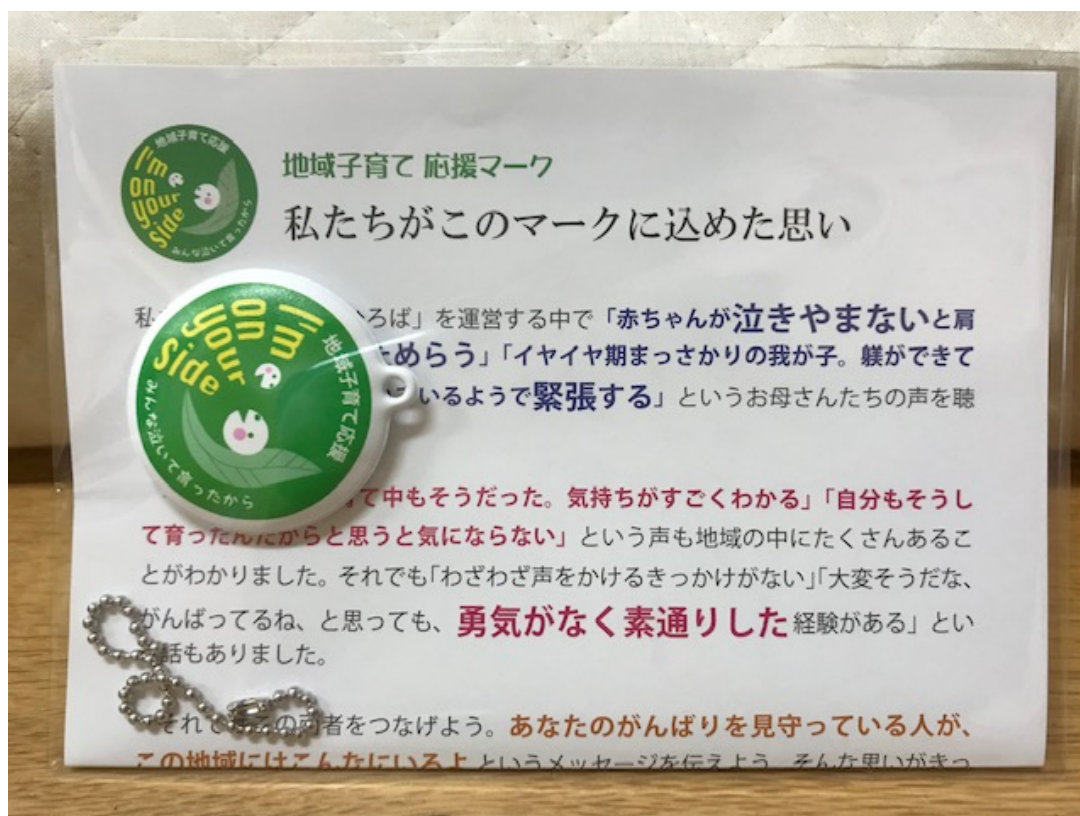
- ・「地域子育て応援マーク」は、法人のスタッフを中心としたボランティアで制作、広報活動、配布等を行っている。
- ・デザインは、元イラストレータである法人のスタッフに3案程度作ってもらい、会員が投票して決定した。
- ・チャームは1,000個作成した。当初は無料配布の予定であったが、無料だとかえって付けてもらえないのではないかと、料金を少額いただくことで購入者がチャームを付ける意識付けにもなるのではと考え、製作費400円／個に対して100円／個でお譲りすることとした。コミュニティセンターや小学校でのお祭りイベントにブースを設けて広報活動・販売を行い、「地域子育て応援マーク」に込めた、子どもや子育て世帯、地域への思いの説明を載せたリーフレットも合わせて配布した。作成した1,000個のうち、少数の在庫については、現在も希望者がいればお譲りしている。
- ・チャームの制作費は、麒麟福祉財団の助成を受けている。麒麟福祉財団の助成を知ったきっかけは、子育て応援施設ができる前に幼稚園の空き地で、赤ちゃんのための外遊びの会をボランティアで実施していた際に、ハンモックを編むイベントにて支援を受けたことがあったことである。「地域子育て応援マーク」のチャーム作成の際にも助成を持ち掛けて、実現した。
- ・チャームの売上金で、「地域子育て応援マーク」のシールも作成し、大きいシールは地域の店舗等に、小さいシールは様々なところに貼っていただくよう無料で配布している。子育て応援施設にボランティアとして来訪する中学生や高校生が、自分たちも赤ちゃんの頃は泣いていたのだから、「地域子育て応援マーク」をつけて応援したい、と言ってくれることもあり、数に限りはあるが、学校・校長先生等の理解を得られるのであれば、中学校にシールを配布することも検討している。このような応援のマークがあることを若い世代に知ってもらうだけでも、意義があると考えている。また、中学生が家に持ち帰って親に見せ、親子で子育ての話をしてもらうきっかけになれば、とも考えている。
- ・「地域子育て応援マーク」のポスターも作成し、市内のコミュニティバスの車内や、駅、各保育園、幼稚園等に貼ってもらった。子育て世帯ではない層にも応援をしてもらうため、様々な年齢層の人が利用するコンビニエンスストア等にもポスターを掲示してもらった。掲示してもらう際の交渉等は、法人のスタッフや会員がボランティアで実施した。

図表 105 「地域子育て応援マーク」



出所：NPO 法人いずみの会

図表 106 すくすく泉が作成したチャームとリーフレット



出所：NPO 法人いずみの会

図表 107 いずみの会でのボランティアの様子



出所：NPO 法人いずみの会

③取組を行う際の連携先の有無

- ・武蔵野市と連携し、市内の他の子育て支援団体にも、活動場所に「地域子育て応援マーク」のスタンド（紙製の展示物）を置いてもらうよう、依頼している。法人から直接依頼することも可能であるが、市に活動について理解してもらっていることもあり、市の子育てひろばのネットワークを利用して設置をお願いしている。
- ・「地域子育て応援マーク」は著作権フリーで使ってもらえるよう公開しており、子育てひろばネットワークの印刷物にも使ってもらっている。使用の際、当法人名の記載などは不要であり、マーク自体にも法人の名前は取って入れていない。法人の宣伝が目的ではなく、広く誰にでも活用してもらいたいという思いがある。

④実施したことによる効果、取組を行う上での課題

- ・効果・反響について、保護者がマークを付けている人を見て「助かった」というような具体的な声はまだあまり聞くことができていないが、このマークができたことを嬉しく思うという声は多く聞かれた。また、マークを付ける側からは、マークを身に着けることで、子育てを応援する意識が高まったという声を聞いている。
- ・近年、応援をしたくても、顔見知りでないと、赤ちゃんや子どもに声掛け等しづらいという状況がある中で、マークを付けていることで子育てを応援したいという意思が相手にも伝わりやすい、自分の意思表示ができるという点が有意義だと考えている。

- ・一方で、イベント等でマークの周知活動をするのと、なぜ子どものことばかり応援するのか、といった声が無いわけではない。作り手の思いとしては、子どもやその親のためだけではなく、地域の中で受け入れられて安心して育った子どもや両親は、その後地域に貢献する人となるため、若い世代を守り、受け入れる活動が、今後高齢者や障がいのある人など様々な事情がある人々を含めて、互いに思いやることのできる地域づくりを目指すことにあり、そうした思いを伝えるよう努めている。疎外感や孤独感のある子育てをして欲しくはないと考えている。
- ・法人の運営においても、地域の住民が運営しており、スタッフの高齢化が進む中で、今後若い世代に活動を引き継いでもらいたいという思いがある。子育て応援施設の運営や、「地域子育て応援マーク」の取組等を通じて、もともと利用者であった母親が法人のスタッフとなったり、次の世代に活動参加への声掛けをしったりしてくれている。

（３）子育て支援の社会的気運の醸成のために、必要と考える取組

①乳幼児がいる子育て世帯が抱える課題

- ・家事や育児が便利になった世の中において、昔は大変だったという思いから、最近の育児の大変さが、高齢者になかなか理解されていないと思われる。昔に比べて物は豊かであるが、子育てひろば等に参加する保護者からは、人間関係が希薄な中での子育てや、情報過多で情報に振り回されたり、皆に認められる子育てをしなくてはならないというプレッシャー、赤ちゃんの存在を身近に知らないままに親になってしまった、等、昔とは異なる悩みが多く聞かれる。また、共働きでの子育てにも理解がない場合が多いと感じる。
- ・特に母親は、子育てにおいて、自分自身が周囲から評価されてしまうという意識があるように思われ、子どもが泣いていると、自分が悪いと思われまいか心配している。そうした場合に、大丈夫だよと伝える周りのサポートがあるとよい。
- ・子育てを「他者に認めてもらう」という意識は、SNS 等で便利に人とつながりやすい反面、人間関係に縛られたり、本音や上手くいっていないことは声に出せなかったりすることとも関係しているかもしれない。20 年前から様々な子育て支援を行っているが、活動を開始した頃と比べると、子育て中の親が、支援スタッフに子育ての悩みを打ち明けてくれるまでにかかる時間が長くなったと感じる。子育ての悩みを人に相談しにくい風潮がある。

②子育てしやすい社会づくりのために求められる取組

- ・子育てひろばなど、顔見知りのスタッフがいて敷居が低く、気軽に育児の相談をしてもらえ場所がもっと充実するとよい。
- ・親自身が、様々な赤ちゃんがいることを身近に知る、実際に接する経験も大事だと考えている。子育てひろばが、そうした場所になればと思う。コロナ禍の中で、自分の子の離乳食の具合や、発達具合が心配ないのか分からず、悩んでいるという親御さんの声を多く聞いた。生後何か月であれば、この程度食べるべき、といった一定の基準に当てはめるのではなく、その子の成長具合に合わせて考えればよい、といった話ができる場がもっと地域に広がるとよい。

- ・法人で行っている「昔遊びカフェ」（地域のお年寄りが来てくれて、子ども達に昔遊びを教えたり、手作り菓子やコーヒーを振舞ってくれる会）や、地域の人による読み聞かせの会などは、地域の人と子育て世帯が知り合う機会を増やすことにつながっている。子どもの成長と一緒に喜んでくれる人が、地域に増えることが望ましいと考える。
- ・若いうちから、赤ちゃんが育つ様子を見る機会があることも大事である。当法人が運営する施設では、中学生の職場体験の受け入れや、長期休暇中の中高生のボランティアの受け入れを実施している。受け入れの初回は、赤ちゃんとの関わり方をレクチャーし、子育てひろばに來ている親たちとも話す機会を作っている。中高生が、自分が赤ちゃんの頃を振り返ったり、親の気持ちを知ったり、自分が親になったときのことを考えたりする良い機会である。また、法人のスタッフや子育て中の親たちにとっても、今時の中高生と話をする機会は貴重であり、子どもが成長した時のことを考えたり、優しい先輩たちのいる地域で安心したという声も聞かれた。

③子育て支援の普及啓発のために、必要と考える行政やNPO・子育て支援団体、企業等の取組

- ・子どもや子育て世帯だけを応援する取組に限らず、多様な人々へのケアや対応にも配慮しつつ、子育て層に寛容な意識の醸成が必要である。

4. &HAND プロジェクト（一般社団法人 PLAYERS）

調査対象	一般社団法人 PLAYERS
調査実施時期	令和3年3月2日（火）

（１）団体の概要

- ・一般社団法人 PLAYERS は、社会が抱える様々な問題に対し、リサーチ・アイディエーション・コンセプトデザイン・サービスデザイン・プロトタイプ開発を行う団体である。社会課題解決のための仕組みの考案・開発から社会実装を行う。
- ・メンバーは、エンジニアやデザイナー等がプロボノで参加している。本業ではできないチャレンジをしたいというメンバーが参加している。現在は 12 名が参加。障がいを抱えたメンバーもいる。
- ・当団体のメンバーが代表取締役を務める PLAYWORKS 株式会社は、より社会実装・事業化に力点を置いた活動を行うために設立した法人である。

（２）実施している子育て支援の普及啓発に係る取組について

①団体の設立とコンセプトの形成

- ・団体の創設者（男性）とその配偶者の経験が、当団体が立ち上がった原体験である。平成 28 年頃、創設者の配偶者が妊娠をしていたが、自宅から離れた産院まで電車で通っていた。ふだんは安静に乗車できる時間帯に乗車することが多かったが、ある日、満員電車に乗車せざるを得なくなり、非常に不安になったが、幸いにも席を譲ってもらうことができた。
- ・一方、わが身を振り返ってみると、妊婦に席を譲るような行動をしてこなかったことに気づき、社会問題として認識するようになり、情報収集と調査を開始した。
- ・情報収集を始めてみると、例えば、マタニティマークについて批判的な記事や否定的な見解がインターネット上に溢れていた。「マタニティマーク」と検索すると、マタニティマークにネガティブな印象を抱かせる内容が上位に現れていた。こうした状況を変えたいと思うようになった。
- ・そこで、まず妊婦と妊婦への手助けに関する調査として、フィールドワーク、ユーザーインタビュー、席譲りに関するウェブアンケート調査を実施した。
- ・フィールドワークは、2 ヶ月程度かけて、電車において、妊婦や妊婦の周囲にいる一般の乗客の様子についてエスノグラフィー（行動観察調査）を行った。また、マタニティマークをつけて電車に乗車することがマタニティマーク利用者にとってどのような経験なのか、団体に参加している女性のメンバーに、マタニティマークをつけて電車を利用してもらう疑似体験も実施した。
- ・ユーザーインタビューは、妊婦や妊婦経験者のほか、妊婦を助ける側になる層にも話を聞いた。妊婦に席を譲るかどうかを聞くと、その場ではほぼ全員が「はい」と答えるが、いざという時の実態はそうではない。妊婦がどのように考えているか、妊婦を助ける側がどのよう

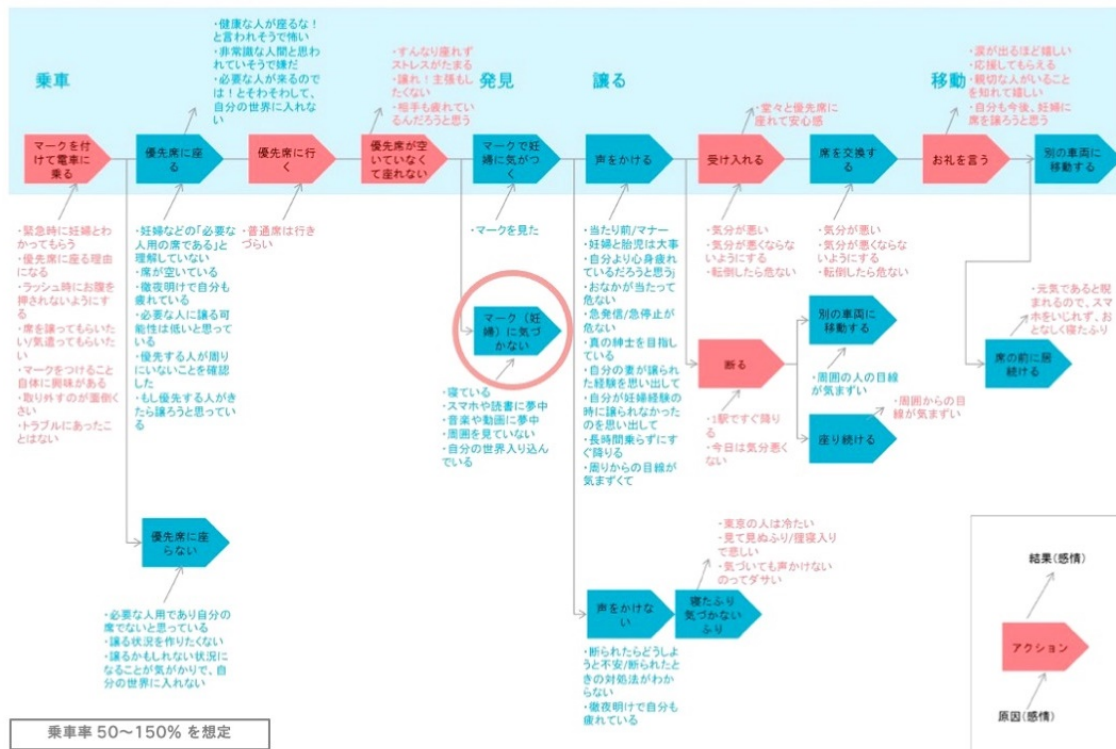
に考えているかのすり合わせや対話が重要であることに気付いた。

- ・ウェブアンケート調査は、平成 28 年 12 月～平成 29 年 1 月にかけて実施した。妊婦経験者 269 名の回答を得た。「約 3 割の妊婦が 1 度も席を譲ってもらった事がない」、「半数以上の妊婦がマタニティマークを外したり隠した事がある」、「約 2 割の妊婦がマタニティマークをつけていて怖い体験をしている」、「約 6 割の妊婦がネガティブな記事から悪影響を受けている」など、席譲りに関する経験やマタニティマークの利用実態に関する調査結果を得た。また、席を譲る側の男性の回答者 1,058 名からは、「8 割以上の乗客が妊婦に席を譲るべきだと考えている」、「席を譲れなかった理由は妊婦がどうか判断できなかった・スマホで気づかなかった」という結果を得た。
- ・種々の調査の結果を踏まえて、「妊婦への席譲りプロセス」としてフローチャートを作成したうえで、解決すべき課題を、①電車やバスで席に座ると、スマホに夢中になり妊婦に気づかないこと、②マタニティマークに関する正しい・ポジティブな情報が届いていないことの 2 点に整理した。

図表 108 妊婦への席譲りプロセス

リサーチ結果まとめ：妊婦への席譲りプロセス（１）

PLAYERS



出所：一般社団法人 PLAYERS

- ・平成 28 年、上記 2 点の課題を解決するため、コンセプトとして考案されたのが「スマート・マタニティマーク」である。マタニティマーク形状のデバイスに内蔵されたビーコンから電波を発信、その電波を専用アプリが受信することで、妊婦（手助けを必要とする人）とサポーター（手助けをしたい人）をマッチングするというコンセプトであった。同時に、妊婦に対して人の「やさしさ」を届けたいという思いから、「やさしさの見える化」をコンセプトとして、妊婦とサポーターのマッチング件数や周囲にいるサポーター数を表示する機能も考案された（ただし、「見える化」の機能は実装されていない）。「スマート・マタニティマーク」により、妊婦が安心して外出できる社会への実現に少しでも近づくことを目指した。

図表 109 スマート・マタニティマークの概要

スマート・マタニティマーク：概要

PLAYERS



出所：一般社団法人 PLAYERS

②スマート・マタニティマークの展開

- ・「スマート・マタニティマーク」を開発中、妊婦の席譲りや「スマート・マタニティマーク」に関連する、交通関連企業やメーカーの社員を個人的に招待し、フューチャーセッション（対話・意見交換のワークショップ）を実施した。当日の様子が SNS 等を通じて、参加者から広まり、関係者の間での認知を得た。
- ・「スマート・マタニティマーク」が「Android Experiments OBJECT」（グーグル株式会社）にてグランプリを受賞し、世間に広まった。
- ・また、「スマート・マタニティマーク」の社会実装のため、平成 29 年 1 月、「鉄道博物館」（公益財団法人東日本鉄道文化財団が運営）の協力を得て、博物館内で実証実験を行った。博物

館へ来た一般の方に、あらかじめアプリをインストールしたスマホを渡したうえで、展示している電車の一角に座ってもらい、マタニティマークもしくは「スマート・マタニティマーク」を付けている妊婦に気付くかどうか、「スマート・マタニティマーク」からのスマホへの通知に気付くかどうかを実験した。アプリのプッシュ通知でマタニティマークおよび「スマート・マタニティマーク」に気付いた人は94%という結果であった。

③「&HAND」（アンドハンド）の展開

- ・「スマート・マタニティマーク」を考案するにいたった原体験は、妊婦への手助けに関することであったが、手助けを必要とする人・手助けをしたい人のマッチングという点において、サービスの対象を妊婦と限らず、高齢者や障がい者にも広げていきたいと考えていた。
- ・ただし、サービスのブラッシュアップの工程としては、すぐに高齢者や障がい者へも適用するのではなく、まずは妊婦を対象に知見を蓄積することが重要であると考えていた。上述のような「スマート・マタニティマーク」の実証実験等を通じて、妊婦へのアプローチに関する知見が高まったことから、平成29年より、高齢者や障がい者へのアプローチも視野に入れるべく、「&HAND」のサービスデザイン・開発に着手した。
- ・「&HAND」は「スマート・マタニティマーク」と同様、手助けを必要とする人が持ち歩く携帯型デバイスであるが、コミュニケーションアプリ「LINE」を活用する点に大きな違いがある。「LINE」で友だち登録するだけで、手助けの依頼やサポートを行うことができる。
- ・「&HAND」デバイスをオンにすると電波が発信され、電波を受信した周囲のサポーターに「LINE」でメッセージが届き、チャットボットを通じて手助け行動を支援する仕組みとなっている。
- ・「&HAND」は、「LINE BOT AWARDS」（LINE 株式会社）にてグランプリを受賞し、認知度が高まった。そうした中で、東京メトロ（東京地下鉄株式会社）での実証実験の話が持ち上がった。それまで法人格のない任意団体であったが、企業との提携を行うため、一般社団法人化した。東京メトロでの実証実験は、東京メトロのほか、LINE 株式会社や大日本印刷株式会社との連携により実現した。
- ・東京メトロでの実証実験は、平成29年12月11日～15日に、特定の列車にて実施をした。実証実験を行うことを大々的に周知し、サポーターを募った。妊婦はリクルーティングを行った。妊婦を対象とした実証実験のため、様々なリスクに配慮をしながら実施した。例えば、妊婦には事務局から2名のサポート要員を配置した。
- ・実証実験を行ったところ、実験による「LINE」上での「&HAND」への友達登録数は11,415名、サポーターの登録数は6,149名、実際に実験に参加したサポーターは約270名、妊婦とサポーターのマッチングは77機会中65回という結果であった。「LINE」上の登録者数が多いことや参加者が多いことは、よい意味での驚きであった。実証実験の現場では、サポーターが積極的に席を譲ろうとすることで、譲り合いを競うような様子も見られた。サポーターが妊婦を探して、周りを見渡す様子がみられた。実際に妊婦とサポーターがマッチングして、席譲りが起きると、妊婦とサポーターの間で会話が始まる様子も見られた。
- ・実証実験から、「&HAND」デバイスの電波の送受信距離の課題や、コミュニケーション機能に付与していた車内の席位置マップの使い勝手の課題、事業化の課題などが確認された。東

京メトロでの実証実験以降、妊婦を対象とした機能をもとに、高齢者や障がい者支援の分野に展開していった。

図表 110 &HAND の仕組み



出所：一般社団法人 PLAYERS

- ・「&HAND」が価値を発揮するためには、「手助けを求めたときに、助けが来ないという体験をなくす」ことが重要であるが、ミスマッチが起きにくい状況での活用について検証していった。特に「&HAND」の価値が発揮されるのはイベント会場での活用である。例えば、ブラインドサッカーの大会において、視覚障害者自身のイベント参加が難しいといった課題の解決のため、「&HAND」を導入し、会場にきた障がい者とイベントボランティア（サポーター）

が、「LINE」でのマッチング・コミュニケーションと、対面サポートをできるようにしている。

- ・また、「&HAND」について、自治体から相談があることもある。ブラインドサッカーの事例のように、これまでは自治体のイベントに来られなかったような人が安心して参加できる環境を作ることや、街全体で手助けを必要とする人に手助けが届く環境を作ることなどについて、相談を受けている。
- ・「&HAND」はベータ版（開発段階）という進捗状況で、一部のイベントでのみ提供されており、まだ市場には出回っていない。また、新型コロナウイルス感染症の感染リスクから、対面でサポートを行う機能については開発を一旦停止し、新たにソーシャルディスタンスを保った上でのサポート機能の検討・開発が進んでいる。

（３）子育て支援の社会的気運の醸成のために、必要と考える取組

①乳幼児がいる子育て世帯が抱える課題

- ・「スマート・マタニティマーク」の開発に至った理由の１つは、マタニティマークを付けることについて、インターネットへのネガティブな書き込みや記事の影響から、不安に感じている妊婦が多いということであった。また、手助けをしたいと思っている人は多いが、その「やさしさ」が届いていないことも課題の１つと考えている。

②子育てしやすい社会づくりのために求められる取組

- ・妊婦や子連れ世帯についてネガティブな印象を持っている人もいるかもしれないが、そういった考えを簡単に変えることはできないのではないかと考える。子育てしやすい社会づくりのためには、少しでも関心のある層に動いてもらえるようにするにはどうしたらよいかを考えることが重要ではないか。そうした考えから、「スマート・マタニティマーク」ではコアターゲットを「子どものいるパパ」と想定していた。問題を自分事として捉えてもらい、小さなアクションを後押ししていくことが重要だろう。

5. 赤ちゃんが泣かない!?ヒコーキプロジェクト（全日本空輸株式会社（ANA）、NTT 物性科学基礎研究所）

調査対象	全日本空輸株式会社（ANA） NTT 物性科学基礎研究所
調査実施時期	令和3年3月9日（火）

（1）実施している子育て支援の普及啓発に係る取組について

①取組の開始時期

- ・「赤ちゃんが泣かない!?ヒコーキ」プロジェクトは、平成29年に全日本空輸株式会社（ANA）、コンビ株式会社、東レ株式会社、日本電信電話株式会社（NTT）の4社協同で立ち上げた。

②取組の経緯・目的

- ・平成27年に、異業種間のリーダー育成の会合にて ANA 担当者と NTT 担当者が同席する機会があった。その際、NTT と東レが共同開発した製品「hitoe（ヒトエ）」ベルトについて、赤ちゃんの心拍数の把握を通じて、泣き出す前の状態を事前に把握することができるのではないか、「hitoe（ヒトエ）」ベルトを使って何か面白いことができないかと話題になったことが共同プロジェクトのきっかけである。
- ・「hitoe」ベルトは、NTT の繊維導電化技術と東レのナノファイバー素材を組み合わせた機能素材であり、もともと心臓病を発見するために身に着けることで長時間にわたり心拍数や心電波形などの生体情報を取得することができるものである。
- ・一方、ANA では、飛行機利用者の家族構成を分析した結果、小さな子ども連れの利用率が低い傾向にあり、以前より飛行機内での赤ちゃんの泣き声に対してお客様が感じるストレスへの対策と、周囲への迷惑を考えて飛行機での移動に消極的な赤ちゃん連れの利用者への対策を検討しているところであった。その解決に向けたプレストを両者で行い、それぞれの技術・情報を活かし、違う角度からコラボレーションをすること、さらに「hitoe」ベルトという最新技術を活用し、多くのお客様が快適な空の旅を過ごすためのプロジェクトとして、「赤ちゃんが泣かない!?ヒコーキプロジェクト」を共同で立ち上げることとなった。
- ・ANA、NTT のほか、「hitoe」ベルトの機能素材とともに赤ちゃんに装着するための専用のベルトの素材の提供、縫製の協力として東レ株式会社に、赤ちゃんが泣いた際の対策グッズの開発の協力として、コンビ株式会社にもプロジェクトに参加をいただいた。各社とも趣旨に賛同いただき、得意分野を活かしてプロジェクトに貢献したいと前向きな姿勢であった。
- ・平成27年10月にプロジェクトを立ち上げた後、実際のフライトで実証実験を行うことを目標の一つに掲げ、「hitoe」ベルトを赤ちゃんに装着し、赤ちゃんの心拍の変化により、泣き出す前の状態や機嫌を把握し、対策するための機器やグッズの開発と検証を進めた。
- ・「hitoe」ベルトは、赤ちゃんに胸に巻くベルトにパッチ状の電極を装着し、心拍数を測定するものである。また、トランスミッターを用いて体の向き、ゆれ、呼吸による振動等の動きを測定する。これらの情報を照合して赤ちゃんの状態を図る仕組みとなっている。

- ・測定した情報とスマートフォンのアプリを連動させ、心拍の変化を親がスマートフォン上でモニタリングすることのできるアプリも開発し、心拍数が上がり大泣きしそうな際にはポップアップで分かりやすく示したり、赤ちゃんの機嫌が「ぐっすり」「すやすや」「ぼんやり」「うえーん」「ばっちり」「ぐずぐず」のいずれに該当するのかを推定して示してくれる。
- ・また、コンビから耳抜きのできるマグも提供いただいた。飛行機でのフライト中は、機内特有の負担（空気圧）がかかり、赤ちゃんがうまく耳抜きができずに大泣きしてしまうことがあるため、その解消策として用意したものである。飛行機に慣れている保護者は、あらかじめ哺乳瓶を用意していることも多いが、マグを利用して飲み込む行為により耳抜きができ、赤ちゃんの状態が安定することが期待される。
- ・フライト前に、マグによる耳抜きの効果のデータを取るため地上での実証実験も行った。具体的には、高層ビルのエレベーター内の上下を利用して、機内と同様に気圧の変化が生じさせるというもので、ほとんどの子どもがマグを利用することにより、耳の痛みが楽になったとの結果が得られていた。
- ・こうした準備を経て、平成 29 年 10 月に、3 歳未満の赤ちゃんがいる 4 社のグループ社員を乗せて、成田～宮崎間のチャーター便にて実証実験を実施した。被験者数と同数程度のプレスも集まり、非常に注目を集めるフライトであった。

図表 111 「hitoe」ベルトとスマートフォンアプリ



出所：ANA ウェブサイト

https://www.anahd.co.jp/ana_news/archives/2017/11/07/20171107-1.html

(令和 3 年 3 月 22 日確認)

図表 112 耳抜き用マグとタブレット



出所：ANA ウェ사이트

https://www.anahd.co.jp/ana_news/archives/2017/11/07/20171107-1.html

(令和3年3月22日確認)

③組織体制、取組にかかる費用等具体的な取組内容

- ・先述のとおり4社による共同プロジェクトとして立ち上げており、各社の役割は以下のとおりである。

ANA：飛行中の赤ちゃん、ママ・パパのお困り事、解決方法などのノウハウ提供及び実証実験のための機材等の確保

コンビ株式会社：ベビーマグやタブレットキャンディー等、赤ちゃんグッズの試作・提供及びモニター調査の実施

東レ株式会社：赤ちゃん用の肌に優しい hitoe ウェアの提供

NTT：赤ちゃん用生体情報モニタリングの仕組みの提供及びモニター調査の実施、「hitoe」ベルトや心拍数モニタリング技術全般に関するノウハウ提供等

- ・費用負担については、基本的には、各社の担当分野において持ち寄りである。

④実施したことによる効果、取組を行う上での課題

- ・実証実験において、「hitoe」ベルト及びアプリを活用して赤ちゃんの機嫌や状態を把握するとの目的は、一定程度達成することできた。
- ・ただし、ベルトを赤ちゃんの胸に装着する段階で、一部の赤ちゃんが不快感を感じてしまうという課題や、また、アプリでは眠っているか、落ち着いた状態から不機嫌な状態に移行するトレンドは捉えられるが、動いたり、興奮した状態から不機嫌な状態への移行は捉えられない等の課題があることがわかった。
- ・実証実験で集められた飛行機内での赤ちゃんの生体のデータ集約をもとに、1日の赤ちゃんの機嫌のメカニズムを把握できる技術や、アプリの開発を、飛行機の搭乗時だけでなく、他の移動手段や日常生活の中で活用できる可能性があるのではないかと考え、現在は、他のシーンへの応用を検討している。
- ・本プロジェクトに対する反響は非常に大きく、協力したいと申し出ってくれる人が社内外を問わず多くおり、赤ちゃん連れでの飛行機利用を応援したいという人がたくさんいることを実感した。今後も実証を重ねてAI技術やアプリを活用し、機内に限らず家庭や保育所等にて赤

ちゃんの状態把握をしたり、親子をつなぐ技術の開発等も検討している。

（２）子育て支援の社会的気運の醸成のために、必要と考える取組

①乳幼児がいる子育て世帯が抱える課題・子育てしやすい社会づくりのために求められる取組

- ・平成 30 年度及び令和元年度に ANA に寄せられた「お客様の声」を「泣く・泣き」というキーワードをもとに抽出して分析したところ、機内環境についてのお叱り・改善要望の内容として最も多く占めているのは「静寂性」に関するもので、全体の 45%にのぼった。機内において、小さい子どもの声や泣き声に対して、周囲の利用者が不快に感じてしまうことがあるという実情がうかがえる結果である。
- ・赤ちゃん連れの利用者においても、周囲に迷惑をかけてしまうことに不安を感じているという声が多く聞かれる。キャビンアテンダントは、子ども向けのグッズ（シールや小さなおもちゃ等）を常に持ち歩き、子どもがぐずった時などに対応できるようにはしているが、それでも落ち着かないこともある。
- ・子ども専用の座席やゾーンが欲しいという利用者の声はあるが、座席の予約状況は様々であり、実際には難しい。しかし、令和元年から成田ホノルル間で運行している A380 機内には日本の航空会社で初めてとなるカウチシート「ANA COUCHii」を導入。足元部分も座席と同じ高さにフラットになることで、横になってお寛ぎいただけるだけでなく、赤ちゃんが安心してハイハイできるなど、窮屈なイメージとは異なり自由度を上げることができる。

②子育てしやすい社会づくりのために求められる取組

- ・国際線の飛行機もある中で日本と海外を比較すると、海外の人の方が子どもが泣くことについて寛容な印象がある。また、日本人は、当事者も迷惑をかけないようにしたい、泣くと周囲に迷惑なのではないか、という意識も高いと感じる。その意識が、赤ちゃん連れでの飛行機利用をためらわせるのではないか。周囲の人が子どもに対して手を差し伸べてくれる海外の風潮を広め、暖かい応援の声をより伝えられるとよいのではないか。

6. 赤ちゃんタイム（神栖市立中央図書館）

調査対象	神栖市立中央図書館（茨城県）
調査実施時期	令和3年3月9日（月）

（１）団体の概要

- ・茨城県神栖市の中央図書館では、赤ちゃんなど小さな子ども連れの利用者が気兼ねなく図書館を利用できるよう「赤ちゃんタイム」の時間を設けている。「赤ちゃんタイム」にあわせて、図書館ボランティアによるサポートや、市の子育てコンシェルジュによる出張相談も実施している。
- ・そのほかベビーカートの設置など、子育て世帯の図書館利用の促進に向けて各種支援を行っている。

（２）実施している子育て支援の普及啓発に係る取組について

①取組の開始時期、経緯・目的等

- ・平成25年6月6日から、「赤ちゃんタイム」という取組を行っている。同年4月の異動で新しい館長が着任した際、前任の館長から、図書館に子ども達が来て、のびのびと使ってもらえる環境を作ってほしいという申し送りがあった。当時、図書館内は土日でも比較的静かで、平日も赤ちゃんの泣き声が聞こえると、今日は赤ちゃんを連れてきている人がいると分かるほど、小さな子ども連れでの利用が少ない状態であった。
- ・また、館長が本好きの図書館職員に話を聞いた際も、自分自身も子どもが小さいうちは、泣いたり騒いだりしないか心配で一緒に図書館に行くことを控えていたという話であった。
- ・そこで、他の図書館の取組を調べてみたところ、東京都杉並区や岐阜県可児市など、先行する自治体で「赤ちゃんタイム」という取組を行っていることがわかった。平日の特定の時間帯を「赤ちゃんタイム」として設定することにより、赤ちゃんなど小さな子ども連れの利用者が気兼ねなく利用できることを目的としており、予算の確保なども特段必要ないため、毎週木曜日の午前10時～12時を「赤ちゃんタイム」として、取組を開始した。
- ・毎週木曜日の午前10時になると、「これから赤ちゃんタイムはじめます、騒がしいこともありますが、どうぞご理解ください」という館内放送を流している。
- ・また、赤ちゃんタイムの日の午前11時から、ボランティアによる赤ちゃん向けの読み聞かせの会も行っている。ただし、新型コロナウイルスの影響により、現時点（令和3年3月時点）では休止している。
- ・赤ちゃんタイムのサポートとして、図書館ボランティアを募集している。当館は絵本を20冊まで借りることができるが、赤ちゃんを抱っこしたり、鞆などの大きな荷物を持ちながらとなると大変であるため、保護者が借りる本を選んだり貸出カウンターで手続きをしたりする間、ボランティアが付き添って子どもの様子を見たり、折り紙や塗り絵等を一緒にしたりしてサポートすることを目的としている。

- ・子育てコンシェルジュによる出張相談は、平成 28 年 6 月から開始。本市で子育てコンシェルジュの取組が始まった際に、館長が、赤ちゃんタイムに対象となる子育て世代の利用者が図書館に来ているので、こちらへ出張してきてもらえるとよいのではと考えたことがきっかけである。月 2 回、赤ちゃんタイムの時間中に市の子育てコンシェルジュ（保健師等）が図書館に来て、育児相談を行っている。
- ・ベビーカートは、平成 26 年 8 月から開始。月齢の小さな赤ちゃんを連れている利用者が、赤ちゃんのお世話用の大きな鞆に大量の貸出本を持って大変そうな様子を見て、職員がもっと図書館の利用を赤ちゃんと一緒に楽しんでもらえるようにできないかと感じたことがきっかけである。カートは、生後 2 ヶ月～3 歳が対象で、首が据わっていない赤ちゃんでも簡単な操作で載せることができる。館内に 3 台配置しており、1 台当たり約 5 万円である。下の部分が頑丈でスペースが大きいいため、ベビーカーと比べて大きな荷物や借りる本を乗せやすい点が特徴である。

図表 113 図書館で利用できるベビーカート



出所：神栖市立中央図書館ウェブサイト

<https://www.kamisu-tosho.jp/viewer/info.html?id=189>（令和 3 年 3 月 22 日確認）

②組織体制、普及啓発の対象、利用している媒体、取組にかかる費用等具体的な取組内容

- ・赤ちゃんタイムの取組を周知するにあたっては、図書館内にチラシを掲示したり、図書館のホームページへお知らせを掲載したり、市の子育て情報を提供するアプリ（ママフレ WEB）のお知らせ通知等を活用している。アプリは、比較的活用されている。
- ・取組の開始当初は、図書館職員が市内の公園などで赤ちゃんタイムのお知らせを記載した小さなチラシを配布したりもした。

③取組を行う際の連携先の有無

- ・子育てコンシェルジュの取組は、市の子育て支援課と連携している。

④実施したことによる効果、取組を行う上での課題

- ・開始当初、子育て世代の利用者に、何を見て参加したか、参加してどうだったか、といった簡単なアンケートを行った。利用者の反応としては、子どもが図書館で声を出したり泣いて

しまったりしても、赤ちゃんタイムの日なら大丈夫かなと思えるため、取組のおかげで図書館を利用しやすくなったという声が聞かれた。

- ・一方、子育て世代以外の利用者からは、開始当初は、静かにしてもらえないのか、黙らせてほしいなどのクレームが一定数寄せられた。館内に「児童コーナー」という区画を設けているが、一般の閲覧スペースとワンフロアでつながっているため、子どもの声が聞こえやすいということもあったかと思う。平日午前中の時間帯は60代以上の男性の利用者が多く、クレームもその層から寄せられることが多かった。職員が一人ずつ事業の趣旨や内容について説明を行い、理解を求めていった。最近では、取組が定着したこともあり、クレームが寄せられることはなくなっている。
- ・図書館ボランティアは、赤ちゃんタイムの開始当初は15～20人程度が登録していたが、現在は4人にまで減っている。仕事を開始したり、孫が生まれてその子守をするようになった、長年活動しているのでそろそろ終わりにしたいなど、ボランティアを辞める理由は様々である。新しいボランティア募集のチラシを配布したり、図書館のサイトで募集しているのを見て来てくれる人もいるが、継続して活動できる方が少なく、ボランティアの協力が課題となっている。ボランティアがいない日は職員が代わりに手伝うが、赤ちゃんの様子をみたりするのは、子育て経験がないと難しいということもある。

（３）子育て支援の社会的気運の醸成のために、必要と考える取組

①乳幼児がいる子育て世帯が抱える課題

- ・赤ちゃんが泣いたり、幼児がおしゃべりすることが気になるため、小さな子ども連れで図書館を利用しにくいという声は多く聞かれる。下の子がまだ赤ちゃんで、上の子が3歳くらいなど、二人以上の子どもを連れている場合も子どもから目が離せず、ゆっくり本を選びたくても難しいという声もある。
- ・また、赤ちゃんのお世話用の鞆など、もともと大きな荷物を持っている中で、たくさんの本を借りること自体も大変である。

②子育てしやすい社会づくりのために求められる取組

- ・赤ちゃんタイムの取組に対して、最近では子育て世代以外の利用者から静かにしてほしいというクレームが出ることはほぼなくなったが、一昔前と比べて、図書館自体が静かにしないといけない、という場所ではなくなってきたと感じている。例えば、最近では図書館内でイベントをしたりすることが、以前よりも増えている。多少の話し声がしたり、活気が感じられる場所であってよいのではないか。
- ・利用者も、ただ本を借りたり勉強したりすることだけを求めているわけではなく、滞在してコミュニティ形成の場となることを求めている人も増えてきているのではないか。
- ・子育て中の親子は、子育てでストレスを抱えることもあるため、図書館でほっとできる時間を過ごしてほしい。赤ちゃんや子どもの声がすることを許容できる優しい社会になるとよいと考える。

7. 芦花公園団地における地域住民との交流の取組(独立行政法人都市再生機構(UR 都市機構))

調査対象	独立行政法人都市再生機構
調査実施時期	令和3年3月18日(木)

(1) UR賃貸住宅の概要

- ・UR 都市機構は、1955 年に設立された日本住宅公団の時代から賃貸住宅を運営しており、現在約 72 万戸を管理している。UR 賃貸住宅における高齢人口の割合は国勢調査を上回っているものの、管理開始からそれほど年を経っていない団地では、若者世帯や子育て世帯の居住も多い。
- ・全国的に少子高齢化が進み、大都市圏を中心に高齢者人口がさらに増加していくことが予想されている中、「地域包括ケアシステムの構築」が国家的な取組みとして目指されていることと合わせ、UR 都市機構においても、団地を含む地域一体で「多様な世代が生き生きと暮らし続けられる住まい・まちくミクストコミュニティ」の実現を目指している。
- ・自治体や地域の介護事業者等と連携した高齢者施設・子育て支援施設等の導入や、子育て世帯の交流・居場所づくり、屋外空間や集会所等を活用した住民間の多世代交流等の取組を積極的に進めている。

(2) 芦花公園団地における子育て支援について

①芦花公園団地における取組の開始時期、経緯・目的等

- ・世田谷区南烏山の芦花公園団地の建替えにかかる世田谷区等の地元調整で、団地の居住者を含む地域住民の方も利用できる子育て支援施設を団地内に設置することとなり、UR 都市機構が 11 号棟 1 階の共用部に約 70 m²のキッズルームを整備した。
- ・キッズルームを拠点とする子育て支援の取組については、世田谷区内で活動する特定非営利活動法人せたがや子育てネットと UR 都市機構の協働事業として実施することとなり、「キッズスペースぶりっじ@roka」を平成 22 年 5 月に開設し、乳幼児親子向けの子育てひろば、一時預かり等を実施した。
- ・本取組は平成 26 年 4 月より世田谷区のおでかけひろば事業に位置づけられ、「おでかけひろば ぶりっじ@roka」(以下、「ぶりっじ」)として運営を開始した。あわせて、キッズルームを拠点に世田谷区地域子育て支援コーディネーター事業として、子育て支援に関する情報発信、相談・助言、サービス利用の支援を実施した。

②組織体制、取組の対象、利用している媒体等具体的な取組内容

<組織体制>

- ・「ぶりっじ」の現場スタッフは約 10 名(子育て経験者、保育士、栄養士等)。その他、地域のボランティアも含めて運営している。
- ・ボランティアスタッフには夏休み等の期間の単発のスタッフもいる。

<取組の対象>

- ・妊婦、未就園児とその保護者
- ・ただし、「ぶりっじ」が主催するイベントには子育て世帯以外の地域住民の参加もあり、多世代にわたる地域との交流の機会が設けられている。例えば、世田谷区とせたがや子育てネットが主催した防災イベントには約 300 人が参加している。また、団地居住者・地域住民との交流の場として、月に 1 回、子育て世帯以外の方も集まって食事を作って食べる「ろかめし」という食事会を実施している（現在コロナ禍のため活動休止中）。

<利用している媒体>

- ・日々の活動報告やイベント等の周知は、ポスターの掲示や、「ぶりっじ」のホームページ、ブログ、UR 都市機構のホームページ等を通じて行っている。

図表 114 芦花公園団地で開催した防災イベント「地域防災ははじめの一步～美味しい炊き出し体験～」の様子



出所：独立行政法人都市再生機構「芦花公園団地で防災コミュニティイベント『地域防災ははじめの一步』を開催しました」https://www.ur-net.go.jp/news/20191127_touchin_rokakouen.html（令和 3 年 3 月 22 日確認）

③取組の効果、取組を行う上での課題

<取組を実施したことによる効果>

- ・相談機会の創出による子育て世帯の不安解消に寄与している。
- ・「ぶりっじ」の開催するイベント等を通じて、団地の高齢少子化に対応したミクストコミュニティの交流機会の増加に寄与している。
- ・「ぶりっじ」の主催するイベントへの参加により、高齢者の生きがい創出にも繋がっている。
- ・団地の視認性の高い場所に位置していることから、緩やかな見守りに貢献している。

<取組を行う上での課題>

- ・一方、「ぶりっじ」については、区外からの利用者もおおり子育て世帯の認知度は高いが、今後、子育て世帯以外の居住者や近隣住民の認知度をより高めていく必要がある。子育て世帯以外にも取組を知ってもらい、イベントに参加したり、ボランティアとして関わってもらうことで、団地内で豊かな子育て環境を整備し、居住者間や近隣住民とのコミュニティ形成を促進していくことが重要である。

第6章 有識者インタビュー調査結果

調査の企画や実施方法等についてご意見をいただくほか、子育ての当事者が抱える課題や、子育て支援の普及啓発の参考事例等について伺い、検討の参考とするため、有識者に対してインタビューを実施した。

＜有識者インタビュー：2件＞

No.	インタビュー対象	調査実施日
1	高知大学 教育学部教授 森田 美佐氏	令和2年9月28日（月）
2	博報堂こそだて家庭研究所 亀田 知代子氏	令和2年9月29日（火）

ヒアリング No.1	
調査対象	高知大学 教育学部教授 森田 美佐 氏
調査実施時期	令和2年9月28日（月）

（１）子ども、子育て家庭をめぐる課題

①子どもや子育て家庭に対する「迷惑意識」について

- ・子どもや子育て家庭に対する「迷惑意識」が生まれる要因として、主に2つが考えられる。
 - 1つは、子育ての非当事者側（親ではない人）からの親に対する「親としての責任」の厳しさ、特に母親に対する責任の厳しさである。親（特に母親）の側も責任を重く感じて、公共の場で子どもが泣いたら申し訳ない、子どもが周囲に迷惑をかけてはならない、と考える場合、子ども連れでの行動を制限することにもつながり得る。実際、周囲に気を遣うあまり、子ども連れでは外出をしないという母親もいる。
 - もう1つは、社会全体の子育てに対する理解の乏しさ、子育てしやすい環境整備の不足である。自身も子どもが小さかったときに子ども連れで飛行機に搭乗した際、隣の人から「席を替えろ」と怒鳴られた経験がある。最近は子ども連れの乗客に対して優先サービスが広まるなど、環境整備については徐々に進んでいると思う。しかし、他の先進国と比べて、日本社会の公共の場における子育てへの理解は、今も厳しいものがある。
- ・子育ての当事者に対する厳しい見方を和らげるために必要な条件としては、大きく次の3点があるのではないかと¹。
 - 1つ目は、多様な人生経験、価値観を有しているかどうか。自身の人生経験から、他者の苦労に対する理解（自分も苦労したのだから、と逆に厳しい見方になってしまう場合も考えられるが）や視野を広くもてるかということである。
 - 2つ目は、身近なところで子どもに接しているかどうか。子どもは大人が言えばすぐ静かになるものではない、ということを経験的に知っている人は、他者の子育てに対してそこまで厳しい目を向けることが少ないと考える。
 - 3つ目は、子どもと遊んだ経験だけではなく、子どもの世話もしたことがあるかどうか。例えば、子どもに食事を食べさせたり、寝かしつけたりといった経験がある人も、他者の子育てに対してそれほど厳しい目を向けないのではないかと。

②日本の子育て環境の特徴・課題について

- ・フィンランド、カナダなどの多文化共生の取組について先進的な国では、どのような生き方、どのような家族のあり方を選択しても、それを支える仕組みや政策そして文化があり、「お互い様」という意識をもちやすいといえる。一方、「日本は子育て支援だけに焦点が当たっている」と、子どもがいない人から不満の声も聞かれる。昔と比べて現在ではライフコースも多様であるため、お互い様の精神は薄れてきているように感じる。少子化により労働力人口が減る中で子育て支援は注目されているが、子どもがいない人や、子どもをもたない選択をし

¹ 森田美佐、中谷奈津子「育児をめぐる迷惑意識が母親の育児行動に及ぼす影響：行為者側からみた公共の場における社会的迷惑」（平成26年）

た人の生き方も、社会の中で尊重されているという実感も必要であると考え。

- ・生活の中で困っている人を支える側も支えられる側も、共に生きやすい地域や社会づくりが求められている。しかし子育てにおいては、子育てする親も親を支える人も疲弊しているのが日本の現状ではないか。支える側としての、子育てを終えた人や、子どもをもたない人たちも自身の生活で手いっぱいであり、子育て家庭を支えるための十分な時間や精神的な余裕がないのではないか。
- ・海外では、学生がベビーシッターをするなど子どもにかかわる機会があるが、日本は親になるまで子どもと身近に接する機会が少ない。子ども連れの親が困っていても、どういう風に手助けをすればいいのか、どうすればよいのか分からなければ、声をかけるのもためらってしまうだろう。

（２）子育て支援の社会的気運の醸成を図るための視点と取組

①子育て支援の社会的気運の醸成を図るために必要な視点について

- ・社会的気運の醸成を図る際に、「頑張ろう」という意気込みや声かけだけでは進まないのではないか。例えば働く場についてみると、子育てしながら働く同僚を手助けすることにより、自身も評価や待遇面でインセンティブが得られる仕組みを導入している企業がある。例えばスウェーデンでは、同僚が育児休業を取得しても他の人に仕事のしわ寄せが発生しにくいよう、もともと正社員ではなかった人を代替要員として雇用する取り組みがある。職場でも公共の場面でも、子育てをする親を支える側に、目に見える形でのインセンティブを設けることで、それをきっかけとして徐々に子育て支援の気運が醸成されていくのではないか。
- ・高知で子ども食堂を運営する人に話をうかがった際、現在支援している子どもたちは、将来の高知県を支える消費者であることを、スーパーや運送業者の方々が気づいて下さった結果、積極的に支援にかかわってもらえるようになった、という話を聞いた。子育てを支援することは、自分たちとも関係のあることだという理解が浸透することで、子育ての気運醸成につながっていくこともあるといえる。

②子育てしやすい社会づくりのために求められる取組について

- ・子育てを支える人を、経済的にも社会的にも、もっと評価したり、支援したりすることが必要ではないか。例えば、有償で子育て支援に携わっている NPO 法人やファミリーサポートの担い手に対して十分な報酬が支払われているだろうか。また、職場で育児休業の取得者が出た場合、同僚の負担増による穴埋めを前提とするのではなく、会社が人材を補填をする仕組みを行政も支援していくといった取組も必要ではないか。子育てを支える側が、支えることにもっと価値を見出せるような取組・政策が必要であろう。
- ・子どもの頃に支援を受けた経験から、大人になって支援の支え手に回る人もいる。例えば、外国から転居してきた家庭を支援する活動を行っている NPO 法人で、支援してもらった経験がある子どもが大人になり、次の支え手になっているという例もある。
- ・仕事中心の生活であったために、子育てに十分かわれなかったことを悔やみ、リタイア後に地域で子育て支援をしたいという高齢の男性もいる。彼らに育児サークルや学童などで積

極的に活躍してもらえる場を増やす取り組みは、彼らのみならず、子どもにとって親にとっても有難い。

- ・子どもがいるかどうかにかかわらず、子どもに接する機会を設けることも有効ではないか。例えば、会社で従業員の子どもを招いたイベントを開催することで、互いの家庭の事情の理解が深まることがある（もちろん、開催にあたっては、親が子どもを連れて参加することの負担が大きくなるような配慮は必要である）。
- ・高知県では移住推進のイベントと婚活イベントを一緒に開催している例がある。何かのイベントと、子どもや子育て家庭向けのイベントを同時に開催することで、子どもがいない人が、子どもや子育て家庭とつながる機会が生まれるかもしれない。身近なところで、子どもがいる人もいない人も、同時に楽しむことができる機会をつくることは、両者が接点をもち、共に子どもや子育てについて考えるきっかけにもなりえる。

ヒアリング No. 2	
調査対象	博報堂こそだて家庭研究所 亀田 知代子 氏
調査実施時期	令和2年9月29日（火）

（１）子ども、子育て家庭をめぐる課題

①公共交通機関利用時における意識について

- ・平成26年に弊社が実施した子ども連れでの公共交通機関の利用に関するアンケート調査を実施によると、子ども連れで公共交通機関を利用する際に周りに気を遣う、周りに迷惑をかけていると感じている母親が多いことが明らかになった²。
- ・同調査において、どのような層が子ども連れに対して厳しいか、あるいは助けてくれる傾向があるかを母親に聞いたところ、助けてくれるのは「おばあちゃん」が約6割でもっとも高く、嫌な顔をすることがあるのは「おじさん」が約4割でもっとも高いという結果だった。また、子ども連れの母親が積極的に手助けをすることは意外と少なかったが、これはおそらく自分も余裕がないためではないかと思われる。
- ・また、子ども連れでの公共交通機関の利用に際して、どんなことで困ったかを聞いたところ、「子どもが泣いたり、ぐずったりした」と「荷物が多くて大変だった」が同列で多かった。
- ・子ども連れで公共交通機関を利用した際に経験した嬉しかったこととしては、「席や場所を譲ってくれた」に次いで、「子どもに話しかけてくれた」が多く、子どもに声をかけてもらって嬉しかった具体的なエピソード等が多く挙げられた。その中では、男性に声をかけてもらい、印象に残ったというエピソードもあった。嫌な顔をされることも多いからこそ、助けてもらったことが印象に残るのではないかと思う。

②子育て支援に対する社会全体の意識について

- ・公共交通機関利用に関する調査からも伺えるように、子どもや子育て家庭を手助けしたり、支援したりするためには、手助けする側の気持ちの余裕が必要であろう。子育て家庭同士は、他者の手助けをする余裕がなかったり、男性は仕事で疲れてやはり余裕がなかったりと、コロナ禍の中ではなおさら、人々が余裕のない状態にあるのではないか。
- ・子どものどのような行動を迷惑と考えるのかという点について、日本では海外に比べて子どもが騒ぐことを「迷惑」と感じる人が多いと思われる。なぜそうなのか、要因を特定することは難しいが、「他人に迷惑をかけないようにしなさい」という親や学校の教育方針が「(子育てにおいても)人に迷惑をかけてはいけない」という方向に向いてしまっている可能性も考えられる。
- ・世界の家族の働き方や暮らし方について、海外居住経験者にヒアリングをした際に印象的だったこととして、石畳や段差が多いヨーロッパの道では、ベビーカーのみならず車いす利用者などに対しても、困っている人を見かけたらすぐに周囲の人が手助けをする意識が根付い

² 博報堂こそだて家族研究所、インタースペース『ママリサ〜いまどきママリサーチ〜「ママと子どもの公共交通機関利用」調査』（平成26年）

<https://www.hakuhodo.co.jp/news/newsrelease/48478/>（令和3年3月22日確認）

ている、ということであった³。また、ハワイでは“オハナ（家族）”や“アロハスピリット”という独自の慣習があり、人と人の繋がりを非常に大事にしており、子育てについても「地域、コミュニティの大人と一緒に子どもを育てるのが当たり前」という社会全体の空気感がある。現代の日本では、そういった意識が薄れ、子育ての非当事者は、「子育ては自分に関係がないものだ」という意識が強いのではないか。

- ・1980年代までは、日本において子どものいる世帯が大多数であり、子育てについても「お互い様」という意識を持ちやすかっただろう。しかし、現在は子どものいる世帯の割合が低下し、子育て家庭は社会の中でマイノリティになりつつある。こうしたことも、人々の意識の変化に影響を与えていると思われる。国は少子化対策として子育て支援に取り組んではいるが、もっと子育てをしたいと思える社会づくりのために、注力して取り組むことが必要といえるであろう。

③子育て当事者の意識について

- ・弊社が令和元年に実施した調査において、子育て層を幸福度によって分類することを試みた。もっとも幸福度が高かったのは、家族・親族や友人、地域の住民との関わりや支援を受けて、オープンに子育てを行っている人であった。
- ・次に幸福度が高かったのは、夫婦二人三脚型（夫婦完結型）で子育てを行っている人で、若い世代に多くみられた。夫婦で協力して育児ができれば、祖父母等の助けがなくても幸福度が高いという結果であったが、中には、祖父母等からの支援を積極的に受けたくないと考えている人が、一定含まれている可能性はある。男性の育児参加や核家族化も進む中で、家族の価値観や生活スタイルに合わせた支援を考えることも必要ではないかと思われる。
- ・また、母親のみが育児を行うワンオペ世帯では、もっとも幸福度が低い傾向にあった。

（２）子育て支援の社会的気運の醸成を図るための視点と取組

①子育て支援の社会的気運の醸成を図るために必要な視点について

- ・子育て支援に対して、多くの人は「ネガティブ」でも「ポジティブ」でもなく、無関心層である。無関心層をどれだけ減らせるかということが子育てしやすい社会の醸成につながるのではないか。
- ・無関心層は比較的男性に多いが、若い世代では、子育てにしっかり関わりたいと思っている男性が増えている。きっかけさえあれば、無関心層も「ポジティブ」な層に変化し得る可能性がある。また、子育て世代よりさらに若い世代は、よりポジティブな意識をもってもらいやすい印象がある。普及啓発においては、世代間の意識差もポイントになると考えられる。

³ 博報堂 WEB マガジン センタードット「世界の家族と井戸端会議」
<https://www.hakuhodo.co.jp/magazine/series/sekainokazoku/>（令和3年3月22日確認）

②子育てしやすい社会づくりのために求められる取組について

- ・子育ての当事者同士のネットワークという観点では、SNS を利用した子育て経験・知識の共有や子育て用品のシェア等、ここ数年で大きく充実してきたと感じる。一方で、子育ての非当事者が子育て層とつながりを持つ機会や手段はまだ少ない。地域の中で、当事者層と非当事者層のつながりをどう作っていくか検討していく必要がある。
- ・子どもの数が減っている中で、自分の子どもを育てる以外で、子どもと衣食住を共にしたり、子どもの世話をしたりするなど、子育ての様子を見聞きする機会が減っている。例えば、子育て家庭と地域住民の交流が生まれるように、保育園の中にパン屋を併設している事例がある。こうした仕掛けづくりも有効だろう。
- ・また、子育て支援に携わるマンパワーとして、自分の子育てを終えた「じいじ、ばあば」世代の出番に着目することもよいのではないかと。血縁者だけではなく、日本全体の大きな家族として、子育て支援の支え手に回ってもらうことが考えられる。
- ・そのほか子ども食堂や子育て家庭への学生のインターンのように、非当事者が子育ての実態を見聞きする機会や、子育てを体験できる試みなど、子育て家庭と意識してふれあう機会を増やせるとよい。お祭りやイベントなど、子育て家庭と非当事者が集まるきっかけがあると、当事者と非当事者の接点が生まれる可能性がある。
- ・子育てをしたことがない人は、子育て支援といっても何をすればよいか、どう関わればよいか分からない。子ども食堂は子どもの食事の支援が目的だが、結果的に様々な人が子どもに関わり、子育て家庭の実状等について理解を深めるきっかけにもなっている。このように「食事の支援」や「学習支援・学習ボランティア」など明確な目的がある活動は、非当事者も参加しやすいといえる。
- ・普及啓発といっても、子育てに対する共感や理解がなければ、行動を変えていくことはできない。ただし、子育て家庭の状況について「子育てが辛い」、「大変だ」ということばかり発信してしまうと、かえって敬遠されかねない。非当事者に伝わりやすい形で、伝え方を工夫することが大事であろう。

資料編 アンケート調査票

参考資料 1. 自治体アンケート調査票

令和2年10月

各都道府県・市区町村

子育て支援担当課御中

三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社

令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省補助事業）
「子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発に係る調査研究」

子育て支援の普及啓発の取組に関するアンケート

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、弊社では、令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省補助事業）「子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発に係る調査研究」の一環で、標題のアンケート調査を実施しております。本アンケートは、子育てがしやすい社会、子どもや子育てに温かい社会の実現に向けて、全国における子育て支援の普及啓発の取組状況等を把握し、今後の施策の検討に役立てることを目的に実施するものです。

ご多忙中のところ誠に恐縮ではございますが、本調査の趣旨にご理解賜り、アンケートにご回答くださいますようお願い申し上げます。本調査票は、**令和2年11月18日(水)**までに、ご回答のうえ、同封の返信用封筒にてご返送いただきますようお願い申し上げます。

敬具

1. ご記入上、ご注意いただきたい点

◆利用目的

- ・ ご回答いただいた内容は、施策検討や関連分野研究の基礎資料としてのみ利用いたします。また、すべて統計的に処理されますので、個々の調査票のご回答や結果が、調査実施者及び厚生労働省以外に知られることはございません。

◆調査対象について

- ・ 全国の都道府県および市区町村にお送りしています。（区は東京都特別区）

◆回答方法等について

- ・ このアンケートは、特段の指定がない限り、ご回答は令和元年度時点の状況でお答えください。
- ・ お答えは、あてはまる番号を○でかこんでください。「○は1つ」「○はいくつでも」など回答数が指定されています。あてはまる項目にその数だけ○印をお付けください。
- ・ 回答後、同封の返信用封筒にてご返送ください。
- ・ 担当部署が複数に及ぶ場合には、お手数をおかけいたしますが、関係するご担当者様にもご協力いただけますと幸いです。

2. 調査結果の公表について

- ・ 本調査は令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業として、厚生労働省の補助金を受けて、弊社が実施するものです。調査結果は令和3年4月以降、弊社ホームページ等にて公開する予定です。

3. 問い合わせ先

三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社 共生・社会政策部 子育て支援調査事務局

担当：横幕、尾島、有竹、服部

〒105-8501 東京都港区虎ノ門5-11-2 オランダヒルズ森タワー

Eメール：

※本調査に関するお問い合わせは、メールで承っております。

お電話での回答をご希望の場合は、お電話番号を記載のうえ、上記のアドレス宛にメールをお送りください。2～3営業日以内に、担当者より折り返しお電話させていただきます。

※電子ファイル（Word ファイル）でのご回答をご希望の場合は、問い合わせ先のEメールまでご連絡ください。

- 本アンケートでお伺いする取組について、以下のようにご理解のうえ、ご回答ください。

【子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発に関する取組】

- 妊娠・出産、子育てという各ライフステージにおいて、当事者が周囲から温かく受け入れられ、必要な支えを得られることを推進する取組
- 子どもや子育てに対する社会全体の理解や認識が深まり、行動に表れることで、当事者の抱える不安や負担が軽減され、安心して子育てができるという実感を得られることを推進する取組
- なお、本調査での「子育て支援」は、妊娠期から未就学児の子どもを持つ家庭に対する支援を対象としています。
- 具体的には、以下のような取組が挙げられます。
 - ◇ 子育て支援パスポート事業
 - ◇ 「家族の日」「家族の週間」等
 - ◇ 公共の場における子育て家庭へのサポート
(子連れ外出のサポート、商業施設や公共交通機関における子育てのサポート提供等)
 - ◇ 子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組(ポスターの掲示等)
 - ◇ 子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組(子育て体験・ワークショップ、家族シミュレーション、乳幼児とのふれあい体験等)
 - ◇ 公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組
(ステッカー、マーク、グッズの配布・掲示等)

I. 貴自治体について

ご回答にあたり、貴自治体に関する情報とご連絡先をご記入ください。

① 市区町村コード (総務省による6桁のコード)	
② 都道府県名	(都・道・府・県)
③ 市区町村名 (※市区町村のみ回答)	(市・区・町・村)
④ ご回答部署名	
⑤ 電話番号	

Ⅱ. 子どもや子育て家庭をめぐる近隣住民等からの苦情について

問1. 貴自治体では、過去3年間（平成29年度～令和元年度）に、子どもや子育て家庭をめぐり、近隣住民等から苦情を受けたことはありますか。苦情を受けたものとして、あてはまるものをすべて選んでください。（〇はいくつでも）

- 1 保育所・公園等における子どもの声等に関する苦情
 - 2 住宅地等における子育て家庭の生活音等に関する苦情
 - 3 保育所や児童館等の設置に関する苦情
 - 4 公共の場における子ども・子育て家庭のふるまいに関する苦情
 ➡ (4に○の場合)それはどのような場所に関する苦情ですか。(○はいくつでも)
 a. 電車・バス b. 街路 c. 飲食店 d. 娯楽施設
 e. 店舗(c、d 以外) f. その他()
 - 5 その他(具体的に:)
 - 6 苦情を受けたことはない →問 3 へ

問2は、問1で1～5に○をつけた自治体にうかがいます。

問2. 貴自治体における子どもや子育て家庭をめぐる苦情の発生状況について、3年前（平成29年頃）と比べて、どのような傾向にありますか。あてはまるものを1つ選んでください。（〇は1つ）

- | | |
|---|----------|
| 1 | 増えている |
| 2 | ほぼ変わりはない |
| 3 | 減っている |
| 4 | わからない |

Ⅲ. 貴自治体における子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組について

● 問3～問4は全ての自治体にうかがいます。

問3. 令和元年度において、貴自治体の条例や計画の中に、子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を位置づけていますか。あてはまるものを1つ選んでください。（〇は1つ）

- | | |
|---|----------|
| 1 | 位置づけている |
| 2 | 位置づけていない |

問4. 令和元年度における子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組の実施状況について、a～g について、あてはまるものを1つずつ選んでください。なお、市区町村において、都道府県の事業に協力している場合は「実施している」とお答えください。（○はそれぞれ1つずつ）

	1. 令和元年度に 実施した	令和元年度は実施していない		
		2. 過去に実施したことはあるが、令和元年度は実施せず	3. 令和元年度は実施していないが、今後実施を検討している	4. これまで一度も実施したことがなく、今後も実施予定はない
a. 子育て支援パスポート事業	1	2	3	4
b. 自治体独自の「家族の日」「家族の週間」等の設置	1	2	3	4
c. 公共の場における子育て家庭へのサポート (子連れ外出のサポート、商業施設や公共交通機関における子育てのサポート提供等)	1	2	3	4
d. 子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組 (ポスター、チラシ、広報誌、HP への掲載等)	1	2	3	4
e. 子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組 (子育て体験・ワークショップ、家族シミュレーション、乳幼児とのふれあい体験等)	1	2	3	4
f. 公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組 (ステッカー、マーク、グッズの配布・掲示等)	1	2	3	4
g. その他の取組 (具体的に:)	1	2	3	4


a～g すべてについて、選択肢2～4のいずれかに回答した場合(令和元年度に取組を実施していない場合)は、問9へお進みください。

問5. 問4で回答されたc～gの取組のうち、普及啓発の効果が大きいと考えるもの4つまでについて、
 おわかりになる範囲で、以下に概要を記入してください。なお、他の自治体（都道府県、市区町村）や民間団体（企業、NPO等）と連携しているものも含めて、ご回答ください。

<取組1>

①事業・取組名		
②開始時期 (○は1つ)	1. 2015年度以降	2. 2014年度以前
③担当部局 (○はいくつでも)	1. 子育て支援担当部局(課) 2. 男女共同参画担当部局(課)	3. その他()
④連携先 (○はいくつでも)	1. 都道府県 2. 市区町村 3. 民間企業	4. NPO法人 5. その他() 6. 連携先はない
⑤事業内容等 (問4の分類のうち、あてはまるものの1つに○)	c. 公共の場における子育て家庭へのサポート d. 子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組 e. 子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組 f. 公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組 g. その他 <取組内容、課題等> 	

<取組2>

①事業・取組名		
②開始時期 (○は1つ)	1. 2015年度以降	2. 2014年度以前
③担当部局 (○はいくつでも)	1. 子育て支援担当部局(課) 2. 男女共同参画担当部局(課)	3. その他()
④連携先 (○はいくつでも)	1. 都道府県 2. 市区町村 3. 民間企業	4. NPO法人 5. その他() 6. 連携先はない
⑤事業内容等 (問4の分類のうち、あてはまるものの1つに○)	c. 公共の場における子育て家庭へのサポート d. 子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組 e. 子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組 f. 公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組 g. その他 <取組内容、課題等> 	

<取組3>

①事業・取組名		
②開始時期 (○は1つ)	1. 2015 年度以降	2. 2014 年度以前
③担当部局 (○はいくつでも)	1. 子育て支援担当部局 (課) 2. 男女共同参画担当部局 (課)	3. その他 ()
④連携先 (○はいくつでも)	1. 都道府県 2. 市区町村 3. 民間企業	4. NPO 法人 5. その他 () 6. 連携先はない
⑤事業内容等 (問4の分類のうち、あてはまるものの1つに○)	c. 公共の場における子育て家庭へのサポート d. 子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組 e. 子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組 f. 公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組 g. その他 <取組内容、課題等> 	

<取組4>

①事業・取組名		
②開始時期 (○は1つ)	1. 2015 年度以降	2. 2014 年度以前
③担当部局 (○はいくつでも)	1. 子育て支援担当部局 (課) 2. 男女共同参画担当部局 (課)	3. その他 ()
④連携先 (○はいくつでも)	1. 都道府県 2. 市区町村 3. 民間企業	4. NPO 法人 5. その他 () 6. 連携先はない
⑤事業内容等 (問4の分類のうち、あてはまるものの1つに○)	c. 公共の場における子育て家庭へのサポート d. 子どもや子育て家庭の状況を広く周知する取組 e. 子どもや子育て家庭と接したり、子育て体験をする取組 f. 公共の場で子育てに関する手助けを促進する取組 g. その他 <取組内容、課題等> 	

- 問6～問8は、問4のa～gのいずれかについて「1. 令和元年度に実施した」に○をつけた自治体にかがいます。

問6. 子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を行ううえで、参考にした取組はありますか。参考にした取組がある場合、具体的な内容もあわせてご記入ください。なお、自治体のほか、企業、NPO、個人等が実施主体の取組も含めて、お答えください。（○は1つ）

1 参考にした取組がある

→ 参考にした団体・事業・取組名等を、具体的にご記入ください。

2 参考にした取組はない

問7. 子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を実施する理由として、あてはまるものをすべて選んでください。（○はいくつでも）

1 子どもや子育て家庭にやさしい社会・地域をつくるため

2 子どもに接する機会の少ない人と子育て支援の接点をつくるため

3 首長の関心が高かったため

4 議会で取り上げられたため

5 住民から要望があったため

6 他自治体が実施していたため

7 その他(具体的に:

)

問8. 貴自治体において、子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を実施するうえでの課題として、あてはまるものをすべて選んでください。（○はいくつでも）

1 財源が不十分である

2 取り組むための組織体制が不十分である

3 人的資源が不足している

4 事業実施に必要な情報が不足している

5 効果的な事業計画が設計できない

6 どのように取り組めばよいのかわからない

7 その他(具体的に:

)

⇒ ご回答後、問10へ進んでください。

- 問9は、問4でa～gすべてについて「令和元年度は実施していない」（選択肢2～4のいずれか）に○をつけた自治体にうかがいます。

問9. 子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組を実施していない（過去に実施していたが、やめた場合も含む）理由として、あてはまるものをすべて選んでください。（○はいくつでも）

- 1 財源がないため
- 2 取り組むための組織体制が不十分であるため
- 3 人的資源が不足しているため
- 4 事業実施に必要な情報が不足しているため
- 5 効果が見込めない（もしくは、得られなかった）ため
- 6 優先度の高い取組が他にあるため
- 7 住民のニーズや要望が高くないため
- 8 どのように取り組めばよいかわからないため
- 9 過年度事業において、目的を達成したため（効果が確認できたため）
- 10 その他（具体的に： _____）

- 全ての自治体にうかがいます。

IV. 民間の実施主体による子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組について

問10. 民間団体（企業、NPO、個人等）が実施している子育て支援の社会的気運の醸成を図るための普及啓発の取組について、ご存じのものがありましたら、主なものを3つまで、おわかりになる範囲で内容を記入してください。なお、管内地域に限らず、他地域や全国的に行われている取組も含めてご回答ください。

<取組1>

①事業・取組名	
②実施主体名	
③取組の概要	
④貴自治体との連携の有無 （○は1つ）	1. 連携あり 2. 連携なし 3. その他（具体的に： _____）

<取組2>

①事業・取組名	
②実施主体名	
③取組の概要	
④貴自治体との連携の有無 (○は1つ)	1. 連携あり 2. 連携なし 3. その他(具体的に:)

<取組3>

①事業・取組名	
②実施主体名	
③取組の概要	
④貴自治体との連携の有無 (○は1つ)	1. 連携あり 2. 連携なし 3. その他(具体的に:)

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

* 貴自治体で取り組まれている普及啓発のお取組について、パンフレット・チラシ等ございましたら、調査票と一緒に返信用封筒に入れてご返送いただけますと幸いです。

参考資料2. 個人アンケート調査票

※本調査では、未就学児がいる当事者層と子どもがいない非当事者層に対して、共通または異なる設問を設定した。ページ中央に配置された設問（Q から始まる設問）は当事者層・非当事者層共通の設問、ページ左寄りに配置された設問は当事者層対象の設問（AQ から始まる設問）、ページ右寄りに配置された設問（BQ から始まる設問）は非当事者層対象の設問である。

Q1
あなたの性別はどれですか。

- ☐ 男性
☐ 女性

Q2
あなたの年齢はどれですか。

- ☐ 10代
☐ 20代
☐ 30代
☐ 40代
☐ 50代
☐ 60代
☐ 70代以上

Q3
お子さんがいらっしゃいますか。
すでに親元を離れている場合や成人している場合を含めてお答えください。

- ☐ いる
☐ いない

Q3_1
お子さんの人数をお答えください。

人

Q4

現在、同居している家族として、あてはまるものをすべて選んでください。(いくつでも)

☐ 配偶者・パートナー

☐ 子ども

☐ 自分の父親

☐ 自分の母親

☐ 配偶者の父親

☐ 配偶者の母親

☐ 祖父母

☐ 姉妹兄弟

☐ その他

☐ 同居者はいない

Q5

同居している子どもの年齢として、あてはまるものをすべて選んでください。(いくつでも)

☐ 0歳

☐ 1歳

☐ 2歳

☐ 3歳

☐ 4歳～小学校就学前

☐ 小学校低学年

☐ 小学校高学年

☐ 中学生以上

Q5SQ

あなたが居住する都道府県はどれですか。

--- ▼

Q6

あなたの最終学歴はどれですか。

- ☐ 中学校
- ☐ 高等学校卒業相当
- ☐ 専門学校・短大
- ☐ 大学
- ☐ 大学院

Q7

あなたは現在、働いていますか。
どのような就労形態で働いていますか。

- ☐ 正社員
- ☐ 契約社員
- ☐ パート・アルバイト
- ☐ 派遣社員
- ☐ 自営業・家族従業者
- ☐ その他の就労形態
- ☐ 働いていない

Q8

昨年のあなたの年収はどれですか。

- ☐ 収入なし
- ☐ 100万円未満
- ☐ 100万円～200万円未満
- ☐ 200万円～300万円未満
- ☐ 300万円～400万円未満
- ☐ 400万円～500万円未満
- ☐ 500万円～600万円未満
- ☐ 600万円～700万円未満
- ☐ 700万円～800万円未満
- ☐ 800万円～900万円未満
- ☐ 900万円～1000万円未満
- ☐ 1000万円以上
- ☐ わからない

※調査設計上、Q9 は存在しない。

【当事者層】

AQ10

あなたは日頃、他の子育て世帯と交流する機会がありますか。
次のような人があるかどうか、それぞれ、あてはまるものを1つお選びください。
(それぞれひとつずつ)

 回答方向		いる	以前はいたが、今はいない	いない
1	子連れで一緒に外食をしたり、互いに家を訪問したりする人がある	☐	☐	☐
2	子連れで一緒に、旅行・レジャー等に行く人がある	☐	☐	☐

【非当事者層】

BQ10

あなたは次のような人を通じて、子どもと遊んだり、子どもの世話をすることがありますか。
(それぞれひとつずつ)

 回答方向		よくある	時々ある	あまりない	全くない
1	家族や親戚の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶことがある	☐	☐	☐	☐
2	友人の子どもをあやしたり、子どもと遊ぶことがある	☐	☐	☐	☐
3	(家族や友人などの)子どもの世話(食事を食べさせるなど)をすることがある	☐	☐	☐	☐

Q11

あなたはふだんの仕事を通じて、子どもや子育て世帯と接する機会がありますか。

- ☐ よくある
☐ 時々ある
☐ あまりない
☐ 全くない

AQ12

あなたは子育てに関する情報を主にどこから得ていますか。(いくつでも)

- ☐ 家族
- ☐ 友人・知人
- ☐ 近隣住民
- ☐ テレビ
- ☐ 新聞
- ☐ 書籍
- ☐ 雑誌
- ☐ インターネット検索
- ☐ SNS
- ☐ 自治体(広報誌、メール、窓口)
- ☐ 保育所、幼稚園等
- ☐ 児童館、地域子育て支援拠点などの子育て支援施設
- ☐ 産婦人科・小児科など医療機関
- ☐ その他
- ☐ 特になし

AQ13

あなたは、子育てを楽しんでいると感じていますか。

- ☐ いつも楽しい
- ☐ 楽しいと感じるときの方が多い
- ☐ 楽しいときとつらいときが同じくらい
- ☐ つらいと感じるときの方が多い
- ☐ いつもつらい

BQ12

子育て世帯の悩みや困りごとについて、見聞きする機会がありますか。
どのような人やものを通じて、見聞きますか。(いくつでも)

- ☐ 家族
- ☐ 友人・知人
- ☐ 近隣住民
- ☐ テレビ
- ☐ 新聞
- ☐ 書籍
- ☐ 雑誌
- ☐ インターネット検索
- ☐ SNS
- ☐ 自治体(広報誌、メール、窓口)
- ☐ 保育所、幼稚園等
- ☐ 児童館、地域子育て支援拠点などの子育て支援施設
- ☐ 産婦人科・小児科など医療機関
- ☐ その他
- ☐ 特になし

設問なし

(3歳未満の子どもがいる場合)

以降の設問は、3歳未満のお子さんについてお答えください。
また、可能な限り、新型コロナウイルス感染症の感染リスクや影響を考慮せず、ご回答ください。

(未就学児がいる(3歳未満の子どもはいない)場合)

以降の設問は、未就学児のお子さんについてお答えください。
また、可能な限り、新型コロナウイルス感染症の感染リスクや影響を考慮せず、ご回答ください。

(子どもがいない場合)

以降の設問では、「子ども」や「子連れ」は、赤ちゃんから小学校入学前までの子どもやその年齢の子連れの親子を指します。
また、可能な限り、新型コロナウイルス感染症の感染リスクや影響を考慮せず、ご回答ください。

【当事者層】

【非当事者層】

AQ14

あなたが子どもを連れて外出する際に、利用する移動手段はどれですか。
現在のふだんの生活において利用することがあるものを全て選んでください。(いくつでも)

- ☐ 徒歩
- ☐ 自家用車(自分が運転)
- ☐ 自家用車(家族が運転)
- ☐ 自転車
- ☐ バス
- ☐ 電車
- ☐ タクシー
- ☐ その他
- ☐ いずれも該当しない

設問なし

AQ15

電車やバスなどの公共交通機関を子どもと一緒に利用する際、周囲に対してどのように思いますか。
次の項目について、それぞれあてはまるものを選んでください。(それぞれひとつずつ)

		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	わからない
1	公共交通機関でベビーカーを利用することにあれがを感じる	☐	☐	☐	☐	☐
2	公共交通機関を子どもと一緒に利用する際、周囲の人に気を遣う	☐	☐	☐	☐	☐
3	公共交通機関を子どもと一緒に利用する際に困ったら、周囲の人に助けをもらいたい	☐	☐	☐	☐	☐

AQ16

電車やバスなどの公共交通機関を子連れで利用した際、うれしかったり、励ましてもらうような経験をしたことはありますか。
実際に経験したこととしてあてはまるものを選んでください。(いくつでも)

- ☐ 席や場所をゆずってくれた
☐ 乗り降りするときに順番をゆずってくれた
☐ ベビーカーなどの乗り降りを手伝ってくれた
☐ ベビーカーや荷物を持ってくれた
☐ 子どもに話しかけたり、あやしてくれた
☐ 子どもが落としたおもちゃや靴を拾ってくれた
☐ 優しい言葉ではげまされた
☐ 言葉はなかったが、ほほえみかけるなど好意的な態度を示してくれた
☐ その他
☐ 特にない

BQ15

電車やバスなどの公共交通機関において、子連れ親子のふるまいについてどのように思いますか。
次の項目について、どのように思うかあてはまるものを選んでください。(それぞれひとつずつ)

		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	わからない
1	公共交通機関では、ベビーカーを使うべきではないと思う	☐	☐	☐	☐	☐
2	公共交通機関では、子連れの親は周囲の人に気を遣うべきだと思う	☐	☐	☐	☐	☐
3	公共交通機関で子連れの親子が困っていたら、手助けをしたいと思う	☐	☐	☐	☐	☐

BQ16

電車やバスなどの公共交通機関を子連れで利用している親子に、次のような手助けや励ましをしたことはありますか。(いくつでも)

- ☐ 席や場所をゆずった
☐ 乗り降りするときに順番をゆずった
☐ ベビーカーなどの乗り降りを手伝った
☐ ベビーカーや荷物を持った
☐ 子どもに話しかけたり、あやしたりした
☐ 子どもが落としたおもちゃや靴を拾った
☐ 優しい言葉ではげました
☐ 言葉はかけなかったが、ほほえみかけるなど好意的な態度を示した
☐ その他
☐ 特にない

AQ17

子どもを連れて行ってみたいが、出かけることを控えている外出先はありますか。
自分一人での外出と、配偶者・パートナーと一緒にの外出それぞれについて、あてはまるものをお選びください。(それぞれいくつでも)
「その他」の場合は、具体的な場所をご記入ください。

		スーパー	ショッピングセンター・デパート	レストラン・飲食店	居酒屋	図書館	公園	美容院（子ども自身の散髪も含む）	公共交通機関（電車）	公共交通機関（バス）	その他	特になし
 回答方向												
1	自分一人と子どもとの外出	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐ 	☐
2	配偶者・パートナーとの外出	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐ 	☐

BQ17

子どもを連れて外出すること・利用することを控えてほしいと思う場所や、これまで子連れの親子がいて迷惑に感じたことがある場所がありますか。(それぞれいくつでも)
「その他」の場合は、具体的な場所をご記入ください。

		スーパー	ショッピングセンター・デパート	レストラン・飲食店	居酒屋	図書館	公園	美容院（子ども自身の散髪も含む）	公共交通機関（電車）	公共交通機関（バス）	その他	特になし
 回答方向												
1	子どもを連れて外出することを控えてほしいと思うところ	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐ 	☐
2	これまで子連れの親子がいて迷惑に感じたことがあるところ	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐ 	☐

AQ18

前問でお答えいただいた、自分一人と子どもとの外出を控えている外出先のうち、特に控えている外出先としてあてはまるものを、3つまで選んでください。(3つまで)

- ☐ スーパー
- ☐ ショッピングセンター・デパート
- ☐ レストラン・飲食店
- ☐ 居酒屋
- ☐ 図書館
- ☐ 公園
- ☐ 美容院(子ども自身の散髪も含む)
- ☐ 公共交通機関(電車)
- ☐ 公共交通機関(バス)
- ☐ その他(○○○(AQ17_1_SNT10_1回答再掲))

設問なし

AQ19

前問でお答えいただいた外出先について、それぞれ控えている理由として、あてはまるものを選んでください。(それぞれ1つでも)

		子どもが泣いたり騒ぐと困るから	周囲の人の迷惑になりそうだから	自分のほかに子どもがいないから	通路が狭いなどベビーカーの利用が難しいから	移動に困難や荷物を運ぶなど	トイレの利用・おむつ替え・授乳が不便だから	子どもにとって負担になるから (長時間の外出・人混みなど)	子どもは利用しやすいから	その他	特になし
		1	スーパー	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
2	ショッピングセンター・デパート	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
3	レストラン・飲食店	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
4	居酒屋	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
5	図書館	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
6	公園	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
7	美容院(子ども自身の散髪も含む)	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
8	公共交通機関(電車)	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
9	公共交通機関(バス)	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐
10	その他(〇〇〇(AQ17_1_SNT10_1回答再掲))	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐	☐

設問なし

AQ20

子どもとの外出先で、周りの人の助けを借りたいと思うことはありますか。
また、実際に声をかけられたり助けられたりすることはありますか。(それぞれひとつずつ)

		よくある	時々ある	あまりない	全くない
 回答方向					
1	子どもと外出中に困った際、周りの人の助けを借りたいと思うことがある	☐	☐	☐	☐
2	子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられることがある	☐	☐	☐	☐

BQ20

外出先において、困っている様子の子連れのお親を手助けしたいと思うことはありますか。
また、実際に声をかけたり手助けをしたりすることはありますか。(それぞれひとつずつ)

		よくある	時々ある	あまりない	全くない
 回答方向					
1	外出先において、困っている様子の子連れのお親を手助けしたいと思うことがある	☐	☐	☐	☐
2	外出先において、困っている様子の子連れのお親に声をかけたり、手助けすることがある	☐	☐	☐	☐

AQ21

子どもと外出中に困った際、周りの人に声をかけられたり、助けられたりすることに抵抗感がありますか。
どの程度、抵抗感がありますか。

- ☐ 抵抗感がある
☐ 抵抗感がややある
☐ 抵抗感はあまりない
☐ 抵抗感はない

BQ21

外出先において、困っている様子の子連れのお親に声をかけたり、手助けをしたりすることに抵抗感がありますか。
どの程度、抵抗感がありますか。

- ☐ 抵抗感がある
☐ 抵抗感がややある
☐ 抵抗感はあまりない
☐ 抵抗感はない

AQ22

子どもと外出した先で、周りの人から次のようなことをされたり、言われたりした経験はありますか。
実際に経験したこととしてあてはまるものを選んでください。(いくつでも)

- ☐ エレベーターに乗り降りするときに順番をゆずってくれた
- ☐ エレベーターに乗るときに場所を空けてくれた
- ☐ ベビーカーや荷物を持ってくれた
- ☐ 子どもに話しかけてくれたり、あやしてくれた
- ☐ 優しい言葉ではげまされた
- ☐ 子どもが泣く声や遊ぶ声がうるさいと言われた
- ☐ 泣いている子どもを白い目でみられたり、親に厳しい目を向けられたりした
- ☐ 子連れであることになからさまに嫌な顔をされたり、文句を言われたりした
- ☐ 子どもが叱られた
- ☐ その他
- ☐ 特にない

AQ23

子どもが公園等で遊ぶときや自宅で生活するなかで、近隣住民等に迷惑がかからないか気がなりますか。(それぞれひとつずつ)

 回答方向		そう 思う	やや そう 思う	あまり そう 思わ ない	そう 思わ ない	わ か ら な い
1	子どもが公園等で遊ぶとき、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑がかからないか気になる	☐	☐	☐	☐	☐
2	自宅で生活するなかで、子どもの泣き声や足音などが、近隣の迷惑になるのではないかと気になる	☐	☐	☐	☐	☐

BQ22

外出先で子連れの親子に対して、次のようなことをしたり、言ったりした経験はありますか。
(いくつでも)

- ☐ エレベーターに乗り降りするときに順番をゆずった
- ☐ エレベーターに乗るときに場所を空けた
- ☐ ベビーカーや荷物を持った
- ☐ 子どもに話しかけたり、あやしたりした
- ☐ 優しい言葉ではげました
- ☐ 子どもが泣く声や遊ぶ声がうるさいと言った
- ☐ 泣いている子どもを白い目でみたり、親に厳しい目を向けたりした
- ☐ 子連れであることになからさまに嫌な顔をしたり、文句を言ったりした
- ☐ 子どもを叱った
- ☐ その他
- ☐ 特にない

BQ23

公園等で子どもが遊ぶ声や自宅で生活するなかで、近隣に住む子どもの泣き声や足音などを迷惑だと思いますか。(それぞれひとつずつ)

 回答方向		そう 思う	やや そう 思う	あまり そう 思わ ない	そう 思わ ない	わ か ら な い
1	公園等で子どもが遊ぶ声を迷惑に思う	☐	☐	☐	☐	☐
2	自宅で生活するなかで、近隣に住む子どもの泣き声や足音などを迷惑だと思う	☐	☐	☐	☐	☐

AQ24

子どもが利用している保育所などは、子どもの遊ぶ声などで、近隣住民等に迷惑をかけていると感じますか。

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない
- ☐ 保育所などを利用していない

BQ24

もしあなたの自宅の隣に保育所などができるとすると、子どもが遊ぶ声などに対する不安を感じますか。

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない
- ☐ わからない

AQ25

公共の場で、あなたの子どもが泣いたり騒いだりする際、どのように思いますか。
また、他人の子どもが泣いたり騒いだりする際、どのように思いますか。
次の1～8についてどのように思うかあてはまるものを選んでください。
(それぞれひとつずつ)

BQ25

公共の場で、子どもが泣いたり騒いだりする際、どのように思いますか。
次の1～8についてどのように思うかあてはまるものを選んでください。
(それぞれひとつずつ)

 回答方向		そう 思う	やや そう 思う	あ ま り そ う 思 わ な い	そ う 思 わ な い	わ か ら な い
1	公共の場で、あなたの子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思う	1○	2○	3○	4○	5○
2	公共の場で、あなたの子どもが泣いたり、騒いだりした際、周りの人に対して申し訳なく思う	1○	2○	3○	4○	5○
3	公共の場で、あなたの子どもが泣いたり、騒いだりした際、周囲から責められるのではないかと不安になる	1○	2○	3○	4○	5○
4	この設問では「そう思わない」を選んでください	1○	2○	3○	4○	5○
5	公共の場で、あなたの子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、あなたに止める責任があると思う	1○	2○	3○	4○	5○
6	公共の場で、あなたの子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、子どもだから仕方がないことだと思う	1○	2○	3○	4○	5○
7	公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになる	1○	2○	3○	4○	5○
8	公共の場で、他人の子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになる	1○	2○	3○	4○	5○

 回答方向		そう 思う	やや そう 思う	あ ま り そ う 思 わ な い	そ う 思 わ な い	わ か ら な い
1	公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、早く泣き止んだり静かにしてほしいと思う	1○	2○	3○	4○	5○
2	公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、その親は周りの人に対して申し訳なく思うべきだと思う	1○	2○	3○	4○	5○
3	公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりした際、あたたかく見守りたいと思う	1○	2○	3○	4○	5○
4	この設問では「そう思わない」を選んでください	1○	2○	3○	4○	5○
5	公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その親は泣き止ませる責任があると思う	1○	2○	3○	4○	5○
6	公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることは仕方がないことだと思う	1○	2○	3○	4○	5○
7	公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親がその子をあやす等していても、親を責めたい気持ちになる	1○	2○	3○	4○	5○
8	公共の場で、子どもが泣いたり、騒いだりすることについて、その子の親が何もしない場合、親を責めたい気持ちになる	1○	2○	3○	4○	5○

Q26

子育てについての考えを伺います。
 次のことについてどのように考えますか。(それぞれひとつずつ)

		してもよいと思う	どちらかといえどもよいと思う	どちらかといえどもよいと思う	しない方がよいと思う	わからない
1	他人の子どもを叱ること	☐	☐	☐	☐	☐
2	他人の子どもをあやすこと	☐	☐	☐	☐	☐
3	他人の子どもをほめること	☐	☐	☐	☐	☐
4	子どもの世話の仕方について親に注意すること	☐	☐	☐	☐	☐

Q27

現在の日本社会は、子育てがしやすい社会だと思いますか。

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない
- ☐ わからない

Q28

子育ては親だけが担うものではなく、社会全体が家庭における子育てや教育を応援し、支えていくことが求められるという考え方がありますが、あなたはどのように思いますか。

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない
- ☐ わからない

Q29

現在の日本では、公共の場において、子連れの親子をあたたく見守る人や助ける人が多くいると思いますか。

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない
- ☐ わからない

設問なし

BQ30

あなたは、子どもや子育て世帯と関わることについてどのように思いますか。
(それぞれひとつずつ)

		そう 思う	やや そう 思う	あまり そう 思わない	そう 思わ ない
1	子どもとどのように接してよいかわからない	☐	☐	☐	☐
2	子育て世帯がどのようなことに困るのかわからない	☐	☐	☐	☐

AQ31

あなたが子育てをするうえで、どのような配慮や支援が必要だと思いますか。(いくつでも)

- 1 ☐ 保育サービスの充実
- 2 ☐ 教育費の支援や軽減
- 3 ☐ 子育ての経済的負担が少ないこと
- 4 ☐ 妊産婦医療や小児医療の充実
- 5 ☐ 雇用が安定していること
- 6 ☐ 仕事と育児の両立がしやすいこと
- 7 ☐ 公園や子育て支援施設など、子どもを安心して育てられる環境の整備
- 8 ☐ 地域の治安が良いこと
- 9 ☐ 親から子育てを助けてもらえること
- 10 ☐ 地域で子育てを助けてもらえること
- 11 ☐ 子連れ親子が外出しやすいこと
- 12 ☐ 子どもを生み育てることについて、社会全体の理解があること
- 13 ☐ その他
- 14 ☐ わからない
- 15 ☐ 特にない

BQ31

子育て世帯に対して、どのような社会的な配慮や支援が必要だと思いますか。(いくつでも)

- 1 ☐ 保育サービスの充実
- 2 ☐ 教育費の支援や軽減
- 3 ☐ 子育ての経済的負担が少ないこと
- 4 ☐ 妊産婦医療や小児医療の充実
- 5 ☐ 雇用が安定していること
- 6 ☐ 仕事と育児の両立がしやすいこと
- 7 ☐ 公園や子育て支援施設など、子どもを安心して育てられる環境の整備
- 8 ☐ 地域の治安が良いこと
- 9 ☐ 親から子育てを助けてもらえること
- 10 ☐ 地域で子育てを助けてもらえること
- 11 ☐ 子連れ親子が外出しやすいこと
- 12 ☐ 子どもを生み育てることについて、社会全体の理解があること
- 13 ☐ その他
- 14 ☐ わからない
- 15 ☐ 特にない

Q32

あなたは次のマークを知っていますか。
また、見かけたことはありますか。(それぞれひとつずつ)

 回答方向			知っているし、 見たことがある	知っているが、 見たことはない	知らない
1	マタニティマーク		○	○	○
2	ベビーカーマーク		○	○	○

令和２年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業

**子育て支援の社会的気運の醸成を
図るための普及啓発に係る調査研究事業
報告書**

令和３（2021）年３月

三菱ＵＦＪリサーチ&コンサルティング株式会社

住所：〒105-8501 東京都港区虎ノ門 5-11-2

電話：０３－６７３３－１０２４

FAX：０３－６７３３－１０２８